愛知学院大学考古学発掘調査報告26

岐阜県可児市

大 萱 窯 跡 群　弥 七 田 窯 跡

第１・２次発掘調査概要報告書

2018. 3

愛知学院大学文学部歴史学科

愛知学院大学考古学発掘調査報告26

岐阜県可児市

大 萱 窯 跡 群　弥 七 田 窯 跡

第１・２次発掘調査概要報告書

2018. 3

愛知学院大学文学部歴史学科

例　　言

1　本書は、岐阜県可児市久々利253-１に所在する大萱窯跡群・弥七田窯跡の第１・２次発掘調査概要報告書である。

2　発掘調査は可児市教育委員会が主体となり、愛知学院大学文学部歴史学科考古学コース教授藤澤良祐がこれに協力するという体制で実施した。第１次調査の調査概要については、愛知学院大学文学部歴史学科2017『大萱窯跡群弥七田窯跡第１次発掘調査概要報告書』に記されているのでここでは省略する。

　第２次調査は、３年次の「考古学専門実習Ｂ」の専攻生である井上雄介・勝野友陽・加藤竜生・田口芽依・中田智也・長縄憲治・前田真奈・松岡里奈・脇田遼、２年次の「考古学基礎実習Ｂ」の専攻生である赤山純里・猪飼充・大森裕朗・大矢敬子・糟谷貴幸・川端ちえ美・田浦舞衣・西森睦月・安田彩音・山田紗希の参加のもと、平成28年８月15日から８月27日にかけて実施した。

3　発掘調査にあたって、可児市教育委員会の長瀬治義・長江真和氏、荒川豊蔵資料館の加藤桂子氏をはじめ、丸山組・元久々利組の皆様には調査に対してご理解をいただき格別なご配慮を賜った。なお発掘調査には、本学非常勤講師の中野晴久、研究員の山本智子、文学研究科大学院生の森まどか・森村知幸・伊藤真央・田中良・大脇浩平、同４年生の木藤穣・小林万容・佐藤美鈴・鈴木愛実・髙野夏姫・三ツ本樹純の参加を得た。

4　出土遺物の整理および報告書の作成は、引き続き専攻生によって４年次の「考古学専門演習Ｂ」、および３年次の「考古学基礎演習Ｂ」において、平成28年９月から平成30年１月にかけて実施した。また平成29年９月からは２年次の「考古学基礎講読Ｂ-Ⅱ」の一環として、加藤怜・子安優翼・坂井航・下田大真・福田治也・万年美紀・山田美咲が参加した。

5　本書は専攻生が分担して執筆し、執筆者名は各文末に記した。編集は藤澤と大学院修士課程の伊藤真央・髙野夏姫が行った。なお報告者作成にあたっては、可児市教育委員会の長江真和氏に多大なるご助力をいただいた。

6　発掘調査に係わる記録類は、愛知学院大学文学部歴史学科考古学整理室に保管している。

目　　次

第１章　発掘調査に至る経緯…… 1

第２章　遺跡の立地と環境…… 2

第３章　大萱窯跡群の研究史…… 4
　第１節　戦前の研究…… 4
　第２節　戦後間もなくの研究…… 5
　第３節　大窯期以降の編年研究の始まり…… 6
　第４節　その後の編年研究…… 7

第４章　発掘調査の経過…… 9

第５章　検出された遺構…… 11
　第１節　第１次調査…… 11
　第２節　第２次調査…… 19

第６章　出土遺物の概要…… 27
　第１節　碗類…… 27
　第２節　皿・向付類…… 31
　第３節　調理鉢類…… 33
　第４節　その他…… 37
　第５節　窯道具類…… 37
　第６節　溶着資料および天井支柱…… 46

第７章　小結…… 52
　第１節　遺物について…… 52
　第２節　遺構について…… 53

引用・参考文献…… 56

後論…… 57

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第１図　岐阜県可児市位置図 …… 1
第２図　旧可児市の地形 …… 2
第３図　旧可児市の地質 …… 3
第４図　土岐川以北の
大窯･連房式登窯分布図 …… 4
第５図　第２次調査区位置図 …… 8
第６図　第１次調査区全体図 …… 12
第７図　第１次調査Ａ区遺構図 …… 13
第８図　第１次調査Ｂ区遺構図 …… 14
第９図　第１次調査Ｃ１区遺構図 …… 16
第10図　第１次調査Ｃ２区遺構図 …… 17
第11図　第１・２次調査位置図 …… 18
第12図　第２次調査Ｄ区遺構図 …… 20
第13図　第２次調査Ｅ区遺構図（１）…… 22
第14図　第２次調査Ｅ区遺構図（２）…… 23
第15図　第２次調査Ｆ区遺構図 …… 25
第16図　第１・２次調査出土遺物（１）…… 28
第17図　第１・２次調査出土遺物（２）…… 29
第18図　第１・２次調査出土遺物（３）…… 30
第19図　第１・２次調査出土遺物（４）…… 34
第20図　第１・２次調査出土遺物（５）…… 35
第21図　第１・２次調査出土遺物（６）…… 36
第22図　第１・２次調査出土遺物（７）…… 38
第23図　第１・２次調査出土遺物（８）…… 40
第24図　第１・２次調査出土遺物（９）…… 41
第25図　第１・２次調査出土遺物（10）…… 43
第26図　第１・２次調査出土遺物（11）…… 44
第27図　第１・２次調査出土遺物（12）…… 45
第28図　第１・２次調査出土遺物（13）…… 47

表目次

第１表　第2次調査D区出土遺物台帳 …… 48
第２表　第2次調査E区出土遺物台帳 …… 48
第３表　第2次調査F区出土遺物台帳 …… 48
第４表　第２次調査全体（表採）
出土遺物台帳 …… 48
第５表　第1･2次調査出土遺物計測表 …… 49
第６表　弥七田窯跡出土の碗類編年表 …… 52
第７表　第1･2次調査出土遺物個体数 …… 53
第８表　窯印器種別集計表 …… 54
第９表　連房式登窯導入における
天目茶碗編年表 …… 55

写真図版目次

図版１　第２次調査Ｄ区関係（１）
図版２　第２次調査Ｄ区関係（２）
図版３　第２次調査Ｄ区関係（３）
図版４　第２次調査Ｅ区関係（１）
図版５　第２次調査Ｅ区関係（２）
図版６　第２次調査Ｅ区関係（３）
図版７　第２次調査Ｆ区関係（１）
図版８　第２次調査出土遺物（１）
図版９　第２次調査出土遺物（２）
図版10　第２次調査出土遺物（３）
図版11　第２次調査出土遺物（４）
図版12　第２次調査出土遺物（５）
図版13　第２次調査出土遺物（６）
図版14　第２次調査出土遺物（７）

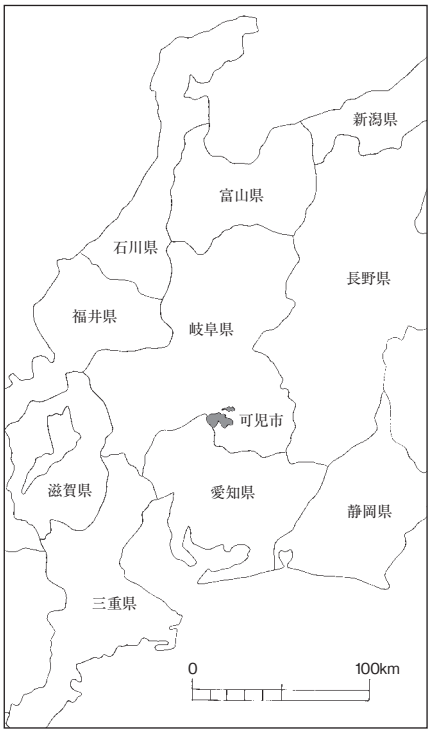
第１章　発掘調査に至る経緯

愛知学院大学文学部では、平成14年度に歴史学科に考古学コース（先史考古学・歴史考古学）を開設し、新入生が３年次となる平成16年度には、考古学の基礎技術を習得するための必修科目として「考古学実習」を開講し、合宿形式により遺跡の発掘調査を実施することになった。そして平成18年度からはより高度な技術習得のため、従来の「考古学実習」を、２年次の「考古学基礎実習」と３年次の「考古学専門演習」に分離し、２年次から発掘調査に参加することになった。調査地の選定にあたって、本学が所在する東海地方は古代以来の窯業生産の中心地域で、数多くの窯跡が分布し古くから考古学的調査が行われていること、近年では中世窯・近世窯の生産や流通に関する調査研究が盛んであることから、歴史考古学専攻では窯業遺跡の発掘調査を実施したいと考えていた。

はじめに発掘調査に着手したのは岐阜県中津川市に所在する中津川窯で、中世中津川窯は昭和33年に発掘調査が初めて実施され研究の歴史が古いにも拘らず、生産の実態について不明な点が多いことから、中津川市教育委員会の協力のもと、考古学実習の初年度に当たる平成16年度には尻無１号窯跡の試掘調査を、平成17年度には上県２号窯跡の試掘調査を実施した。このうち上県２号窯跡は窯の遺存状況が良好であったため、平成18年度から平成24年度にかけて５基の窯の発掘調査を行い、平成25年度には実測図を作成し一応の調査が終了した（愛知学院大学2006～2015）。

さて平成24年度以降、歴史考古学専攻では次なる調査地の選定を進めていたが、そのような折、可児市教育委員会より、岐阜県指定史跡である大萱窯跡群（美濃窯跡群大萱支群）の国指定史跡を目指すため、指導組織として「大萱古窯跡群調査・保存・整備指導委員会」を設置し、発掘調査を実施したいので協力できないかとの打診があった。大萱窯跡群は、牟田洞・大萱窯下・弥七田の３窯跡から構成され、昭和初期には牟田洞は荒川豊蔵氏、大萱窯下は加藤唐九郎氏によって調査されており、黄瀬戸・瀬戸黒・志野・織部といったいわゆる桃山茶陶を生産した窯跡群として著名である。ただし出土遺物については多くの書物で紹介されているが、正式な学術調査は実施されていないため遺跡や遺構の実態については不詳であった。隣接する土岐市では元屋敷窯跡をはじめ多くの大窯や連房式登窯の発掘調査が行われ実態の解明が進んでいるが、可児市域では当該期の窯跡の発掘調査は皆無であり、美濃窯土岐川以北における桃山茶陶生産の地域性を考える上で極めて重要な発掘調査となることは確実であった。

そこで歴史考古学専攻としては、可児市教育委員会に協力するという体制で「考古学実習」を行うこととし、平成25・26年度には牟田洞窯跡の発掘調査を実施した（愛知学院大学2016）。そして、平成27年度には、弥七田窯跡の発掘調査に着手し窯体の一部を検出し（愛知学院大学2017）、最終年度である平成28年度には、窯体構造の解明をめざして弥七田窯跡の第２次調査を実施した。　（藤澤良祐）

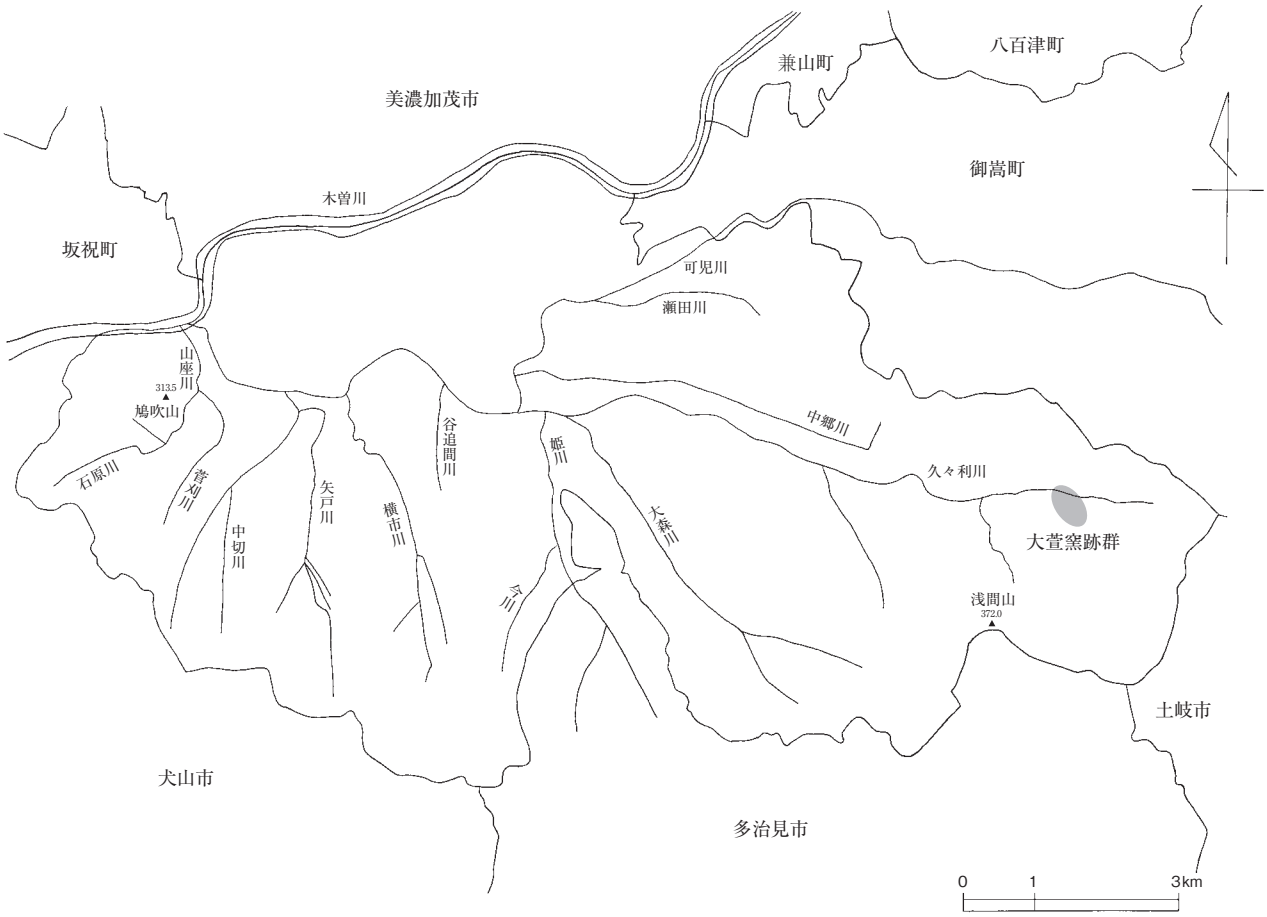


第１図　岐阜県可児市位置図

第２章　遺跡の立地と環境

岐阜県可児市は、岐阜県の中南部に位置し、中部圏の中心都市である名古屋市および岐阜県の県庁所在地である岐阜市から30km 圏である。1982年に可児町が市制を施行し誕生した。2005年には可児郡兼山町を合併し現在に至る。北西部は木曽川を挟んで美濃加茂市、北東部は可児郡御嵩町、東部は土岐市、南部は多治見市、西部は愛知県犬山市と接し、面積は約84.9㎢である。ただし、弥七田窯跡が所在する大萱古窯跡群は旧可児市域に所在するため、ここでは旧可児市の地形と地質について概述する。

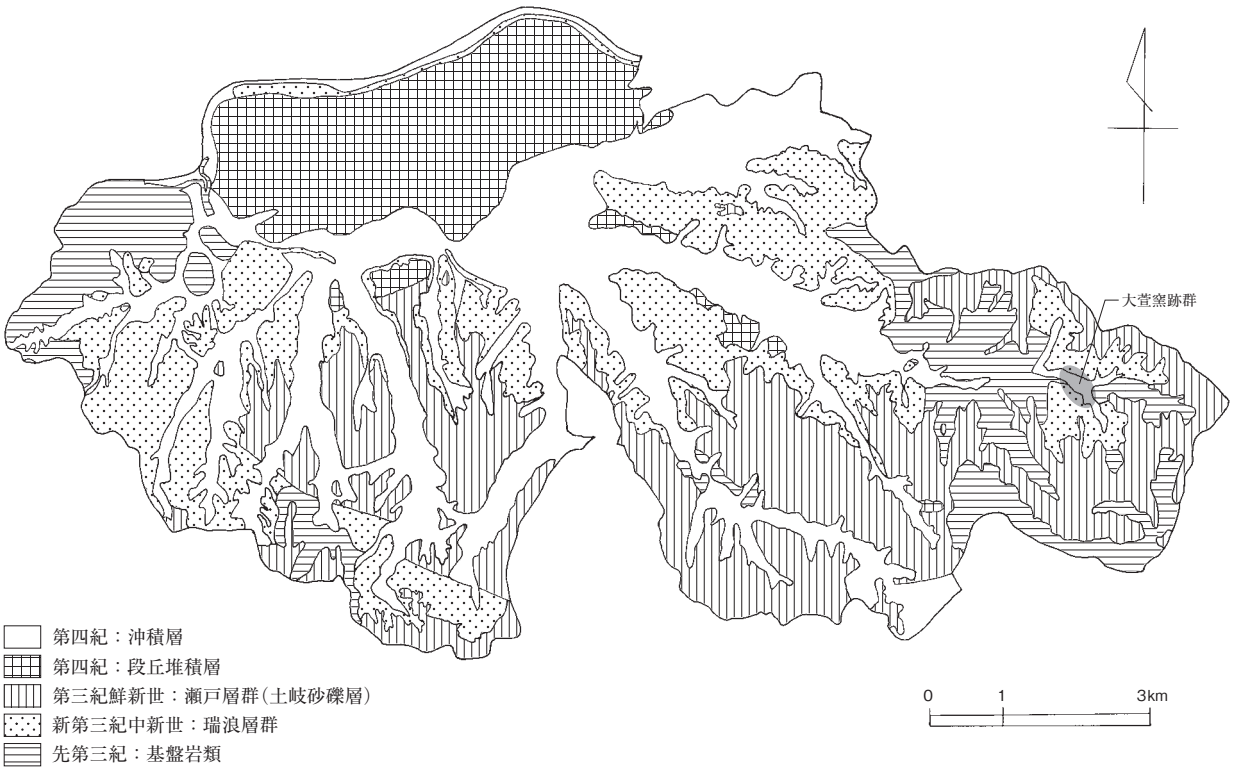
旧可児市は美濃加茂市、加茂郡坂祝町、同川辺町、同八百津町に広がる盆地状の地形の一角にある。市内では、木曽川左岸や可児川、久々利川の流域沿いに平地がみられ、市の北部を除くと平地の周りを山地が取り囲んでいる。標高は、一番低い地点が市北西部木曽川の市内最下流地点の44ｍ、一番高い地点が市東部の浅間山山頂372ｍである。北端には、木曽川が流れており、源流は長野県木祖村の鉢盛山である。また、旧可児市を東から西にほぼ横断するように可児川が流れている。源流は、御嵩町の松野湖で、市の北西部で木曽川に合流している。東部から発する久々利川は、市の南から流れる大森川や姫川を集めて、市のほぼ中央部で可児川と合流している。これらの流域は、河川の堆積作用により平地



第２図　旧可児市の地形（可児市2007を基に作成）

となっている。木曽川の両岸には、河岸段丘が形成され、市内においては、主に木曽川と可児川に挟まれた地域で河岸段丘独特の地形がみられる。段丘は大きく、高位段丘、中位段丘、低位段丘の三つに分けることができ、高位ほど形成時期が古くなる。また、高位段丘と中位段丘はさらに２段に、低位段丘はさらに数段に分けることができる。旧可児市の約３分の２は山地であるが、山地を形成している岩石が浸食を受けやすく、山地の標高の大部分は、150ｍから300ｍである。そのため平坦でなだらかな丘陵地となっている。標高が300ｍを超えるのは、市東部の浅間山（372ｍ）と西部の鳩吹山（313ｍ）である。この地域は、チャートなどの比較的固い岩石からできている。そのため、この地域の山地は、浸食を受けにくく谷が少ない（可児市2007）。

旧可児市とその付近の地質は、美濃帯中世層を基盤として、新第三紀の瑞浪層群・瀬戸層群、第四紀の段丘堆積物などの堆積物が覆って分布している。瀬戸層群は約2500～1900万年前に古木曽川により形成され、下位から、土岐口陶土層、土岐砂礫層に大別される（可児市2007）。多治見市、土岐市、瑞浪市、恵那市、中津川市、旧可児市に広く分布し、土岐口陶土層は多治見市、土岐市付近にもっともよく発達している。旧可児市内には土岐砂礫層が見られ、土岐口陶土層は分布していない。大萱古窯跡群は主に瑞浪層群の平牧層に分布している（斎藤基生1989）。（森村知幸）



第３図　旧可児市の地質（可児市2007を基に作成）

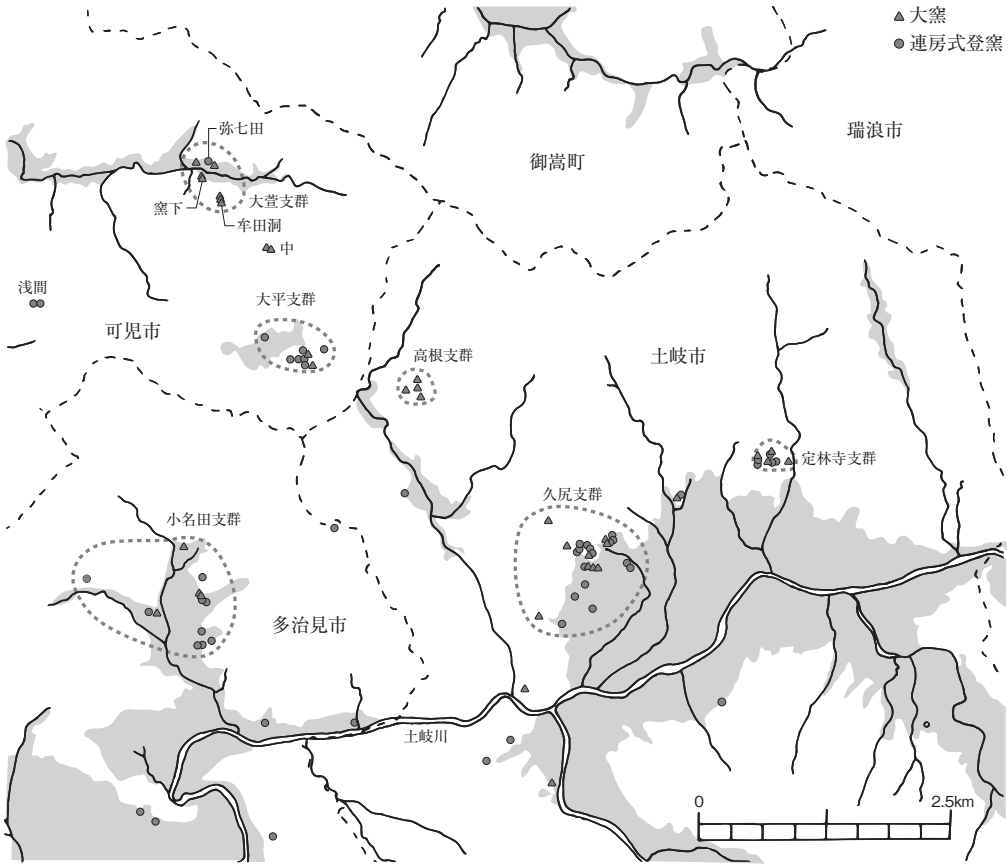
第３章　大萱窯跡群の研究史

土岐川以北の大窯・連房式登窯は大きく可児郡側と土岐郡側に分けられ、土岐郡側には久尻支群・小名田支群・高根支群・定林寺支群が存在している。可児郡側には大平支群・大萱支群が存在しており、今回調査した大萱支群における大窯は牟田洞窯・窯下窯・向林窯・若林窯・岩ヶ根窯が、連房式登窯は弥七田窯が『可児市史』で紹介されている（可児市2005）。しかし、実際に窯跡が確認されているのは牟田洞窯跡・大萱窯下窯跡・弥七田窯跡の３基のみである。

第１節　戦前の研究

大萱窯跡群の研究は昭和５年（1930）、陶芸家で後に人間国宝となる荒川豊蔵氏が、名古屋でみた志野筍絵向付と同じ絵付けの陶片を、牟田洞窯跡で発見したことに始まる。当時、桃山茶陶は窯跡の実態が不明のまま、瀬戸で焼かれたといわれていたが、荒川氏により桃山茶陶は美濃で焼かれていたことが明らかになり、大萱窯跡群は多くの人に知られるところとなった。その後、大発掘ブームが起こり、窯の調査が進んでいく契機となる。

昭和７年（1932）、陶芸家の加藤唐九郎氏は窯下窯の発掘調査を行った。そして、窯下窯で多くの黄瀬戸を焼成していたことを明らかにし、焼成年代を決める「文禄二年（1593）八月」銘の黄瀬戸皿が発見された。そして加藤氏は黄瀬戸を瓷器手・グイ呑手・アヤメ手・菊皿手の４種に分類し、その中のグ



第４図　土岐川以北の大窯・連房式登窯分布図（高橋他2006を一部改変）

イ呑手、アヤメ手を以って本格的な黄瀬戸として扱う考えを示した（加藤1933）。

その後、高木康一氏は加藤氏が行った分類を扱って、アヤメ手のみを黄瀬戸とし、志野とともに黄瀬戸を焼成しない窯をＡ類に、する窯をＢ類に分類した。また、志野では無地志野・線刻志野・鼠志野・赤志野・紅志野・練上手志野の６種に分類を行い、黄瀬戸とともに志野を焼いている窯をＡ類に、黄瀬戸がみられない窯をＢ類に、さらにＡ類・Ｂ類でみられたいわゆる桃山茶陶の志野ではないものを焼いている窯をＣ類に分類を行った。この志野Ｃ類は土岐川以南の恵那郡側に立地する窯であり、志野Ａ類（黄瀬戸Ｂ類）の窯では黄瀬戸が志野より下層から出土していたことから、高木氏は志野Ａ類・Ｂ類・Ｃ類を時期差と考えていると推測される。織部では織部黒・青織部・赤織部・白釉手織部の４種に分類して、織部全盛期で優れたものを焼いている窯をＡ類に、織部末期頃のものだが精巧ものを焼いていた窯をＢ類に、Ｂ類より下手物を焼いていた窯をＣ類に分類し、同様に時期差のように考えていたと思われる。瀬戸黒は分類こそ行われていないものの、技法や形態的特徴のほか織部の窯から出土する黒茶碗を織部黒、黄瀬戸・志野窯から出土する切立型の底の平らな茶碗を瀬戸黒とすると、瀬戸黒は黄瀬戸Ａ類・Ｂ類、およびＣ類以外の志野の窯で焼かれていることを述べている。この中で、牟田洞窯跡・大萱窯下窯跡は黄瀬戸Ｂ類・志野Ａ類に、弥七田窯跡は織部Ａ類に分類されている（高木1936）。

また、加藤唐九郎氏は『美濃古窯文書』の紹介を行い（加藤1936）、その中の「大萱竈之記」によると、大萱には窯之坂窯（源十郎控窯・現在の牟田洞窯）に５基、窯下窯（四右衛門窯）には２基、岩ヶ洞窯（伝七窯）には１基、向林窯（徳右衛門窯）には２基、若林窯（志郎三郎窯）には２基、八剣招窯（忠蔵窯・現在の弥七田窯）には１基の窯があったと記している。この『美濃古窯文書』の紹介により、文献における研究も活発に行われていくようになる。

第２節　戦後間もなくの研究

昭和28年（1953）、加藤土師萌氏は織部焼を体系的にまとめ、志野を高木氏の分類に絵志野を加えた７種に、織部を青織部・鳴海織部・赤織部・黒織部・志野織部・伊賀織部・唐津織部の７種に分類した。この中で志野の発祥を牟田洞窯に求めており、青織部系の窯は久尻・大平・大富とまとまっているのに対して、大萱に属する弥七田窯は若干距離を置いているもので、他の青織部に比べ特異性のあるものを焼いていると評している（加藤1953）。

また、一瀬武氏は大萱窯の開祖である源十郎景成の開窯時期に関して、景春系譜では景春の三男で大萱開業は天正５年（1577）となっているのに対し、大平系譜では景豊の二男で開窯は慶長６年（1601）となっており、これは景成が天正14年ごろ笠原村へも行っていることなどから年代が混同視されているのではとの指摘を行った（一瀬1966）。さらに大萱支群について、「中窯は志野、黄瀬戸を焼き、牟田洞は最も古い窯で黄瀬戸、天目、志野、織部を焼いている。窯下の黄瀬戸は大平・浅間よりも新しいがその製品は技術的にすぐれているようである。弥七田は織部、黒織部を焼き、」と相対的な操業順序を述べている。

昭和37年（1962）、小山富士夫氏は大萱窯跡群では窯跡が牟田洞・窯下・中・弥七田の四か所が確認されていることを記しており、現在滅失してしまっている中窯の痕跡が当時は確認されたことを示している。また、牟田洞窯と窯下窯については窯跡の位置、窯数、焼成品、開窯の由来について述べており、さらに中窯では紅志野が多く出土していると記している（小山1967）。

昭和40年（1965）には荒川豊蔵氏が志野を体系的にまとめ、古文書等から志野の起源と名称を考察

している。また、荒川氏は大萱にみられる牟田洞窯・窯下窯・中窯・弥七田窯について、「大萱竈之記」にある「竈之段竈」源十郎控竈が牟田洞窯、「若林竈」「向林竈」がおそらく中窯であるとしている。志野の分類に関しては無地志野・絵志野・鼠志野・赤志野・紅志野・練り込み志野の６種に分類が行われている（荒川1965）。一方、奥磯氏は荒川氏の考えとは異なり、若林窯・向林窯を中窯とは別のものと考えている（奥磯1971・1976）。

また加納陽治氏は、高木氏が弥七田窯跡の資料採集を行った際に窯体について述べた感想ノートを紹介しており、それによると「大萱弥七田窯跡中、その東側にある窯は斜床連房式登り窯であり、幅五尺、奥行四尺、狭間は四角の柱をもって形成せられて居ること。および、発掘の結果によれば窯床は上下二重になって居る点よりして古き窯床の上に新しい窯床を設けてあること。窯の側壁は古き窯と全く同一の窯を築きたるものの如きこと。窯の後部の窯天井の残れるものより考うるに、この窯の天井の高さは精々三尺までにして、到底人が自由に立って出入し得る如き程のものには非ること。また窯の出入口は左側方にありしものなること。窯の両側の斜面に数箇の段らしものあるは、久尻元屋敷、清安寺西、御深井窯跡等においても散見する所なれども弥七田古窯跡の左方出入口の所に同様に段あるを見れば、これは明かに窯詰、差木の便に設けられた段なること。今日の登窯におけるが如くなるべし」と記されている（加納1973）。この文章の、「東側にある窯」というのは１基の窯が東にある窯ということなのか、東面に２基並んで窯があったということなのか、また「窯床は上下二重になって居る」というのが１基の窯の床面に２面構築されていたのか、別の窯の床面を指すのかといった解釈が可能であり、詳細は不明のままである。

第３節　大窯期以降の編年研究の始まり

昭和48年（1973）、楢崎彰一氏を中心に美濃古窯研究会が結成され、昭和51年に『美濃の古陶』が刊行された。これは昭和44～46年（1969～1971）にかけて中央自動車道建設に伴い行われた発掘調査によって、考古学的研究が進み、古代から近世に至る美濃窯業史の流れと問題点を段階ごとにまとめたものであった。この中で楢崎氏は美濃窯における大窯期の編年を行っており、大窯期は窯の様相からⅠ期からⅤ期に細分され、Ⅰ期に小名田窯下１号窯、Ⅱ期に藤四郎窯・妙土窯、Ⅲ期に尼ヶ根窯１号窯・定林寺東洞１号窯、Ⅳ期に山之神窯・浅間窯、Ⅴ期に牟田洞窯・大富西窯を標識窯として設定した。そして、Ⅰ期が16世紀の初頭に、Ⅲ期が天文年間に、Ⅳ期が天正以前、Ⅴ期が天正年間に展開したと推測し、各期におおよそ20年の幅を与えている。またⅢ期に瀬戸黒が、Ⅳ期に灰志野・黄瀬戸が、Ⅴ期に志野が出現するとしている（楢崎1976）。

さらに、今井静夫氏は美濃大窯の分布と立地についてまとめており、窯体規模・品種・製造技術から主に志野製品の主体として大きく３期に分けている。大窯で試作期の志野製品が登場する以前の窯として、笠原町妙土・陶ヶ丘窯、土岐市妻木町グミノ木・窯下１号・窯下２号窯、土岐津町藤四郎窯、泉町丸石東・深沢・赤サバ・東洞１号窯、駄知町坊洞・有古窯、多治見市小名田町小名田窯下１号・白山・尼ヶ根１号窯、瑞浪市陶町田尻下窯が挙げられている。次段階には志野試作期の窯として、尼ヶ根２号・大平山之神・中の１窯・定林寺西洞１号・隠居表・隠居西・元屋敷付近の１窯・妻木窯下３号・牟田洞の１窯が挙げられ、地域によって若干隔りがみられると指摘している。志野最盛期の大窯が集中し桃山茶陶を代表する窯場としては、大萱・大平・久尻・陶地域が挙げられており、特に秀品の志野を焼いている窯場は大萱で、大平・久尻が次に次ぐものであり、このことは大窯から連房式登窯へと繋がる深い

関係があると推測している（今井1976）。

なお、奥磯栄麓氏は大萱窯跡群の年代観について、牟田洞窯跡は志野全盛期の窯であり焼成年代最下限を文禄２年頃に、窯下窯は黄瀬戸・志野を焼成した窯で操業年代は1585～1600年頃に、弥七田窯跡は絵志野や織部、美濃青磁（御深井）などの代表的なものを焼成しており操業年代は1610～1630年頃の窯と推測している。向林窯は明治初期に破壊され消滅してしまったが、田畑一面から出土した陶片から1585～1600年頃までと推定され、絵志野では牟田洞窯・窯下窯にはないものがあり、久尻元屋敷窯とやや時期が重なる。若林窯は窯下窯と向林窯出土の遺物に類似し、年代は同じころのものと示している（奥磯1976）。

その後昭和58年（1983）に五島美術館においてシンポジウム「江戸のやきもの」が行われ、楢崎彰一氏は近世美濃窯をⅠ期からⅤ期の五つに区分を行って発表し、この編年観によって近世美濃編年の基礎が構築され始めていく（楢崎1983）。

第４節　その後の編年研究

井上喜久男氏は『美濃の古陶』の大窯５期区分の基準資料を紹介し、牟田洞窯跡や窯下窯跡が最終のⅤ期にあたる見解を示している（井上1988）。

さらに斎藤基生氏は、荒川豊蔵氏の収集品で牟田洞窯跡出土と断定できるものだけを扱い、遺物の報告を行っており、焼成器種や特徴、窯体から従来いわれている16世紀後半の、井上氏に同じく大窯Ⅴ期に該当するものであると述べている（斎藤1989）。

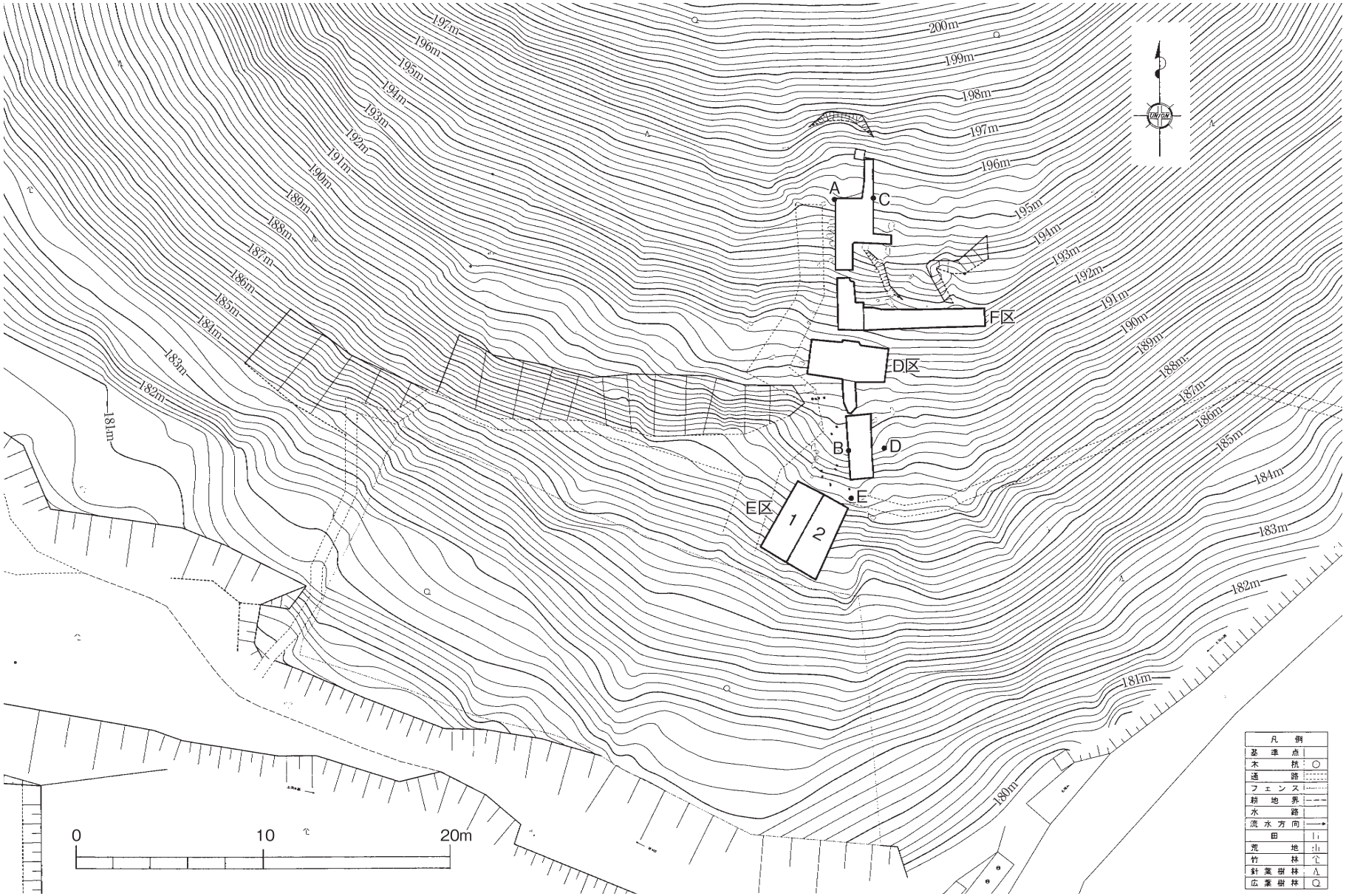
平成２年（1990）、楢崎彰一氏は大窯後半期を含め近世美濃窯の編年を６段階15窯式に編年し、第１段階（美濃大窯Ⅲ～Ⅴ期）を尼ヶ根窯式・浅間窯式・牟田洞窯式の３時期に、第２段階（連房Ⅰ）を元屋敷窯式・窯ヶ根窯式の２時期に、第３段階（連房Ⅱ）を清安寺窯式・田ノ尻窯式の２時期に、第４段階（連房Ⅲ）を乙塚東窯式・可児郷窯式・下原窯式・上手向日向窯式の４時期に、第５段階（連房Ⅳ）を平野東窯式・水神Ⅰ窯式・水神Ⅱ窯式の３時期に、第６段階（連房Ⅴ）を白粉窯式に細分を行った。そして、第１段階を16世紀後葉から17世紀初頭に、第２段階を17世紀前半に、第３段階を17世紀中葉に、第４段階を17世紀後葉から18世紀中葉に、第５段階を18世紀後葉から19世紀前半に、第６段階を19世紀中葉から後半に比定した。

さらに、田口昭二氏は楢崎氏の編年観を踏襲しながらも、一部に遺物の型式を捉えて、近世美濃５期編年の連房Ⅲ期を３時期に、連房Ⅳ期を２時期に、連房Ⅴ期を明治初期まで含めて２時期に細分し、５期９小期に編年を行った。そして、弥七田窯跡を連房Ⅰ期の後半代に位置付けている（田口1993）。

さらに『可児市史』では、各窯の出土遺物について述べられ、大窯では藤澤良祐氏の瀬戸美濃大窯編年を（藤澤2002）、連房式登窯では田口氏の編年を使用し、これらの編年から大萱窯下窯は大窯第４段階～連房Ⅰ期前半、牟田洞窯は大窯第４段階、弥七田窯は連房Ⅰ期後半～Ⅱ期前半に比定している。また、若林窯・向林窯は中窯と別ものとされており、現在ではこの考えが主流であるが、若林窯・向林窯に関しては窯体が滅失しているため、不明のままである（可児市2005）。

美濃における大窯後半期から連房式登窯導入期の窯場について、土岐郡側の久尻地区では発掘調査や研究が盛んに行われてきた。しかし、可児郡側では窯の調査が行われておらず、様相があまりわかっていない。今後の発掘調査を通して、可児郡側における窯の実態を探ることが、美濃における近世窯業の研究に必要となってきている。

（森まどか）



第５図　第２次調査区位置図

第４章　発掘調査の経過（発掘調査日誌）

平成28年８月15日（月）曇りのち晴れ

午前９時に学校に集合し、発掘道具を積み込んでから現地に向けて出発した。現地に到着後、弥七田窯跡の試掘範囲を確認するために、周辺の清掃と土嚢の撤去作業を行った。一応の清掃作業が終了したため、Ａ・Ｂ・Ｃの３班に分かれ作業を開始した。Ａ班の調査区をＤ区、Ｂ班の調査区をＥ区、Ｃ班の調査区をＦ区とし、各班とも調査前の写真撮影を行ったのち調査区の設定を行った。

８月16日（火）晴れ

各班とも設定した調査区の写真撮影を行ったのち、表採と腐植土の除去を行った。各調査区ともに表採と腐植土の除去後に写真撮影を行い、掘り下げを開始した。Ｄ区では、東西4.16ｍ、南北1.78ｍの調査区を設定し、北西の杭を杭Ａとして杭Ａから南に1.0ｍ地点に釘を打ち、調査区を四分割した。北西をＤ１区、北東をＤ２区、南西をＤ３区、南東をＤ４区とし、Ｄ１・Ｄ４区から掘り下げを行った。Ｄ１区では壁面、Ｄ４区では床面を追いながら壁面の検出作業を進めた。Ｅ区では、東西1.5ｍ、南北4.15ｍの調査区を設定し、調査区の北側から石組みが検出されたため、引き続き掘り下げ作業を行った。Ｆ区では、杭Ａ～Ｄによって東西5.04ｍ、南北1.0ｍの調査区を設定し、掘り下げを行った。

８月17日（水）晴れ

Ｄ区では、Ｄ１区で引き続き壁面の検出作業を行い、Ｄ４区では床面を追いつつ作業を行ったところ壁面が検出されため、清掃を行ったのち、掘り下げを進めた。Ｅ区では、北側から焚口らしきものが検出されたため、杭Ｂから西に幅20cm のサブトレンチを設定し、杭Ｂから南に1.0ｍ地点より土層を確認しながら掘り下げを行った。Ｆ区では、調査区を東西に二分割し、杭Ａから西に3.25ｍ、南に1.0ｍをＦ１区、杭Ａより西に3.25ｍ地点（杭Ａ′）から西に1.79ｍ、南に1.0ｍをＦ２区とした。Ｆ１区では、引き続き砂岩の検出を行い、砂岩の岩盤が地山であることを確認した。Ｆ２区では、引き続き床面検出のため掘り下げを進めた。

８月18日（木）晴れ時々雨

Ｄ区では、Ｄ１区で引き続き側壁及び天井支柱の検出と南壁の清掃を行った。Ｄ２区で新たに掘り下げを開始し、右側壁の検出を目指した。Ｄ４区では、床面の清掃と写真撮影をし、杭Ｂから南に1.0ｍ地点の北壁土層断面図の作成を開始した。Ｅ区では、引き続き床面検出のため掘り下げを進めた。床面が検出されたため、床面に合わせながら全体的に掘り下げた。その後、杭Ａから1.0ｍ地点の北壁土層断面図の作成を開始した。Ｆ区では、引き続きＦ１区の砂岩の地山検出を目指した。Ｆ２区でもＦ１区で検出された砂岩の地山が続くことが確認された。

８月19日（金）晴れ

Ｄ区では、Ｄ１区の南壁の清掃と写真撮影を行い、南壁土層断面図の作成を開始した。Ｄ２区では、東側の壁面、柱穴の痕跡を検出した。Ｄ３区で新たに掘り下げを開始し、床面と側壁の検出を目指した。Ｄ４区では、検出された床面の清掃を行った。Ｅ区では、引き続き杭Ａから1.0ｍ地点の北壁土層断面図と東壁土層断面図の作成を行った。その後、検出された床面の繋がりを確認するために調査区を杭Ｂから東に2.0ｍの拡張を行った（杭Ｅ）。拡張区設定後、調査前の写真撮影、表土の除去を行った。Ｆ区では、全体の清掃を行ったのち写真撮影を行い、北壁と西壁の土層断面図の作成を開始した。

８月20日（土）晴れ

Ｄ区では、Ｄ１区で引き続き南壁土層断面図の作成を行った。Ｄ２区は柱穴の検出を行いつつ、清掃を行った。Ｄ３区では、床面と側壁の検出をするために引き続き掘り下げ作業を行った。Ｄ４区で床面の清掃を行いつつ、天井支柱と思われる柱が検出されたため、南側の天井支柱を確認するために南側の釘からそれぞれ0.1ｍの拡張を行った。Ｅ区では、拡張区上方から狭間柱を検出し、狭間柱の間に隔壁と思われる壁面を検出した。さらに、床面が検出されたため、さらに拡張区を杭Ｅより南に4.15ｍ地点までとした。Ｆ区では、引き続き北壁・西壁土層断面図の作成を行ったのち、南壁・東壁土層断面図と平面図の作成を開始した。

８月21日（日）晴れ

Ｄ区では、Ｄ３区とＤ４区の拡張区を掘り下げたところ、天井支柱の痕跡を検出した。その後、全体の清掃作業を行ったのち、写真撮影を行った。Ｅ区では、引き続き拡張区の掘り下げ作業を進めたところ、中央から下方にかけて床面と側壁が確認された。Ｆ区では、全ての土層断面図を完成させたのち、調査区の西側で検出された裏込と思われる石の状況を確認するため、杭Ａから西に5.04ｍ地点（杭Ｄ）より、西に0.96ｍの拡張を行った。なお、拡張区をＦ３区とし、掘り下げ作業を開始した。

８月22日（月）晴れ

Ｄ区では、引き続き全体の清掃作業と写真撮影を行ったのち、北・南壁土層断面図の作成を開始した。Ｅ区では、調査区を東西3.5ｍ、南北4.15ｍとした。さらに、杭Ａから東に1.5ｍ、南に4.15ｍの調査区をＥ１区、拡張区をＥ２区とした。Ｅ２区では、調査区上方で床面の検出、下方では検出された床面と側壁の清掃作業を行った。Ｆ区では、引き続きＦ３区の掘り下げ作業を進め、西側に側壁らしきものが検出されたことから、昨年度の調査区との繋がりを確認するため、杭Ｂから西に6.0ｍ地点（杭Ｆ）より、西に0.5ｍの拡張を行った。

８月23日（火）晴れ

Ｄ区では、引き続き北・南壁土層断面図の作成を行いつつ、割付を開始した。Ｅ区では、Ｅ２区で引き続き床面の検出を行ったのち、全体の清掃作業を行った。その後、写真撮影を行い、北・西壁土層断面図の作成を開始した。Ｆ区では、引き続きＦ３区で掘り下げを行ったところ床面が検出されたため、清掃作業と写真撮影を行い、拡張区の北・南壁土層断面図及び、Ｆ１区・Ｆ２区の平面図の作成を開始した。

８月24日（水）晴れ一時雨

Ｄ区では、引き続き割付を行い、平面図の作成を開始した。Ｅ区では、引き続き土層断面図の作成を行った。さらに、平面図作成のため、割付を開始した。Ｆ区では、全ての土層断面図・平面図を完成させた。

８月25日（木）晴れ

Ｄ区では、平面図を完成させたのち、窯体の中軸を設定し、見通し図、縦断面図の作成を開始した。Ｅ区では、全ての土層断面図を完成させ、Ｅ１区・Ｅ２区の平面図の作成を開始した。同時進行で出土遺物の洗浄作業を進めた。

８月26日（金）晴れ

各調査区ともに平面図、見通し図、縦断面図の作成が完了し、現場保護のため各調査区にブルーシートを掛け、遺物や測量において最低限使用するもの以外の機材を大学の方へ持ち帰り、発掘現場から撤収した。引き続き同時進行で出土遺物の洗浄作業を行った。

８月27日（土）晴れ

残りの機材等を運び大学に帰還し、第２次調査を終了した。　　（伊藤真央・糟谷貴幸・安田彩音）

第５章　検出された遺構

第１節　第１次調査

１．調査概要

弥七田窯跡の第１次調査（平成27年度）は、窯体の範囲と構造を確認するため、匣鉢やヨリ輪が多く散布している斜面に、東西0.5ｍ、南北13.424ｍの試掘坑（トレンチ）を設定し、調査を行った。調査の結果、窯体の側壁、柱や床面が検出されたため、トレンチをＡ区・Ｂ区・Ｃ１区・Ｃ２区に分割してさらに調査を進めた。Ａ区・Ｂ区・Ｃ１区は１号窯に伴う遺構、Ｃ２区は２号窯に伴う遺構である。

Ａ区は杭Ａから東西0.5ｍ、南北3.8ｍの調査区を設定した。調査の結果、窯体の側壁、床面、天井支柱が確認されたため、窯体の範囲確認を目的として調査区の東側に拡張を行った。拡張部は杭Ａから1.4ｍ地点より東に1.5ｍ、南に1.0ｍを新たに設定し、調査を行ったところ床面と焼台を検出した。また、天井支柱の床面を確認するために東に0.5ｍ、南に1.4ｍの拡張を行った。さらに、１号窯焼成室の最大幅を確認するため、拡張部からさらに東に１ｍ、南に0.5ｍ拡張を行った。

Ｂ区は杭Ａから4.2ｍ地点より東西0.5ｍ、南北6.62ｍの調査区を設定した。床面が確認されたため、杭Ａから5.4ｍ地点より東に1.5ｍ、南に1.3ｍを設定し、調査を行ったところ東側に天井支柱の基底部と床面が確認された。下方では匣鉢が多く確認されたため、東に1.5ｍ、南に0.2ｍを設定した。調査区の上方では天井支柱の一部が確認されたため、調査区の東に0.5ｍ、南に1.4ｍを新たに設定し、調査を行った。

Ｃ１区は杭Ａから7.6ｍ地点より東西0.5ｍ、南北11.0ｍの調査区を設定した。上方で天井支柱と思われるものが検出され、さらに中央部では床面が検出されたため、トレンチの東側に拡張を行った。拡張部は東に0.5ｍ、南2.0ｍの調査区を設定した。

Ｃ２区は杭Ａから11.5ｍ地点より東西0.5ｍ、南北14.9ｍの調査区を設定した。Ｃ１区で検出された床面とは異なる床面が検出されたため、トレンチの東側に拡張を行った。杭Ｂから東に0.75ｍ、東西1.25ｍ×南北1.25ｍとなるように調査区を設定した。調査を行ったところ、床面は南に続いており、焼台と思われるものも検出されたため、さらに杭Ｂから南へ0.5ｍ拡張したところ床面が確認された。引き続き床面検出のため、杭から南へ1.5ｍ拡張を行った。また、床面と窯壁の検出のために杭Ｂから1.25ｍ地点にある釘を北へ0.5ｍ移動させ、そこから東へ1.3ｍ拡張を行った。（伊藤真央）

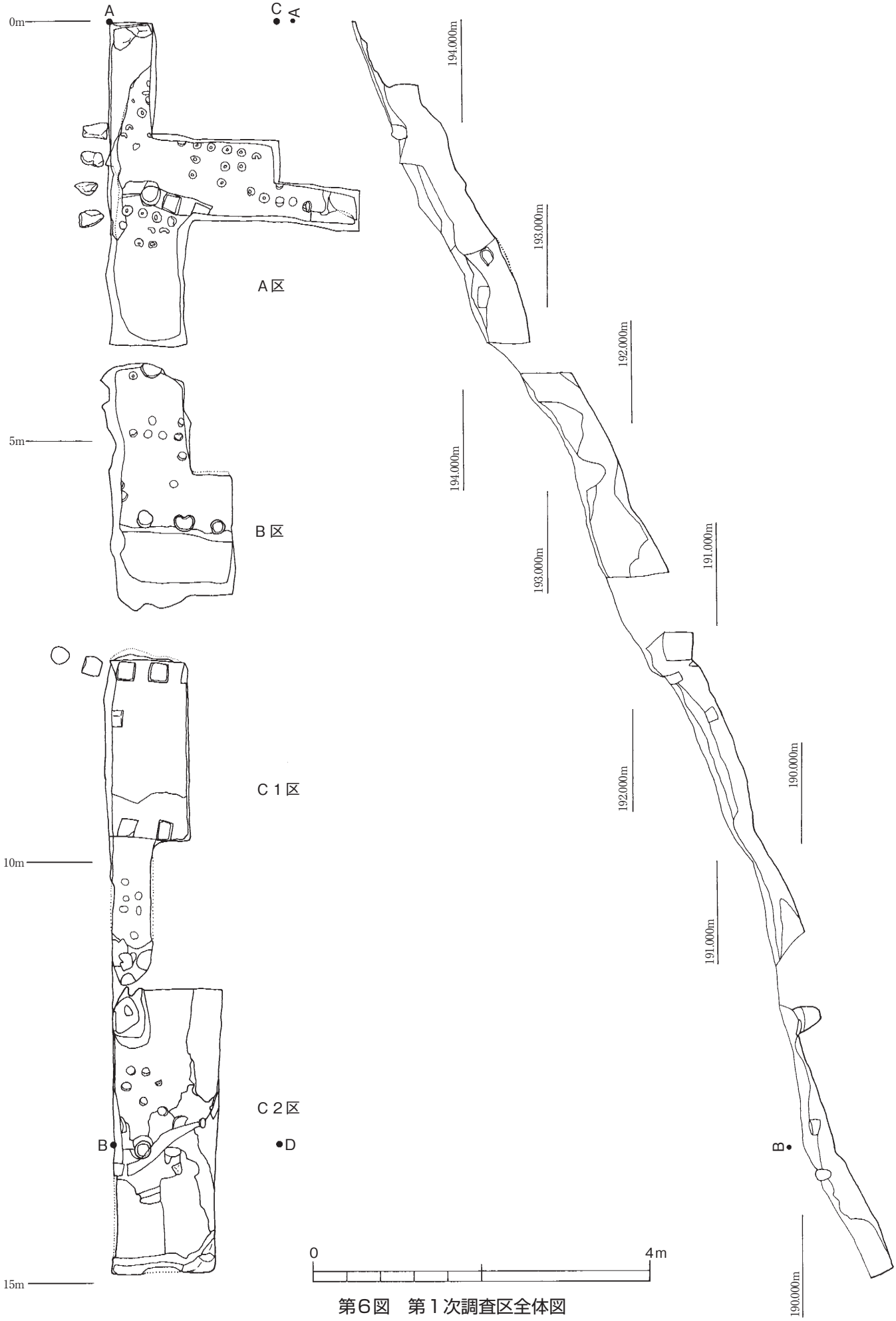
２．Ａ区（第７図）

（１）調査区の設定

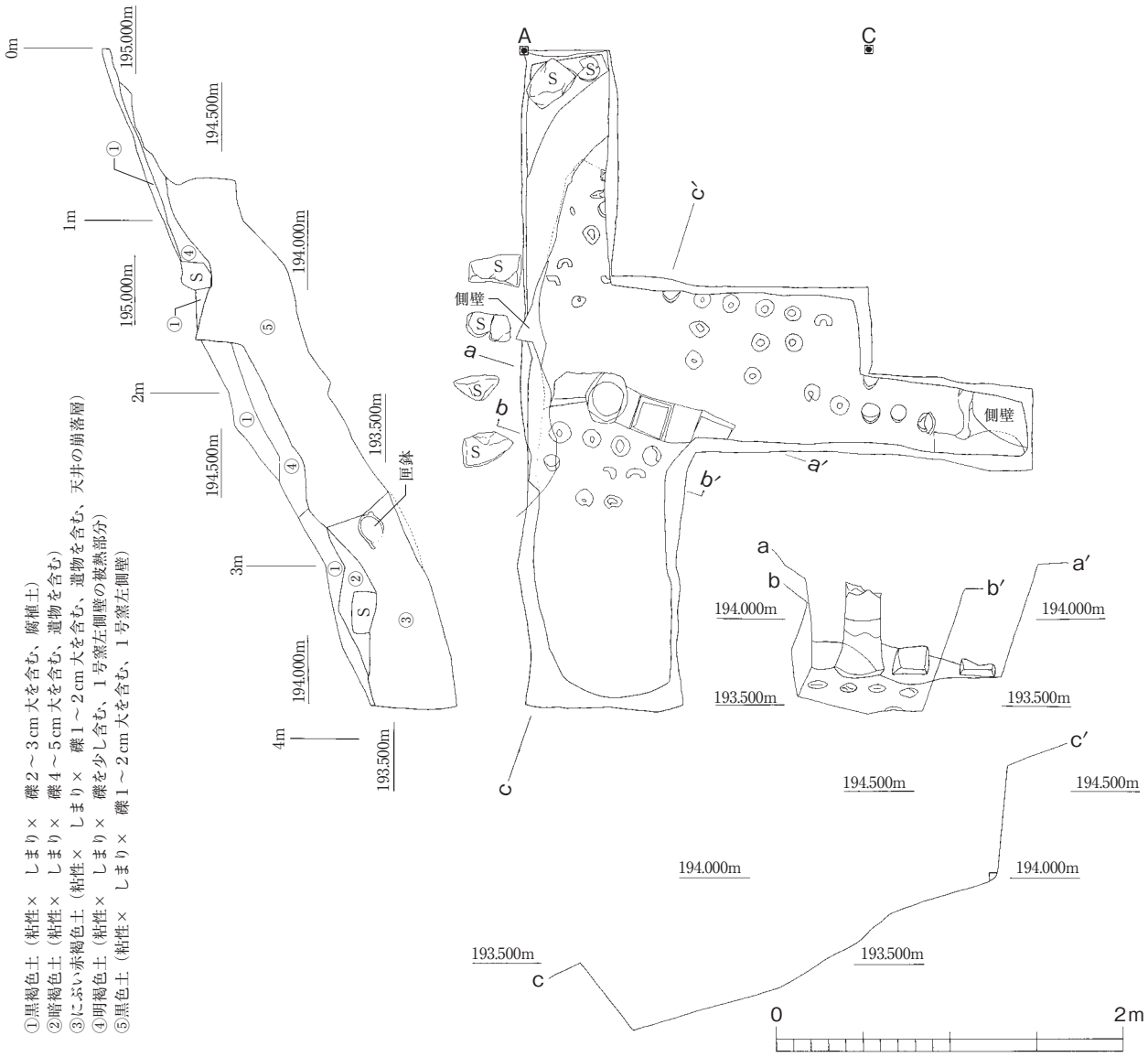
杭Ａから3.8ｍまでをＡ区として設定した。杭Ａから東西0.5ｍ、南北1.4ｍ、杭Ａから1.4ｍ地点より東西2.0ｍ、南北0.5ｍ、杭Ａから1.9ｍ地点より東西3.0ｍ、南北0.5ｍ、杭Ａから2.4ｍ地点より東西1.0ｍ、南北1.4ｍの調査区である。（佐藤美鈴）

（２）西壁土層断面図

Ａ区の土層断面図は１面提示した。杭Ａ地点の標高は195.190ｍ、杭Ａから3.8ｍ地点の標高は193.630ｍである。土層は①～⑤層が確認された。全ての土層において最上層はほとんどが①黒褐色土が堆積している。北側では④明褐色土が⑤１号窯左側壁を覆うように堆積している。⑤層は長さ1.8ｍ、最も深いところで55cm みられ、中央では僅かに⑤層が露出した状態で検出されている。南側では①②層の順に堆積をみせ、その下層には天井の崩落層である③にぶい赤褐色土が約45cm 前後堆積し、匣鉢や窯道具の堆積がみられる。（勝野友陽）



第6図　第1次調査区全体図



第７図　第１次調査Ａ区遺構図

（３）検出された遺構

Ａ区では、１号窯床面と両側壁、天井支柱が検出された。１号窯に伴う床面の状況は、粘土を塗った貼床で被熱により硬化し、よく焼けているため黒褐色を呈している。さらに、多数の焼台や焼台痕が溶着した状態で検出された。Ａ区の床面傾斜は天井支柱より上方で約30°前後傾斜し、下方では約20～25°傾斜しているのが確認された。

調査区の左側と右側にそれぞれ１号窯に伴う両側壁が検出された。１号窯左側壁は残存長1.8ｍ、高さは約55cmで、形状はやや内傾しながら立ち上がる。左側壁は灰黒色を呈しており、よく焼き締まっている。右側壁は僅かに検出されたのみであるが、茶褐色を呈し、よく焼き締まっている。残存長は約30cmである。左側壁と右側壁との幅は約2.5ｍ前後である。なお、左側壁の地表面には約25～30cm大の石が４つ並んで検出された。

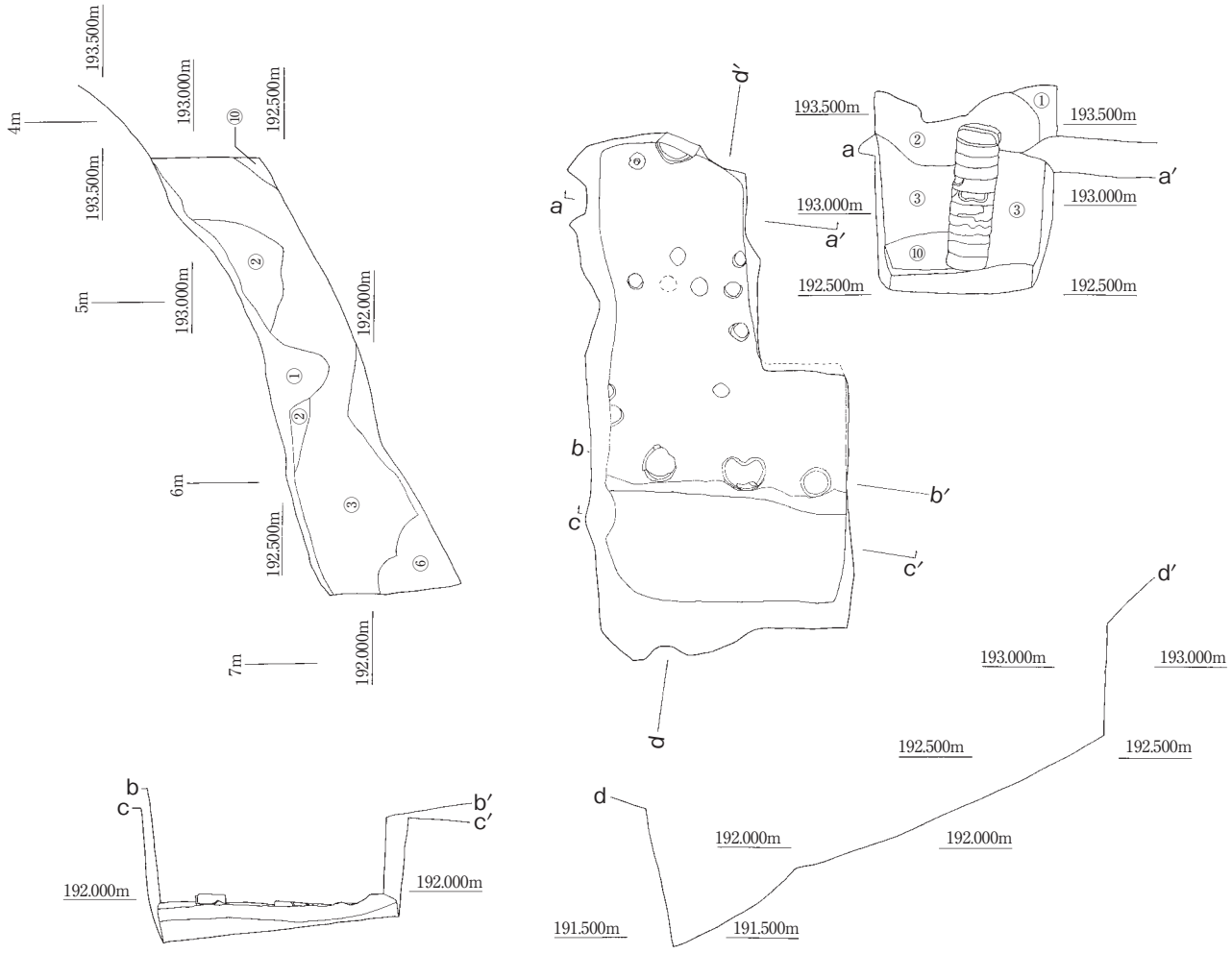
床面中央部からは円形と方形の天井支柱の痕跡が10cm前後の間隔で３本検出された。天井支柱は匣

鉢に粘土を詰めてから積み重ねられ、周りに粘土を貼っていた。円形の天井支柱は少なくとも匣鉢が３個重なって検出され、高さ55cm、径は約30cm である。また、天井支柱が各焼成室の境となっていたと思われ、Ａ区内では焼成室が少なくとも２室あったものと考えられる。（佐藤美鈴）

３．Ｂ区（第８図）

（１）調査区の設定

杭Ａより4.2ｍの地点から6.62ｍまでをＢ区として設定した。杭Ａから4.2ｍ地点より東西1.0ｍ、南北1.4ｍ、杭Ａから5.4ｍ地点より東西1.5ｍ、南北1.65ｍの調査区である。（髙野夏姫）



①黒褐色土（粘性×　しまり×　礫２～３cm 大を含む、腐植土）
②暗褐色土（粘性×　しまり×　礫４～５cm 大を含む、遺物を含む）
③にぶい赤褐色土（粘性×　しまり×　礫１～２cm 大を含む、遺物を含む、天井の崩落層）
⑥暗褐色土（粘性×　しまり×　礫１～２cm 大を含む、遺物を含む）
⑩黄褐色土（粘性×　しまり×　１cm 大の礫を含む）

0　2m

第８図　第１次調査Ｂ区遺構図

（２）西壁土層断面図

Ｂ区の土層断面図は１面提示した。杭Ａから4.2ｍ地点の標高は193.230ｍ、杭Ａから6.2ｍ地点の標高は192.240ｍである。土層は①～③⑥⑩層の５層を確認した。全ての土層において最上層は①黒褐色土が堆積している。北側では②暗褐色土の下層に③にぶい赤褐色土がみられ、さらにその下層には⑩黄褐色土が僅かに堆積している。また、南側では②層が僅かに③層を覆うように堆積し、下層には⑥暗褐色土が堆積し、匣鉢や窯道具等がみられる。（中田智也）

（３）検出された遺構

Ｂ区では１号窯床面と天井支柱が２列確認された。１号窯に伴う床面の状況は粘土を塗った貼床で被熱し、焼台と焼台痕が溶着した状態で検出された。貼床面は非常に脆弱なもので、茶褐色を呈している。Ｂ区の床面傾斜は上方で約20～25°傾斜しているが、下方では天井支柱の痕跡を境に床面がやや傾斜し、床面傾斜は約25～27°となっている。

床面上方で円形の天井支柱が１本、中央から下方に円形と三月形の天井支柱の痕跡が約20cm前後の間隔で並んで検出された。上方の天井支柱との間隔は水平距離で約1.6ｍである。なお、上方の天井支柱からＡ区で検出された天井支柱の間隔は水平距離で約1.7ｍである。窯内からは三月形の天井支柱が折れた状態で出土した。上方で検出された円形の天井支柱は高さ約80cm、径は約25cmで、匣鉢に粘土を詰めたものが10個重ねられ、周りに粘土を貼っている。円形の天井支柱の左側は、上から②暗褐色土、天井の崩落層である③にぶい赤褐色土⑩黄褐色土の順に堆積している。なお、Ｂ区内では少なくとも焼成室が２室あるものと思われる。（髙野夏姫）

４．Ｃ１区（第９図）

（１）調査区の設定

杭Ａより7.6ｍの地点から11.0ｍまでをＣ１区として設定した。杭Ａから7.6ｍ地点より東西1.0ｍ、南北2.15ｍ、杭Ａから9.75ｍ地点より東西0.5ｍ、南北1.45ｍの調査区である。（堀内 有）

（２）西壁土層断面図

Ｃ１区の土層は１面提示した。杭Ａから7.4ｍ地点の標高は191.850ｍ、杭Ａから11.25ｍ地点の標高は190.320ｍである。土層は①～③⑥⑦層が確認された。全ての土層において最上層は①黒褐色土が堆積している。北側では②暗褐色土の堆積がみられ、その下層には③にぶい赤褐色土が堆積し、その下層には約30cm四方の⑥匣鉢や窯道具を含む暗褐色土の堆積層がみられる。また、南側では③層の堆積がみられ、その下層には⑦褐色土が堆積している。（脇田 遼）

（３）検出された遺構

Ｃ１区は１号窯床面と天井支柱が３列検出された。１号窯に伴う床面の状況は粘土を塗った貼床で被熱により硬化しているが、貼床面は非常に脆弱で茶褐色を呈している。床面には焼台が溶着した状態で検出されている。Ｃ１区の床面傾斜は、２列目の天井支柱を挟んで上方では約25°あり、下方では床面中央で天井支柱の痕跡がみられ、それを境に約30°前後あると思われる。

天井支柱は上方で方形のものが３本検出され、約17cm前後の間隔で並んでいる。また、調査区の左側で地表面に円形と方形の匣鉢に粘土を詰めたものが検出され、調査区内の天井支柱と同じ間隔で並んでいることから、天井支柱であるという可能性がある。次に、床面中央では方形の天井支柱の痕跡が約15cm間隔で並んで２本確認された。上方の天井支柱との間隔は水平距離で約1.6ｍである。なお、上方の天井支柱からＢ区の天井支柱との間隔は約1.6ｍである。さらに、下方で天井支柱が１本確認され、

１本しか検出されなかったため左右の間隔はわからないが、中央の天井支柱との間隔は約1.6mである。いずれも天井支柱は匣鉢に粘土を詰めたのち重ねられたものである。Ｃ１区では少なくとも焼成室が２室あるものと思われる。（堀内 有）

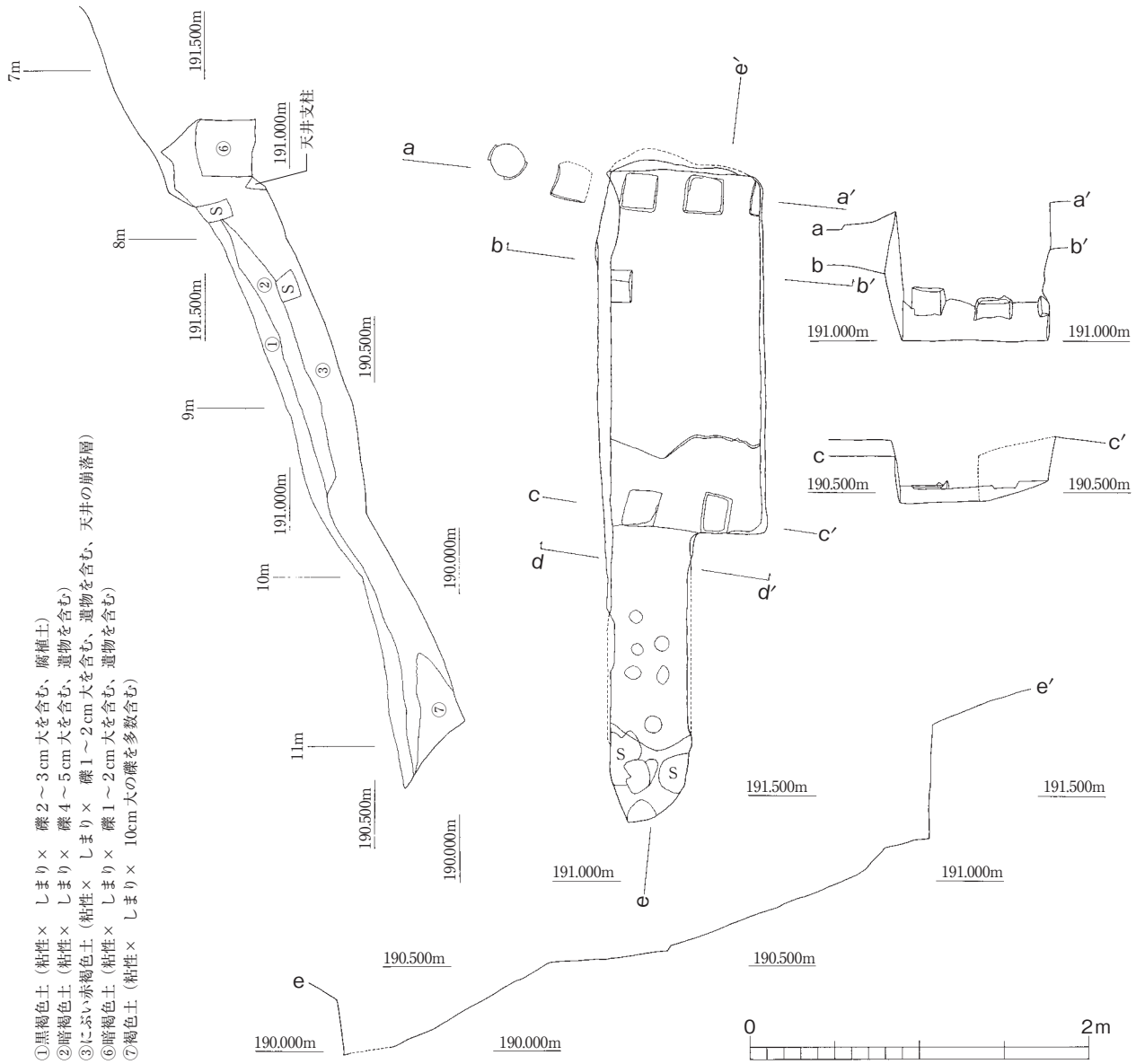
５．Ｃ２区（第10図）

（１）調査区の設定

杭Ａより11.5ｍ地点から14.9ｍまでをＣ２区として設定した。杭Ａから11.5ｍ地点より東西1.25ｍ、南北3.4ｍの調査区である。（三ツ本樹純）

（２）西壁土層断面図

Ｃ２区の土層断面図は１面提示した。杭Ａから11.7ｍ地点の標高は190.275ｍ、杭Ａから14.9ｍ地点の標高は189.200ｍである。土層は①③⑧⑨層が確認された。全ての土層において最上層は①暗褐色土

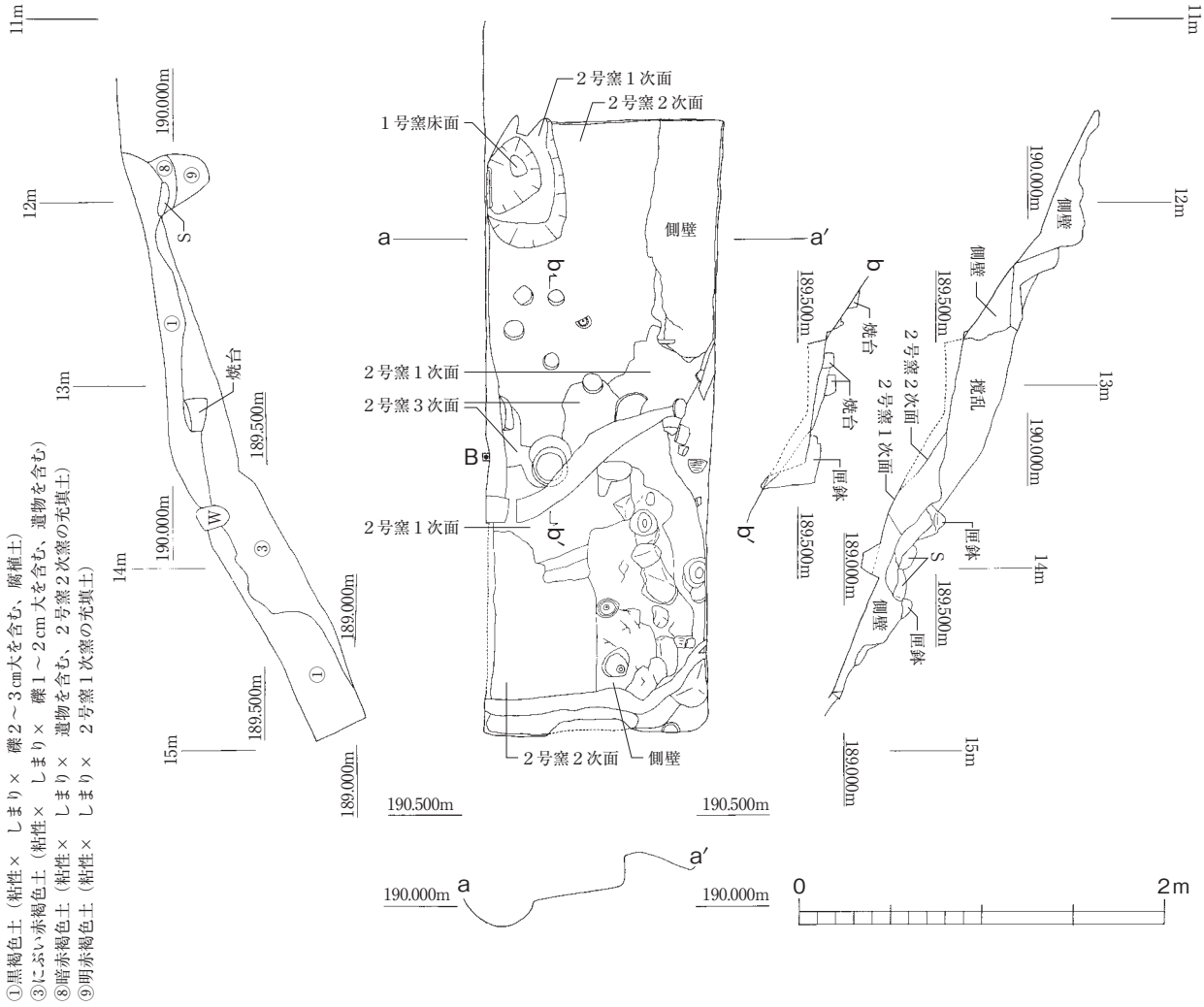


第９図　第１次調査Ｃ１区遺構図

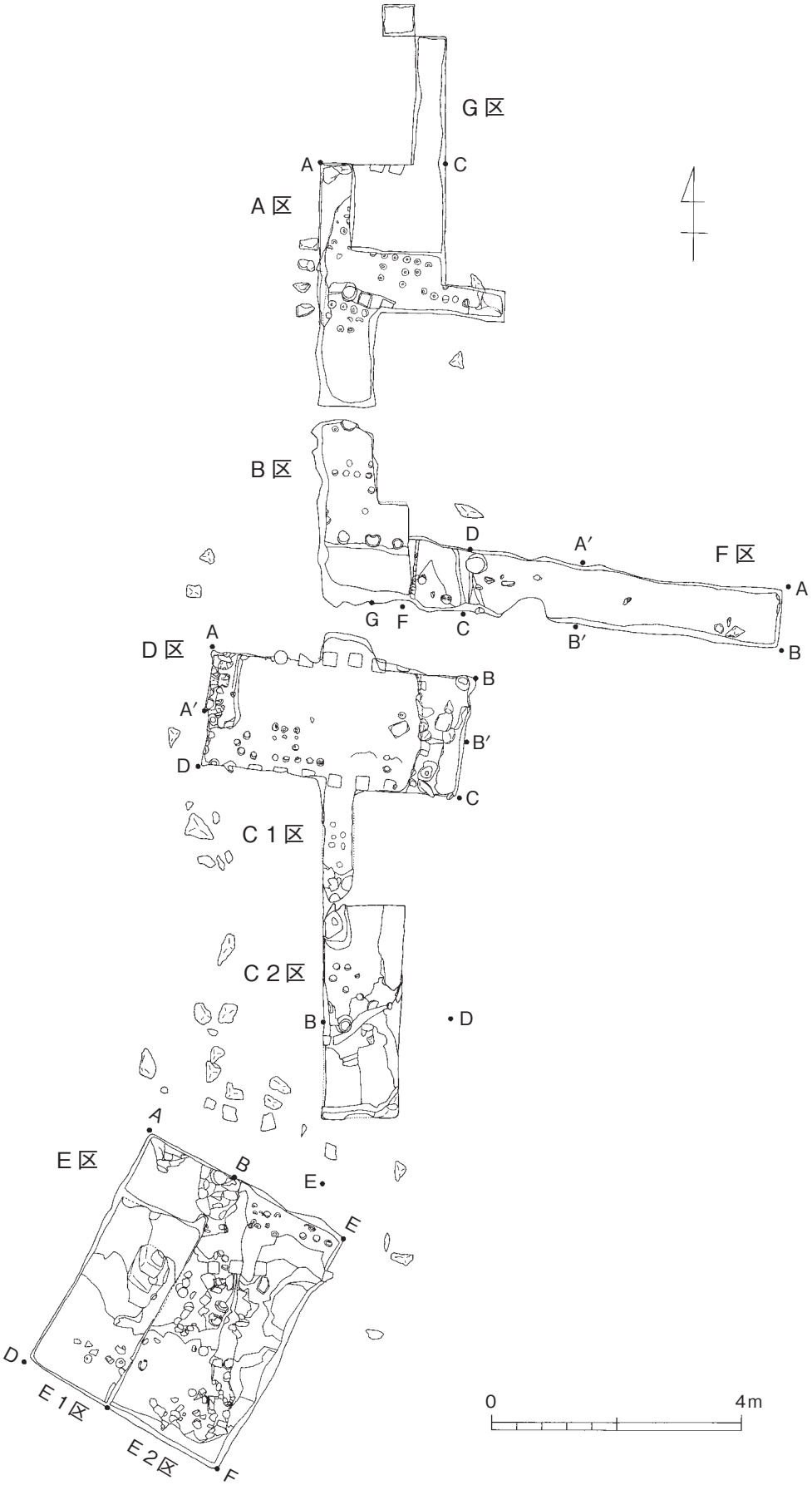
が堆積している。その下層には天井の崩落層である③にぶい赤褐色土の堆積がみられる。また、北側では①層の下層に⑧２号窯１次床面と⑨明赤褐色土が堆積している。なお､⑧層は固く焼きしまっており、輪ドチが混じる層であることが確認され、その下層である⑨層は１号窯の崩落層で２号窯の盛土であると考えられる。（長縄憲治）

（３）検出された遺構

Ｃ２区は２号窯に伴う床面と右側壁が検出された。２号窯の床面は粘土を塗った貼床で、被熱により硬化し貼床面は一部自然釉降灰によりガラス化し灰緑色を呈している。床面は３面確認されており、少なくとも２回補修されたのではないかと想定できる。Ｃ２区の床面傾斜は匣鉢に粘土を詰めたものを境に上方では約15°、下方では約22°傾斜していることが確認された。北西隅では２号窯床面下層から別の窯の床面が検出された。この床面は２号窯に伴う床面と傾斜が異なり、１号窯の床面に連続することから１号窯の床面であると判断した。



第10図　第１次調査Ｃ２区遺構図



第11図　第1・2次調査位置図

２号窯右側壁は全体的に赤褐色を呈し、よく焼けている面は灰黒色を呈している。さらに、匣鉢や重ね焼きされた製品を窯壁の構築材として使用されている。２号窯右側壁の長さは上方で約1.2ｍ、途中攪乱を受けているが、下方で約1.5ｍ残存している。高さは全体的に約20cm 前後で、残存幅は上方で約40cm、下方で約60cm である。また、床面中央で円形の匣鉢に粘土を詰めたものが確認されているが、木の根があるため天井支柱であるかどうか判断することが出来なかった。（三ツ本樹純）

第２節　第２次調査

１．調査概要

弥七田窯跡の第２次調査（平成28年度）では、昨年度の調査成果を基に窯全体の全長と構造の確認を目的として調査を行った。Ｄ区・Ｆ区は１号窯に伴う遺構、Ｅ区についてはＥ１区が１号窯、Ｅ２区が２号窯に伴う遺構である。

Ｄ区では１号窯焼成室の一室の規模や構造を確認するため、昨年度の調査で検出された天井支柱が一直線に入るように東西4.16ｍ、南北1.78ｍの調査区（グリッド）を設定し調査を行った。なお、北西から時計回りに杭Ａから杭Ｄとした。さらに、杭Ａから1.0ｍの地点に釘を打ち、調査区を四分割し、北西からＤ１区、北東をＤ２区、南西をＤ３区、南東をＤ４区とした。調査の結果、床面と北側で天井支柱、左右の側壁を検出した。それに伴い、南側の天井支柱を確認するために南側の釘から0.1ｍの拡張を行った。

Ｅ区では、１号窯燃焼室と焚口の規模や構造を確認するために、新たな杭を基点とし、東西1.5ｍ、南北4.15ｍの試掘抗（トレンチ）を設定し、北西から時計回りに杭Ａから杭Ｄとした。調査の結果、床面と配石遺構が検出されたため、トレンチの東側に杭Ｂより東西2.0ｍ、南北3.0ｍのトレンチを設定した。調査区の上方では床面と柱が３本検出され、床面の広がりを確認するために拡張部からさらに東西に2.0ｍ、南北に1.15ｍの拡張を行った。

Ｆ区では、昨年度の調査にて匣鉢やヨリ輪がたくさんみられたため、新たな杭を打ち、杭から西に5.04ｍ、南に1.0ｍの試掘抗（トレンチ）を設定し、窯体と工房跡の有無を目的として設定した。なお、北東から時計回りに杭Ａから杭Ｄとした。調査を行ったところ、東側では砂岩の岩盤、西側では裏込と思われる石を検出した。杭Ｄから西に0.96ｍ拡張を行ったところ、窯壁が検出され、窯壁と昨年度の調査区との繋がりを確認するため、南側のみ西に0.5ｍの拡張を行った。なお、Ｇ区については、可児市教育委員会が主体に調査を行っているため、今回は取り扱わないこととした。（伊藤真央）

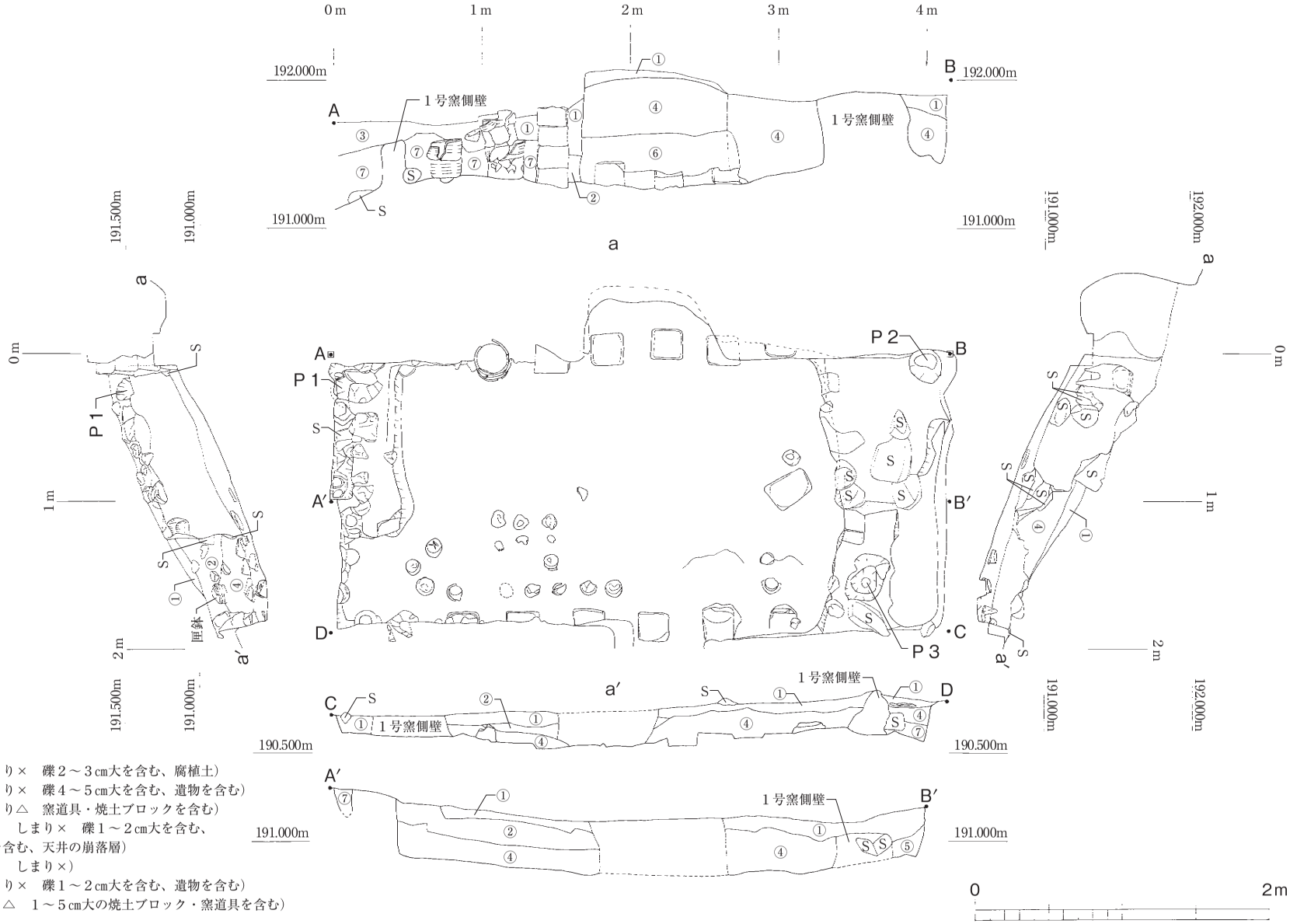
２．Ｄ区（第12図）

（１）調査区の設定

Ｄ区は、１号窯焼成室の一室の規模や構造を確認するために、杭Ａから東に4.16ｍ、南に1.88ｍの調査区である。（田口芽依）

（２）土層断面図

Ｄ区の土層は３面提示した。杭Ａから南に1.0ｍ地点の土層の堆積状況は、杭Ａから南に1.0ｍ地点の標高は191.230ｍ、杭Ｂから1.0ｍ地点の標高は191.360ｍである。土層は①②④⑤⑦層が確認された。西側では、①黒褐色土が堆積し、その下層には②暗褐色土が④にぶい赤褐色土を覆うように堆積している。なお、僅かに⑦褐色土の堆積がみられる。東側では、①層の下層では窯壁が露出しており、窯壁を挟むように④層と⑤にぶい赤褐色土が約15～25cm 前後堆積している。



D 区
①黒褐色土（粘性×　しまり×　礫２～３㎝大を含む、腐植土）
②暗褐色土（粘性×　しまり×　礫４～５㎝大を含む、遺物を含む）
③黒褐色土（粘性○　しまり△　窯道具・焼土ブロックを含む）
④にぶい赤褐色土（粘性×　しまり×　礫１～２㎝大を含む、
遺物を含む、天井の崩落層）
⑤にぶい赤褐色土（粘性×　しまり×）
⑥暗褐色土（粘性×　しまり×　礫１～２㎝大を含む、遺物を含む）
⑦褐色土（粘性×　しまり△　１～５㎝大の焼土ブロック・窯道具を含む）

第12図　第２次調査Ｄ区遺構図

北壁では、杭Ａ地点の標高は191.710ｍ、杭Ｂ地点の標高は191.895ｍである。土層は①～④⑥⑦層が確認された。西側では③黒褐色土が堆積し、その下層に⑦層が窯壁と天井支柱との間に堆積している。中央では、①層の下層に天井の崩落層である④層がみられる。さらに、その下層にはすき間に土をほぼ含まない匣鉢と窯道具を多く含む⑥暗褐色土が約30cm 堆積している。東側では、１号窯の側壁が露出し、側壁を挟むように①④層の堆積がみられる。

南壁では、杭Ｃ地点の標高は190.765ｍ、杭Ｄ地点の標高は190.845ｍである。土層は①②④⑦層が確認された。全ての土層において最上層は①層が堆積している。西側では１号窯の側壁が露出し、側壁の左側では④⑦層、側壁の右側では天井支柱の痕跡を覆うように④層が堆積している。東側では、１号窯の側壁と天井支柱の痕跡がみられ、側壁を挟むように①層と②暗褐色土の下層に④層の堆積がみられる。

（赤山純里）

（３）検出された遺構

１号窯床面と左右の側壁、天井支柱が検出された。１号窯に伴う床面の状況は、粘土を塗った貼床で被熱により硬化しているが、非常に脆弱で茶褐色を呈している。床面には焼台が溶着した状態で検出され、中には窯印の入ったものがみられる。床面傾斜は20～25°である。

調査区の左側と右側でそれぞれ１号窯に伴う側壁が検出された。１号窯左側壁は残存長1.2ｍ、高さは約45cm で、形状はやや内傾しながら立ち上がる。左側壁は灰黒色を呈しており、よく焼き締まっている。右側壁は残存長1.8ｍ、高さは約55cm で、形状は左側壁と同様にやや内傾しながら立ち上がる。右側壁は茶褐色を呈しており、よく焼き締まっている。床面の幅は2.95ｍである。なお、両側壁の裏側からは覆い屋を掛けるための柱穴と左側壁の南側からは製品の出し入れ口が確認されている。

調査区の北側では、円形と方形の天井支柱７本検出され、約16cm 前後の間隔で並んでいる。なお、丸形の天井支柱は匣鉢に粘土を詰めて作られている。また、南側では、方形の天井支柱の痕跡が約20cm 前後の間隔で並んで６本検出されている。北側の天井支柱との間隔は水平距離で約1.7ｍ前後である。

（田口芽依）

３．Ｅ区（第13・14図）

（１）調査区の設定

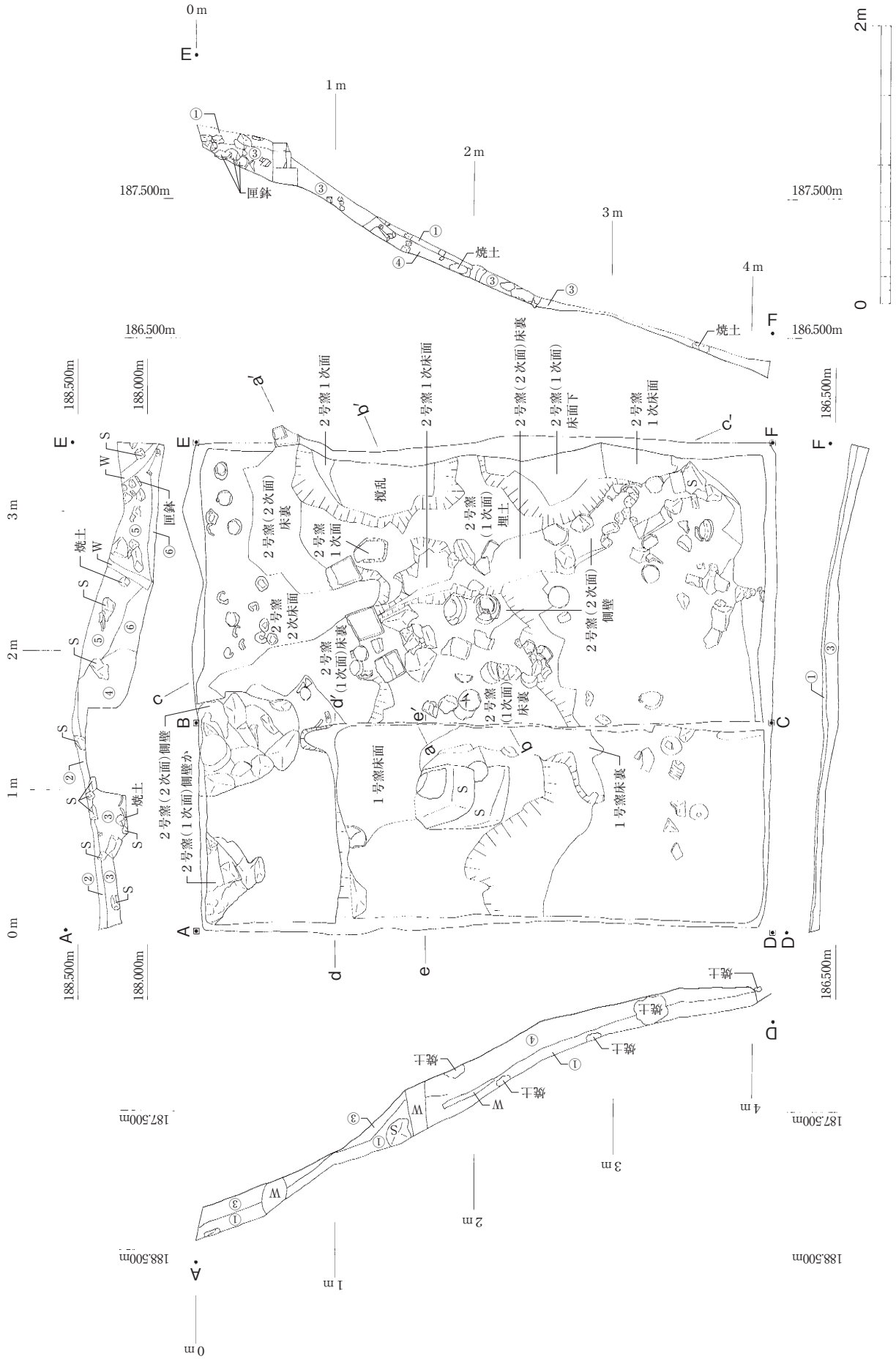
Ｅ区は、杭Ａより東に3.5ｍ、南に4.15ｍの調査区である。なお、杭Ａから東に1.5ｍ、南に4.15ｍの調査区をＥ１区、杭Ａから1.5ｍ地点の杭Ｂより東に2.0ｍ、南に4.15ｍの調査区をＥ２区とした。

（中田智也）

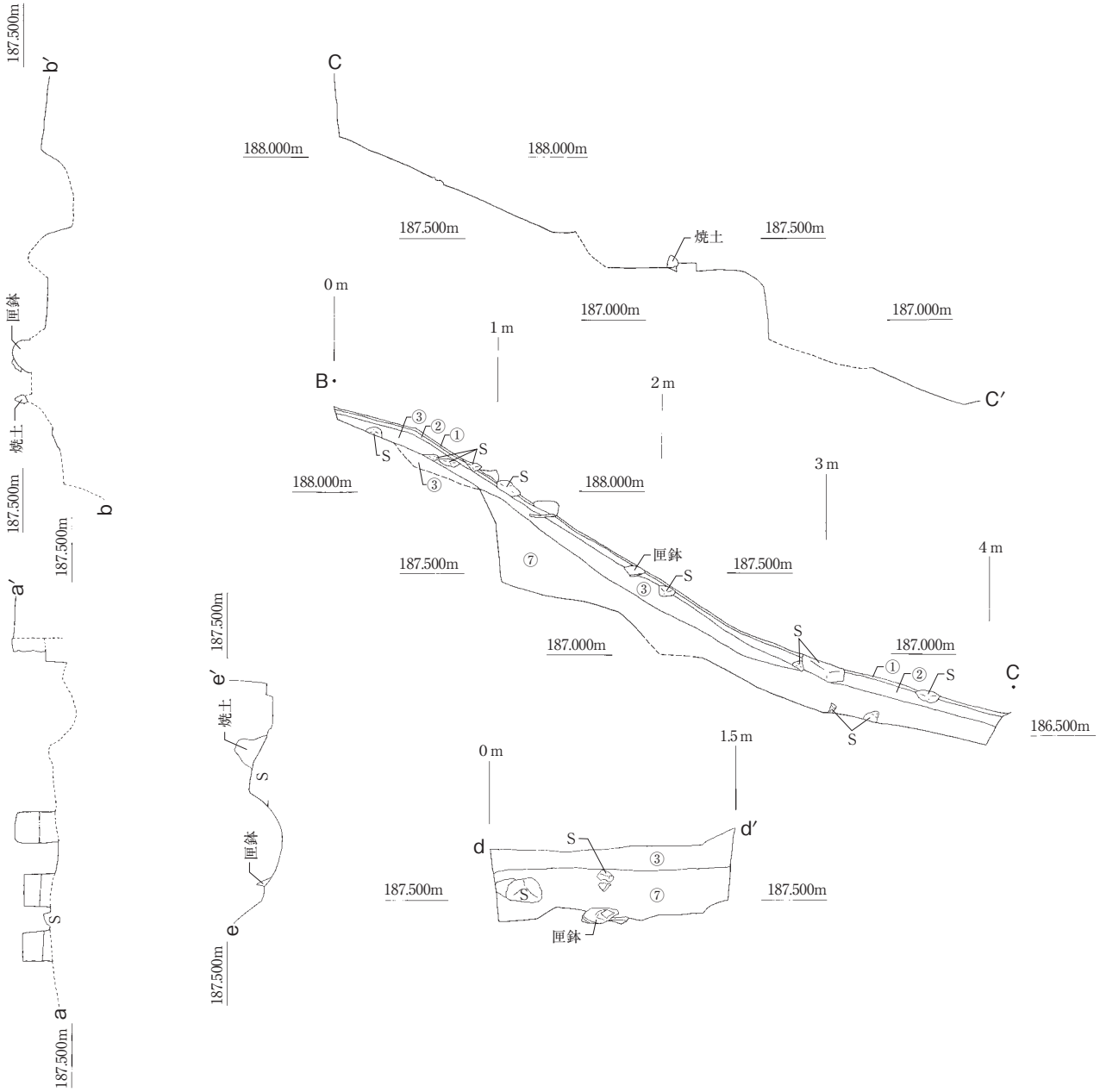
（２）土層断面図

Ｅ区の土層断面図は６面提示した。なお、Ｅ１区に伴う土層は２面、Ｅ区に伴う土層は４面である。

Ｅ１区に伴う土層について、杭Ａから1.0ｍ地点の北壁では、標高は187.820ｍ、杭Ｂから1.0ｍ地点の標高は187.940ｍである。土層は③⑦層を確認したが、③層の上層には②層が堆積していたと思われる。③褐色土が堆積し、その下層に粘土ブロックや匣鉢を含む⑦明赤褐色土がみられる。東壁では、杭Ｂ地点の標高は188.520ｍ、杭Ｃ地点の標高は186.635ｍである。土層は①～③⑦層が確認された。全ての土層において最上層は①黒褐色土が堆積し、その下層には②暗褐色土がみられ、焼台や匣鉢蓋が露出している。②層の下層に、匣鉢や窯道具を含む③褐色土が堆積し、さらにその下層には焼土を含む１号窯の窯内埋土であると考えられる⑦明赤褐色土の堆積が確認される。なお、杭Ｂから南に2.8ｍ地点の石を境に③層がみられなくなる。



第13図　第2次調査E区遺構図（1）



E区
①黒褐色土（粘性×　しまり×　礫２～３㎝大を含む、腐植土）
②暗褐色土（粘性×　しまり○　礫１～２㎝大を含む、遺物を含む）
③褐色土（粘性×　しまり×　礫１～２㎝大を含む、遺物を含む）
④赤褐色土（粘性×　しまり×　礫１～２㎝大を含む、遺物を含む、焼土ブロック層）
⑤褐色土（粘性×　しまり△　礫５～10㎝大を含む、遺物を含む）
⑥褐色土（粘性×　しまり△　礫５㎝大を含む）
⑦明赤褐色土（粘性×　しまり×　礫１～２㎝大を含む、焼土ブロック層）

第14図　第2次調査E区遺構図（2）

Ｅ区に伴う土層について、北壁では、杭Ａ地点の標高は188.350ｍ、杭Ｅ地点の標高は188.220ｍである。土層は②～⑥層が確認された。西側では、②暗褐色土の下層には焼土を含む③層が堆積し、２号窯に伴う側壁を挟むように③層と④赤褐色土が堆積している。なお、④層は最大で約38cm の堆積がみられ、僅かに②層が覆うように堆積している。東側では、表土がみられず、匣鉢や窯道具を含む⑤褐色土が露出し、その下層には⑥褐色土の堆積がみられる。

東壁では、杭Ｅ地点の標高は188.030ｍ、杭Ｆ地点の標高は186.340ｍである。土層は①③④層が確認された。全体的に③層が堆積している。北側では、①層の下層に匣鉢や焼台など窯道具を含む③層が堆積し、２号窯に伴う狭間柱が露出している。南側では、①層の下層に焼土を含む④層が堆積している。なお、③④層は木の根による攪乱を受けている可能性がある。

南壁では、杭Ｄ地点の標高は186.695ｍ、杭Ｆ地点の標高は186.375ｍである。土層は①③層が確認された。Ｅ区の土層において最上層である①黒褐色土が僅かに堆積し、その下層に③層が堆積している。

西壁では、杭Ａ地点の標高は188.440ｍ、杭Ｄ地点の標高は186.645ｍである。土層は①③④層が確認された。全ての土層において最上層である①層が堆積している。北側では③層が堆積しているが、木の根により途中でみられなくなる。南側では焼土を含む④層が約20cm 堆積している。　（大森裕朗）

（３）検出された遺構

Ｅ１区では、１号窯床面と側壁、床面近くに大きな石が重なって検出された。１号窯に伴う床面の状況は、粘土を塗った貼床で被熱により硬化しているが、非常に脆弱で黒褐色を呈している。Ｅ１区の床面傾斜は14～15°である。さらに、１号窯床面近くにある石組みについては、約40cm 大の石と約60cm 大の石が二つ重なった状態で検出された。なお、床面が石組みまで続いていることから、１号窯燃焼室の一部ではないかと考えられる。

Ｅ２区では、２号窯床面と左側壁、狭間柱が確認された。２号窯に伴う床面の状況については、粘土を塗った貼床で、被熱により硬化し、一部は自然釉降灰によりガラス化し灰緑色を呈しているが、非常に脆弱である。さらに、床面には焼台の痕跡や焼台が溶着した状態で検出された。床面は２面確認されており、少なくとも１回は補修されたものと想定できる。なお、Ｃ−２区で３次面とされた床面は検出できなかった。Ｅ２区の床面傾斜は狭間柱上方で24～25°傾斜していることが確認された。

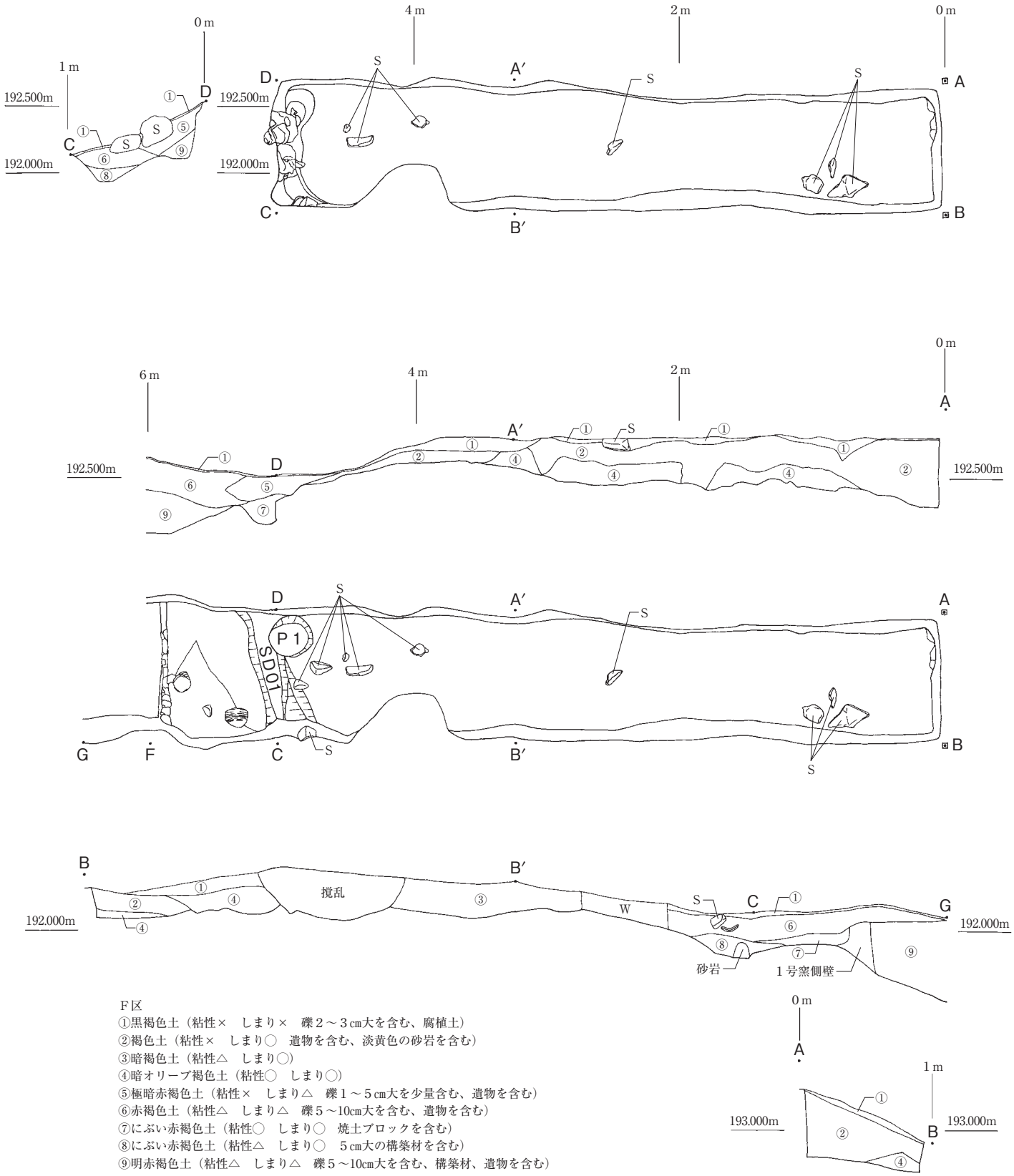
２号窯左側壁は全体的に赤褐色を呈し、よく焼けている面は灰黒色を呈している。なお、匣鉢や重ね焼きされた製品を窯壁の構築材として使用されている。２号窯左側壁の長さは上方で1.0ｍ、途中攪乱を受けているが、中央で約85cm、下方で約1.2ｍ残存している。高さは全体的に約20cm 前後で、残存幅は上方で約65cm、中央で約50cm、下方で約35cm である。

調査区上方からは角形の狭間柱が約16cm 前後の間隔で４本検出された。なお、狭間柱の３本目と４本目間が根の攪乱を受けているため正確に全景を把握できないが、間にもう１本狭間柱が存在していた可能性がある。狭間柱は大きいもので高さ約25cm、幅約20cm 前後である。狭間柱が各焼成室の境となっていたと思われることから、奥行は約1.2ｍ以上あるものと想定される。なお、２号窯２次面は、狭間柱が側面の一部として検出されていることから、窯体を改修する際に左側壁を縮小して構築していることが明らかとなった。　（中田智也）

４．Ｆ区（第15図）

（１）調査区の設定

Ｆ区は、匣鉢やヨリ輪がたくさんみられた１号窯の東側に他の窯体と工房跡の有無確認を目的として、



F区
①黒褐色土（粘性×　しまり×　礫２～３㎝大を含む、腐植土）
②褐色土（粘性×　しまり○　遺物を含む、淡黄色の砂岩を含む）
③暗褐色土（粘性△　しまり○）
④暗オリーブ褐色土（粘性○　しまり○）
⑤極暗赤褐色土（粘性×　しまり△　礫１～５㎝大を少量含む、遺物を含む）
⑥赤褐色土（粘性△　しまり△　礫５～10㎝大を含む、遺物を含む）
⑦にぶい赤褐色土（粘性○　しまり○　焼土ブロックを含む）
⑧にぶい赤褐色土（粘性△　しまり○　５㎝大の構築材を含む）
⑨明赤褐色土（粘性△　しまり△　礫５～10㎝大を含む、構築材、遺物を含む）

0　2m

第15図　第２次調査Ｆ区遺構図

杭Ａより西に6.5ｍ、南に1.0ｍの調査区として設定した。（長縄憲治）

（２）土層断面図

Ｆ区の土層は４面提示した。Ｆ区を西に拡張する前の西壁土層状況について、西壁では、杭Ａから西に5.0ｍ地点である杭Ｄの標高は192.540ｍ、杭Ｂから西に5.0ｍ地点である杭Ｃの標高は192.140ｍである。土層は①⑤⑨層が確認された。最上層には①黒褐色土が堆積し、約20cm 前後の石が露出している。北側では流入土である⑨明赤褐色土、南側では⑤極暗赤褐色土のさらに下層に⑨層が確認された。

北壁では、杭Ａ地点の標高は192.810ｍ、杭Ａより西に6.0ｍ地点の標高は192.650ｍである。土層は①②④～⑥⑨層が確認された。全ての最上層には①黒褐色土が堆積している。東側では、②褐色土が確認され、最大約50cm の堆積がみられ、その下層には④暗オリーブ褐色土がレンズ状に堆積している。西側では、⑤層と⑥赤褐色土が堆積し、下層に天井の崩落層あるいは流入土である⑨層の堆積がみられる。

南壁では、杭Ｂ地点の標高は192.310ｍ、杭Ｂより西に6.5ｍ地点の標高は192.105ｍである。土層は①～④⑥～⑨層が確認された。東側では①層の下層に②④層がみられ、攪乱層を挟むように③暗赤褐色が最大約25cm 堆積している。西側では、最上層には①層がみられ、下層には⑥層が堆積する。さらにその下層には⑦⑧にぶい赤褐色がみられ、１号窯の右側壁が露出している。

東壁では、杭Ａ地点の標高は192.810ｍ、杭Ｂ地点の標高は192.310ｍである。土層は①②④層が確認された。最上層には①層が堆積し、下層には②層が最大50cm 程の堆積がみられる。なお、南側では②層が④層を覆うように堆積している。（山田紗希）

（３）検出された遺構

砂岩の岩盤、１号窯の右側壁の裏込と思われる石が検出された。砂岩の岩盤が検出されたため、１号窯の周辺には別の窯体と工房跡がないことが確認された。さらに、調査区の西側では、１号窯の右側壁の裏込と思われる石が確認され、裏込には窯道具も使用されていたことが確認できた。

裏込と昨年度調査した部分とのつながり、すなわち１号窯の右側壁の検出するための拡張区では、１号窯の右側壁と岩盤を削って造られた排水溝（ＳＤ01）が検出された。１号窯右側壁は、残存長0.9ｍ、高さ約40cm で、形状はやや内傾しながら立ち上がる。右側壁は茶褐色を呈しており、焼き締まっているが、上方の側壁の残存状態は悪い。岩盤を削って造られた排水溝は、残存長85cm、最大幅約25cm である。窯体と平行に設けられていた排水施設である可能性が高い。岩盤を削って造られ、天井の崩落層あるいは流入土である⑨明赤褐色土が堆積している。（長縄憲治）

第６章　出土遺物の概要

第１節　碗類（第16・17・18図）

碗類には天目茶碗・丸碗・端反碗・小杯がある。

１．天目茶碗（１～９・46～53）

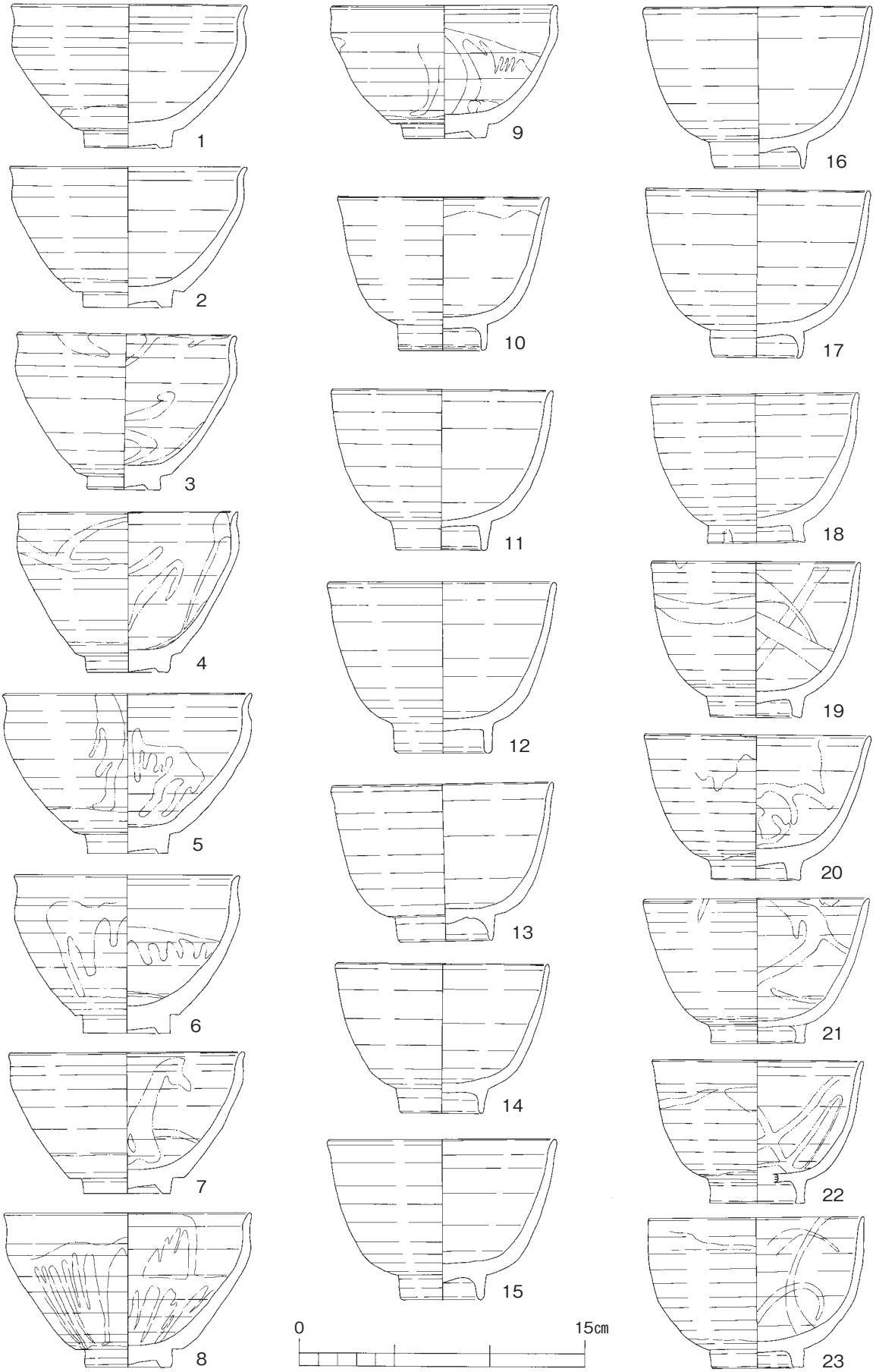
天目茶碗は全て削り出し高台である。灰釉の流し掛けがみられないＡ類と、体部内外面に灰釉が流し掛けられたＢ類に分類した。Ａ類（１・46・47）は器高7.5cm、口径12.4cm、高台径4.5cm 前後である。高台内が浅く削り込まれ、断面形は外側が僅かに外傾、内側は低く僅かに外傾する。体部は僅かに丸みを持って立ち上がり上方はほぼ直立し、口縁端部が薄く尖るように仕上げられるもの（１・47）と、口縁部が僅かに外反しＳ字状になるもの（46）に分けられる。体部上方から底部にかけて回転ヘラ削り調整される。鉄釉が施され濃い飴色から黒褐色の発色である。緻密な胎土が使用され、破断面は灰白色を呈する。

Ｂ類（２～９・48～53）は器高7.6cm、口径12.3cm、高台径4.5cm 前後である。Ａ類と比べると器壁が全体的に薄く、体部は僅かに丸みを持って立ち上がり下方は一旦直立するが上方は僅かに外反する。高台の断面形は高台内の削り込みが浅く外側が直立し、内側が外傾する１類（３・４）と、外側がほぼ直立し、内側が深く削り込まれ外傾する２類（５～９・46～53）がある。いずれも体部上方から底部にかけて回転ヘラ削り調整される。高台周辺を除き鉄釉が施され飴色から黒色の発色である。また、体部内外面に筆による灰釉の流し掛けが認められ、飴色から黒褐色の発色である。緻密な胎土が使用され、破断面は灰白色、黄白色、薄茶色を呈する。（前田真奈）

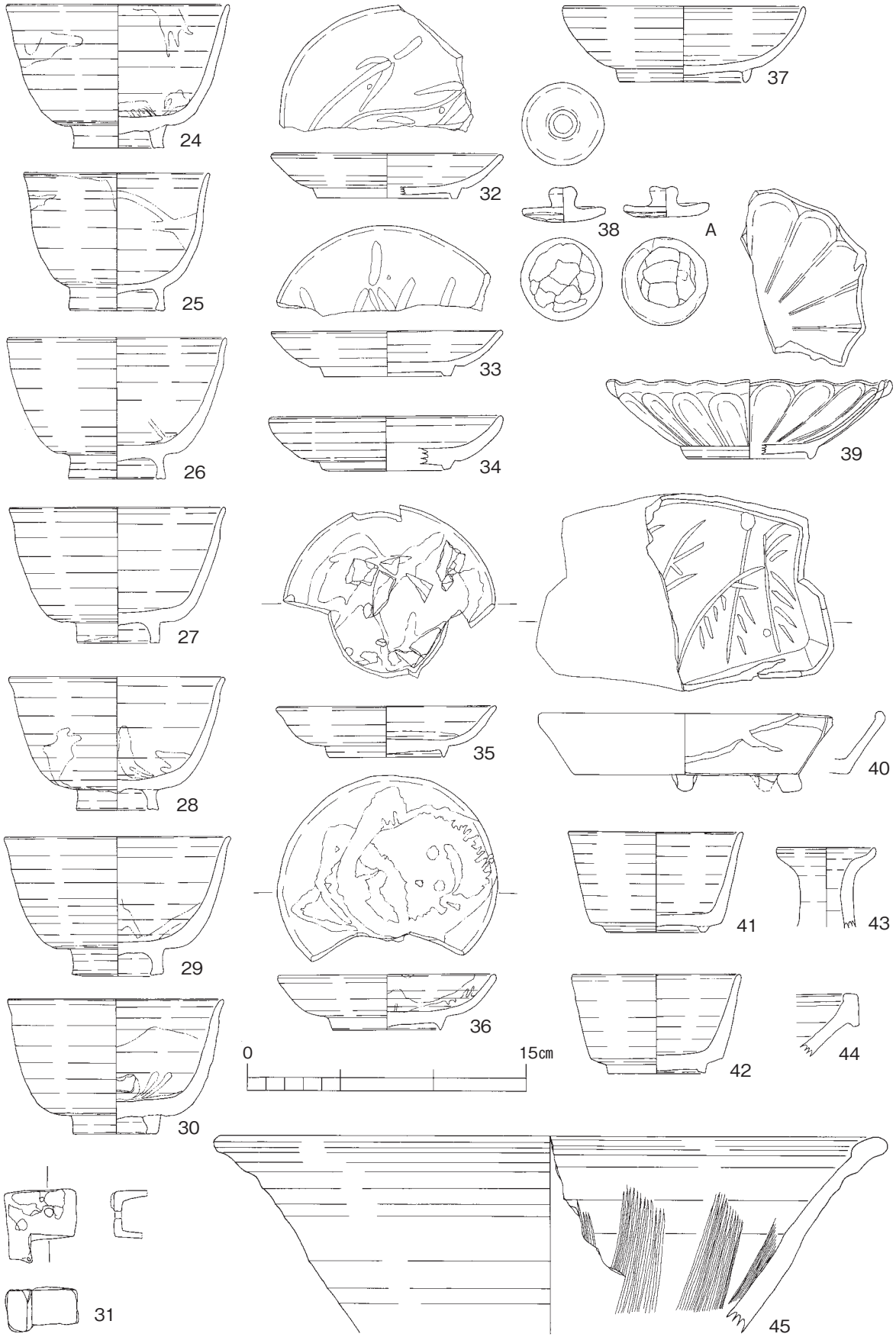
２．丸碗（10～23・54・写真Ｈ）

丸碗は全て付高台である。長石釉が施されたＡ類と、鉄釉に灰釉が流し掛けられたＢ類に分類した。Ａ類（10～18・54・写真Ｈ）は器高8.3cm、口径11.5cm、高台径4.5cm 前後である。高台の形状はバラエティーに富み、高台の断面形が幅狭く細長い長方形で、高台高が高く端部が丸く収まる１類（11・12・54・写真Ｈ）、高台の断面形は類似するが内側が緩やかに窪む２類（10・13～17）、高台の断面形が幅広く角張った方形を呈する３類（18）がある。いずれも体部下方は丸みを帯び上方は直線的に立ち上がり、口縁部は外反しない。器壁は10・13・14・16・17・54が全体に薄く、11・12・15・18は全体に厚い。体部下方から底部外面にかけて回転ヘラ削り調整、高台周辺には回転ナデ調整される。10～17・54は全面に長石釉が施されるが高台端部の釉薬は拭い取られ、18は高台端部から底部外面が露胎となっている。長石釉は黄白色の発色がほとんどで、一部黄褐色・灰緑色のものがみられる。なお、54には筆による鉄絵（波状文）が描かれ、写真Ｈには銅緑釉が落とされている。Ｄ区で出土した11～13・17は、焼成不足であることから１号窯の最終焼成時に伴うものと思われる。緻密な胎土が使用され、破断面は白色・灰白色・黄白色を呈する。

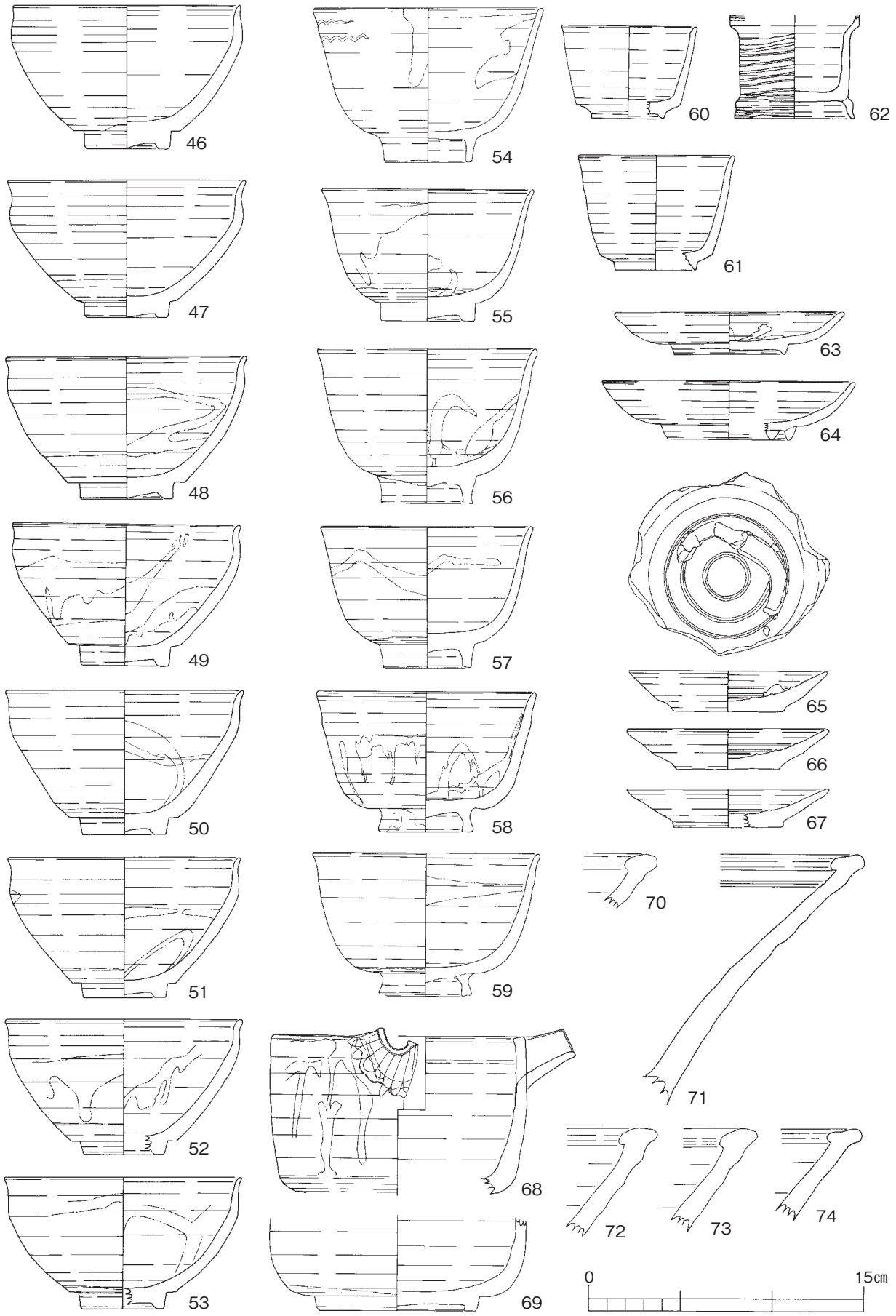
Ｂ類（19～23）は器高7.5cm、口径11.1cm、高台径4.9cm 前後である。高台の幅が広く断面形が方形に近い１類（19～20・23）と、高台内側中央が指ナデにより窪み撥形を呈する２類（21・22）に細分できる。いずれもＡ類と同様、体部下方は丸みを帯び上方はほぼ直線的に立ち上がり、口縁部は外反しない。体部上方から底部にかけて回転ヘラ削り調整、高台周辺は回転ナデ調整される。高台周辺を除き鉄釉が施され茶色から焦茶色、体部内外面には筆による灰釉の流し掛けが認められ灰釉は黄白色から飴色の発色である。緻密な胎土が使用され、破断面は白色から茶色を呈する。（川端ちえ美）



第16図　第1・2次調査出土遺物（1）



第17図　第1・2次調査出土遺物（2）



第18図　第1・2次調査出土遺物（3）

３．端反碗（24～30・55～59）

端反碗は、削り出し輪高台のＡ類と付高台のＢ類に大別できる。Ａ類（55）は器高7.2cm、口径11.4cm、高台径5.1cm である。高台の断面形は外側が高く直立し、内側は低く外傾する。体部下方の丸みは強く、上方はほぼ直線的に立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。体部上方から底部にかけて回転ヘラ削り調整されている。高台周辺を除き鉄釉が施され黒褐色、体部内外面には筆による灰釉の流し掛けが認められ黒色の発色である。緻密な胎土が使用され、破断面は黄褐色を呈する。

Ｂ類は（24～30・56～59）は、器高7.5cm、口径11.5cm、高台径4.8cm のやや大型の56、器高7.3cm、口径9.8cm、高台径5.0cm のやや小型の25を除くと、器高7.4cm、口径11.7cm、高台径4.8cm 前後のものが一般的である。丸碗Ｂと同様、高台の断面形が方形に近い１類（24・27・29・56・57）と、高台内側中央が指ナデにより窪み撥形を呈する２類（25・26・28・30・58・59）とに細分できる。いずれもＡ類と同様、体部下方の丸みは強く上方はほぼ直線的に立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。体部上方から底部にかけて回転ヘラ削り調整され、高台周辺には回転ナデ調整が施される。高台周辺を除き鉄釉が施されるのが一般的であるが、26・27・58には高台の外側まで鉄釉が掛かる。いずれも茶色から黒褐色の発色で、体部内外面には筆による灰釉の流し掛けが認められ飴色から黒色を呈する。緻密な胎土が使用され、破断面には白色・灰白色・黄白色・黄褐色を呈する。（藤澤良祐・田浦舞衣）

４．小杯（60・61）

器高5.0～6.2cm、口径7.1～9.2cm、高台径4.0～5.2cm である。高台は外側が内傾、内側が外傾した断面形が逆台形を呈する付高台である。体部下端に稜が入り上方は直線的に立ち上がり、口縁部はほとんど外反しない。体部中央から底部外面にかけて回転ヘラ削り調整され、高台周辺には回転ナデ調整が施される。全面に長石釉系の釉薬が施されやや光沢のある黄白色を呈するが、高台端部の釉薬は拭い取られている。胎土は緻密で、破断面は灰白色から黄白色を呈する。なお、小杯には体部内外面下端にトチンの痕跡が残ることから、入子状にして直接重ね焼きされたものと思われる。（加藤竜生）

第２節　皿・向付類（第17・18図）

皿・向付類には、丸皿・中皿・向付・盤などがある。

１．丸皿（32～34）

丸皿は器高2.4cm、口径12.3cm、高台径7.3cm 前後である。断面が逆台形の削り出し高台で、体部下方が丸みをもち上方は開く。底部外面から体部下方にかけて回転ヘラ削り調整され、口縁端部は回転ナデ仕上げされる。全面に長石釉が施され、黄白色の発色である。体部内面には筆により笹絵が描かれ茶色から黒色を呈する。なお、34は体部内面に絵がみられないが、描かれた可能性がある。やや緻密な胎土が使用されるが、0.1～0.2cm 大の鉄分の噴き出しがみられる。破断面は茶褐色から黄白色を呈する。（猪飼 充）

２．中皿（35～37・63・64）

中皿は全て付高台で、長石釉が施されたＡ類と鉄釉に灰釉が流しかけられたＢ類に分類した。Ａ類（37・64）の37は器高4.0cm、口径12.9cm、高台径6.8cm である。断面形が逆三角形を呈し、体部は丸みを持ちながら開く。体部上方にはロクロ目が残り、体部中央から底部まで回転ヘラ削り調整され、高台周辺は回転ナデ調整が施される。全面に長石釉が施され、貫入が認められる。64は器高3.2cm、口径13.6cm、高台径6.6cm である。高台は逆三角形を呈し、体部は全体に丸みをもって開く。底部外面から

体部中央にかけて回転ヘラ削り調整され、高台周辺と口縁端部は回転ナデ調整が施されている。なお、底部外面にはトチンの痕跡が残る。全面に長石釉系の釉薬が施されるが、口縁端部の釉は拭い取られている。緻密な胎土が使用されるが、0.1～0.2cm 大の鉄分の噴き出しがみられる。破断面は黄白色を呈している。

Ｂ類（35・36・63）は器高2.6cm、口径12.3cm、高台径6.3cm 前後である。高台は逆三角形を呈し、高台端部は尖っている。体部は丸みを持って開く。35の口縁部は僅かに外反する。35・63は体部上方から底部にかけて回転ヘラ削り調整され、高台周辺は回転ナデ調整が施される。36は体部にロクロ目が残り、高台周辺に回転ナデ調整が施される。全面に鉄釉が施されるが、35・63は高台端部の釉薬が拭い取られている。35・36は体部内面、63は体部内外面に灰釉が流し掛けられ光沢のある飴色から黒色を呈する。なお35は体部内面に同じ中皿Ｂの他に中皿Ａの破片やヨリ輪が付着する。緻密な胎土を使用し、破断面は白色・淡橙色を呈する。（髙野夏姫）

３．向付（39・40・62）

向付は平向付（39・40）と筒向付（62）がある。39は器高4.2cm、口径15.0cm、高台径6.0cm で、高台の断面形が逆三角形の付高台を有する。体部の調整は不詳だが、高台周辺は回転ナデ仕上げされている。口縁部周辺には布目痕がわずかにみえることから型打ち成形と思われる。全面に長石釉系の釉が掛けられ、灰白色を呈す。緻密な胎土が使用されており、破断面は黄白色から薄茶色を呈する。40は器高4.1cm、長径15.8cm で、底部外面には半環足が貼り付けられている。錆釉を全面に施釉した後、ヘラ状工具で文様を彫りその後全面に長石釉を施すいわゆる鼠志野である。体部は灰色、底部外面は茶褐色から灰色、長石釉が厚い部分や絵の部分は黄白色を呈している。型打ち成形と思われるが、釉が厚く調整不明である。やや緻密な胎土が使用され、破断面は黄白色を呈する。

62は残存高5.6cm、高台径6.5cm。高台の断面形が逆Ｓ字状の付高台を有する。体部下方は直立し、上方は外反し再び直立すると思われる。高台周辺は回転ナデ調整され、内面はロクロ目がみられる。外面に鉄絵による螺旋状の線が施され茶色、全面に長石釉が施され灰白色の発色である。緻密な胎土が使用され、破断面は灰白色を呈する。（脇田 遼）

４．その他（写真Ｂ～Ｇ・Ｉ）

写真Ｂは付高台の盤（向付）で同じ皿が４枚重なって溶着している。全面に灰釉が施され、薄緑色の発色である。底部内面には筆により鉄絵が描かれ緑釉が流し掛けられている。重ね焼きする際に中皿の間にはそれぞれ１～３個の円錐ピンが使用されている。緻密な胎土を使用し、破断面は灰白色を呈する。

写真Ｃは盤（向付）と中皿Ｂ類が溶着した状態で検出された。中皿Ａ類は全面に長石釉が施され、体部内面には筆により鉄絵が描かれる。さらに、口縁端部には呉須釉の流し掛けがされる、いわゆる弥七田織部の向付である。中皿Ｂ類は高さ3.0cm、高台径5.8cm の付高台で体部は歪んでいる。全面に鉄釉が施され、体部内面には黒褐色を呈する灰釉の流し掛けが認められる。緻密な胎土を使用し、破断面は灰白色を呈する。

写真Ｄは菊皿で底部外面には円錐状の足が１カ所貼り付けられている。全面に灰釉が施され薄緑色を呈する。体部内面には匣鉢の底部、体部外面には輪ドチが付着し、円錐ピンの跡が認められる。緻密な胎土を使用し、破断面は灰白色から黄白色を呈する。

写真Ｅは筒向付の体部上方から口縁部の一部が３個重なっている。全面に長石釉が施され、口縁部から体部外面にかけて鉄釉が施され茶褐色を呈する。緻密な胎土で破断面は灰白色を呈する。

写真Ｆ・Ｇは小片であるため正確に全形を知ることはできない。Ｆは盤で底部外面に円錐状の足が貼り付けられている。長石釉が施され、灰白色を呈する。底部内面には呉須絵が描かれている。Ｇは御深井の型打皿で、全面に灰釉が施され薄い緑色を呈す。いずれも緻密な胎土が使用され、破断面は灰白色から黄白色を呈する。

写真Ｉは中皿Ａ類で高台径6.6cmの付高台を有する。全面に長石釉が施され、灰白色の発色である。高台端部は釉が拭い取られている。体部内面には銅緑釉が落とされ還元反応により赤色に発色している。なお、底部内面に高台端部の痕跡があることから直接重ね焼きされたと思われる。やや緻密な胎土が使用され、破断面は黄白色を呈する。

その他に体部内面に段が形成される盤（向付）が出土している（第1次調査報告書写真Ｂ）。削り込み高台で底部内面には鉄絵が描かれ、口縁外面から底部内面にかけて錆釉が流され、全面に長石釉が施される。光沢があり錆釉と鉄絵部分は黒色、他は灰白色の発色である。胎土は緻密で破断面は灰白色を呈する。（髙野夏姫・脇田 遼）

第３節　調理鉢類（第17・18図）

１．擂鉢（44・45・70～74）

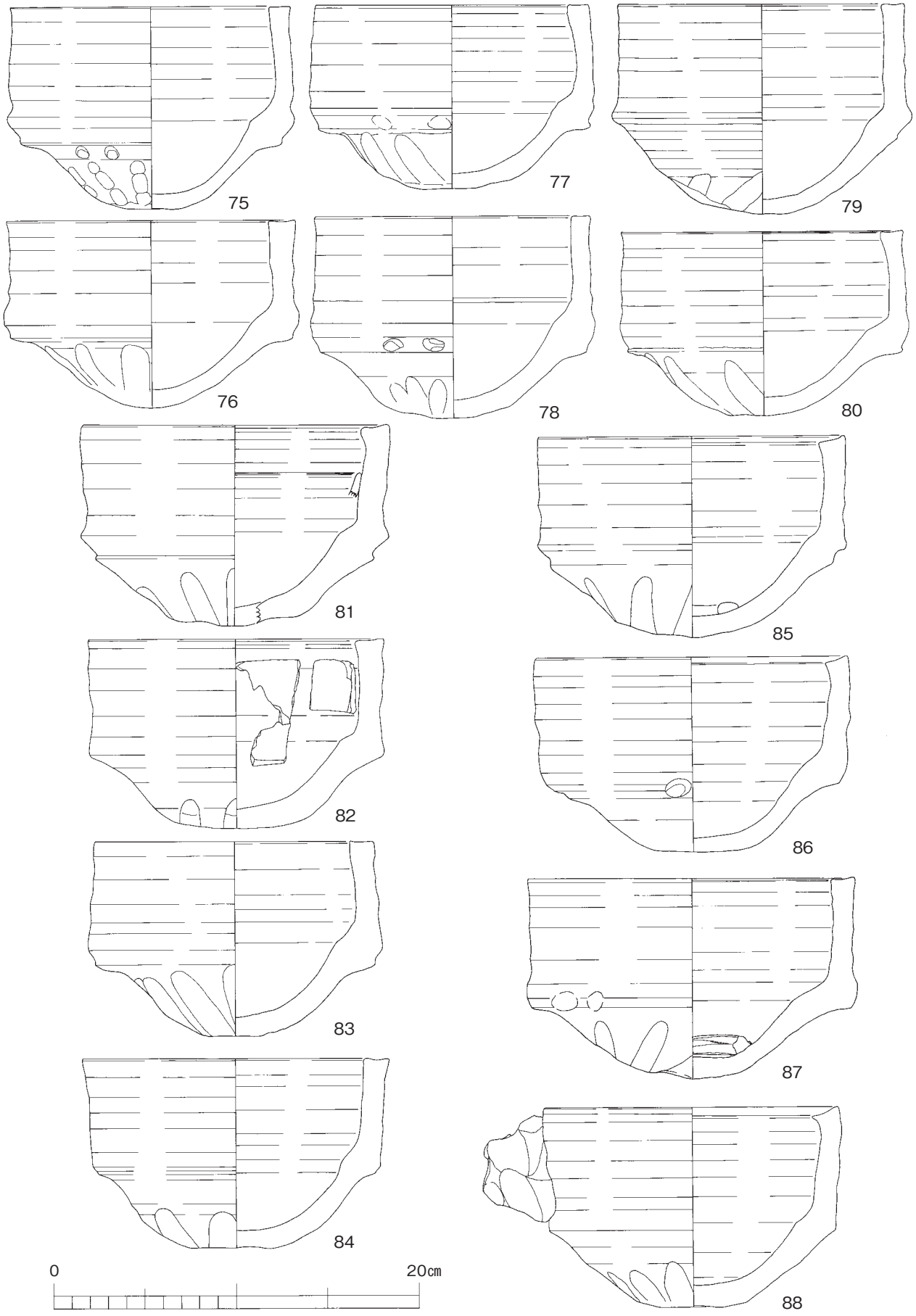
擂鉢は、口縁部の外側に縁帯が形成されるⅠ類と、口縁部が内側に折り返されるⅡ類とに大別される。擂鉢Ⅰ類（44）は口縁部のみの破片である。口縁端部が角張り、縁帯は垂直方向に垂れ下がる。残部全面に錆釉が施されており、光沢のない茶色の発色である。

擂鉢Ⅱ類（45・70～74）は、口縁部が内側に折り返され、上面が浅く窪むＡ類（71・74）と、上面がやや膨らむＢ類（45・70・72・73）とがある。いずれも体部は直線的に開き、体部外面上方にはロクロ目が残るが、体部中央以下には回転ヘラ削り調整されている。45には12本一組、71・74には13本一組の摺目が施され、さらに71には体部内面上方に２条の沈線が巡る。残部全面にＡ類では錆釉が、Ｂ類では鉄釉が施されており、後者はやや光沢のある黒褐色の発色である。擂鉢はいずれも礫を含む胎土で、黄白色から白色を呈すものがほとんどである。（前田真奈）

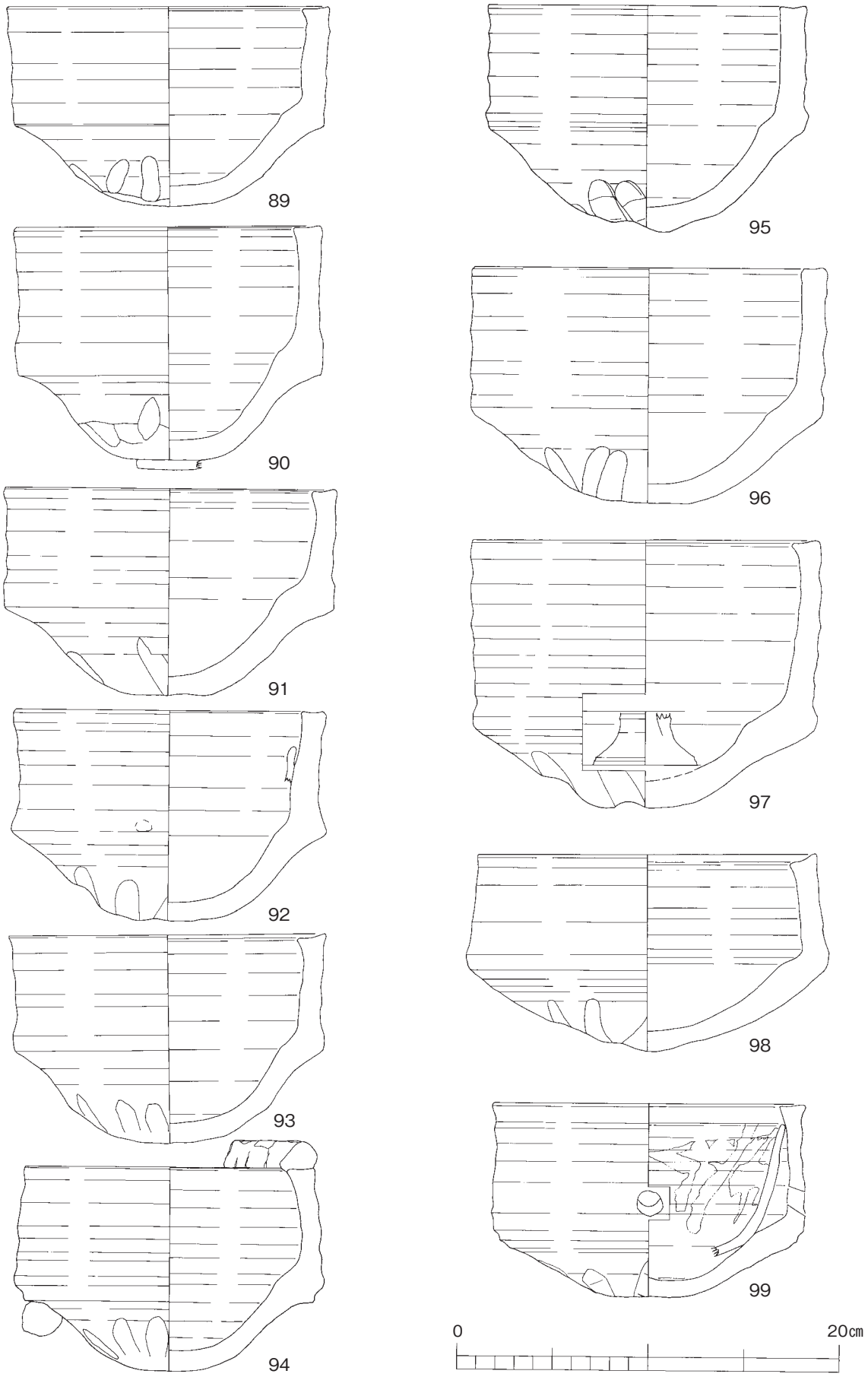
２．片口（68・69）

68は体部がほぼ直立し口縁端部は角張る。体部中央から下方にかけて回転ヘラ削り調整が行われ、体部内面はロクロ目が残り、口縁部周辺には回転ナデ調整が施される。体部上方の１カ所を「Ｕ」字状にカットし、樋状の注口を貼り付けた後に外面をヘラによって調整している。体部外面下方から口縁部周辺の内面にかけて、光沢と透明性のある鉄釉が施され、灰釉による流し掛けが認められる。なお口縁端部の釉薬は拭われており、同形の片口を重ね焼いたものと思われる。鉄釉は黒褐色、灰流しは飴色を呈する。体部内面は光沢や透明性のない薄い鉄釉が施される。胎土は密で、器表面・破断面ともに灰白色を呈する。

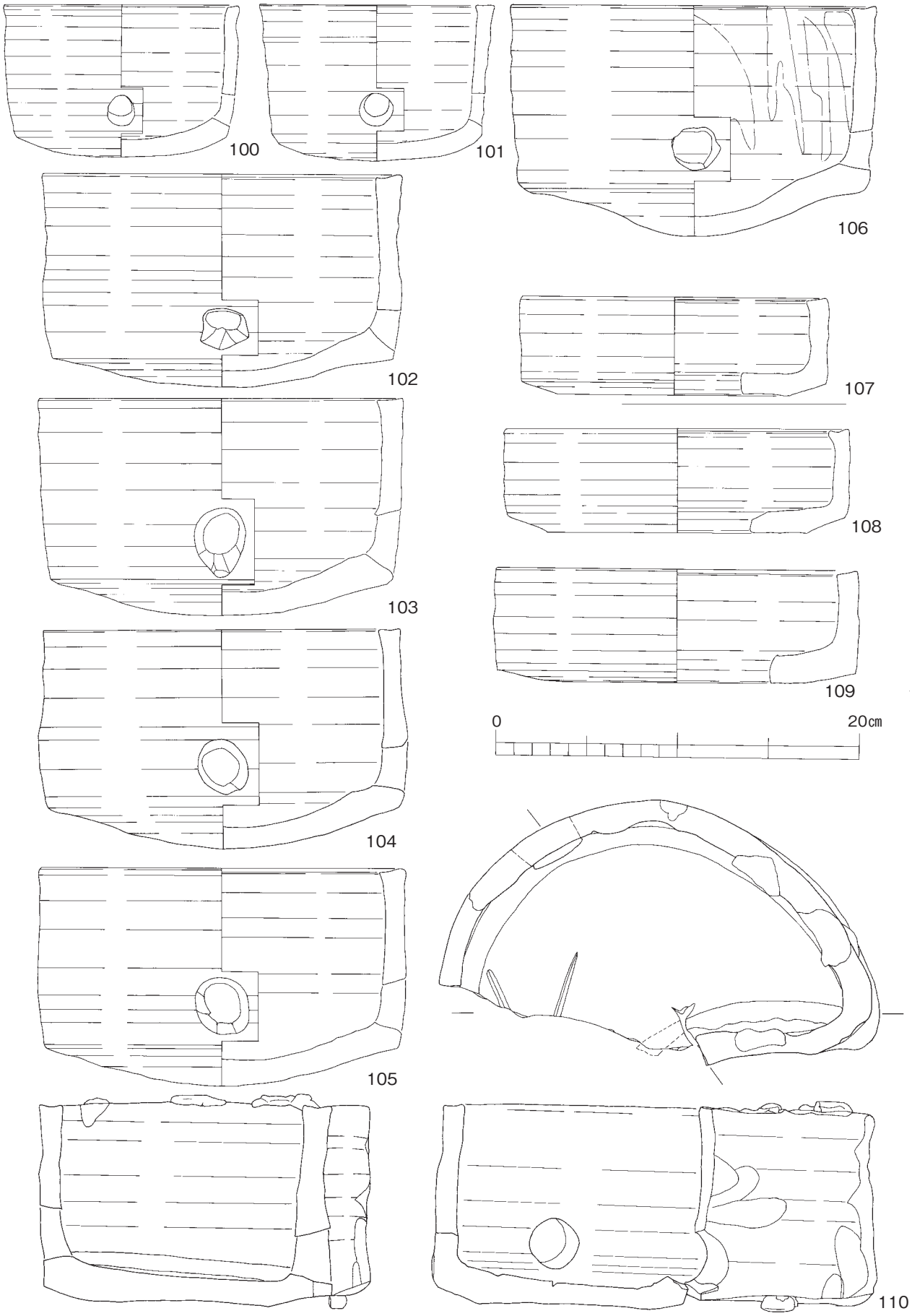
69は高台周辺の破片である。高台は断面形が方形の低い削り出し高台で、体部下方の丸みは強く上方はほぼ直立する。体部外面下方から底部外面まで回転ヘラ削り調整され、その後、高台端部周辺には回転ナデ調整されている。体部内面はロクロ目が残り、底部内面はコテによる調整が行われている。外面には高台周辺を除き鉄釉が施され、光沢があるが不透明な茶色の発色である。体部内面から底部内面には薄く鉄釉が施される。なお体部下端には重ね焼き痕が一周し、底部内面には輪ドチが付着することから、片口の内部で碗類の焼成が行われたものと思われる。胎土は密で、器表面・破断面ともに白色を



第19図　第1・2次調査出土遺物（4）



第20図　第１・２次調査出土遺物（５）



第21図　第1・2次調査出土遺物（6）

呈する。（森まどか）

第４節　その他（第17・18図）

その他、徳利・耳付水注・水滴・蓋などが出土している。

１．徳利（43）

残存高4.5cm、口径5.2cm である。細長い頸部の上方は大きく外反し、口縁端部を短く立ち上がり受口状になる。頸部内外面にロクロ目が残る。残部全面に鉄釉が施され光沢のある黒色の発色で、２～３mm 大の茶色の結晶が全面に認められる。緻密な胎土が使用され破断面は黄白色を呈する。（伊藤真央）

２．耳付水注（第１次調査報告書写真Ａ）

耳付水注は窯内から数個体出土しているが、歪みが大きく正確に全形を知ることができない。平底で底部外面には糸切り痕が残る。胴部外面下方から上方にかけては回転ナデ調整が施され、底部内面から体部内面にはロクロ目が残る。口縁部は外側に折り返され玉縁状に成形されており、注口部は胴部上方に粘土塊を貼り付けた後、外面から棒状の工具によって孔が開けられている。耳部は紐状で、両端を指で押さえ胴部に貼り付けている。匣鉢詰めされず匣鉢蓋の上で焼成されており、81には匣鉢蓋が２枚重なっている。底部外面周辺を除き鉄釉が施され、光沢はあるが、透明性のない茶色や透明性のある黒褐色のものがみられる。胎土は密で、器表面・破断面ともに灰白色や白色を呈する。（森まどか）

３．水滴（31）

平底で、器高2.2cm である。上面には径4.0mm の空気孔、1.5～2.5mm の注口がある。粘土板を組み合わせたタタラ作りである。焼成状態は良好で、全面に灰釉が施されており、緑色の発色で、いわゆる御深井製品である。底部外面の釉薬は拭い取られており黄白色を呈する。緻密な胎土が使用され灰白色を呈するが、１～２mm 大の鉄分の噴き出しもみられる。（三ツ本樹純）

４．蓋（38・Ａ）

器高1.8cm、口径4.4cm 前後、水注（汁次）の蓋であろう。手捏ねによる成形と思われ、底部にはフリーハンドのヘラ削り調整がみられる。38は底部周辺を除き灰釉系の釉薬が施され淡緑色の発色である。緻密な胎土が使用され、灰白色を呈する。Ａは底部周辺を除き長石釉系の釉薬が施され黄白色の発色である。0.1cm 以下の白色礫をわずかに含む緻密な胎土が使用され、黄白色から薄茶色を呈する。

（伊藤真央）

５．灯明皿（65～67）

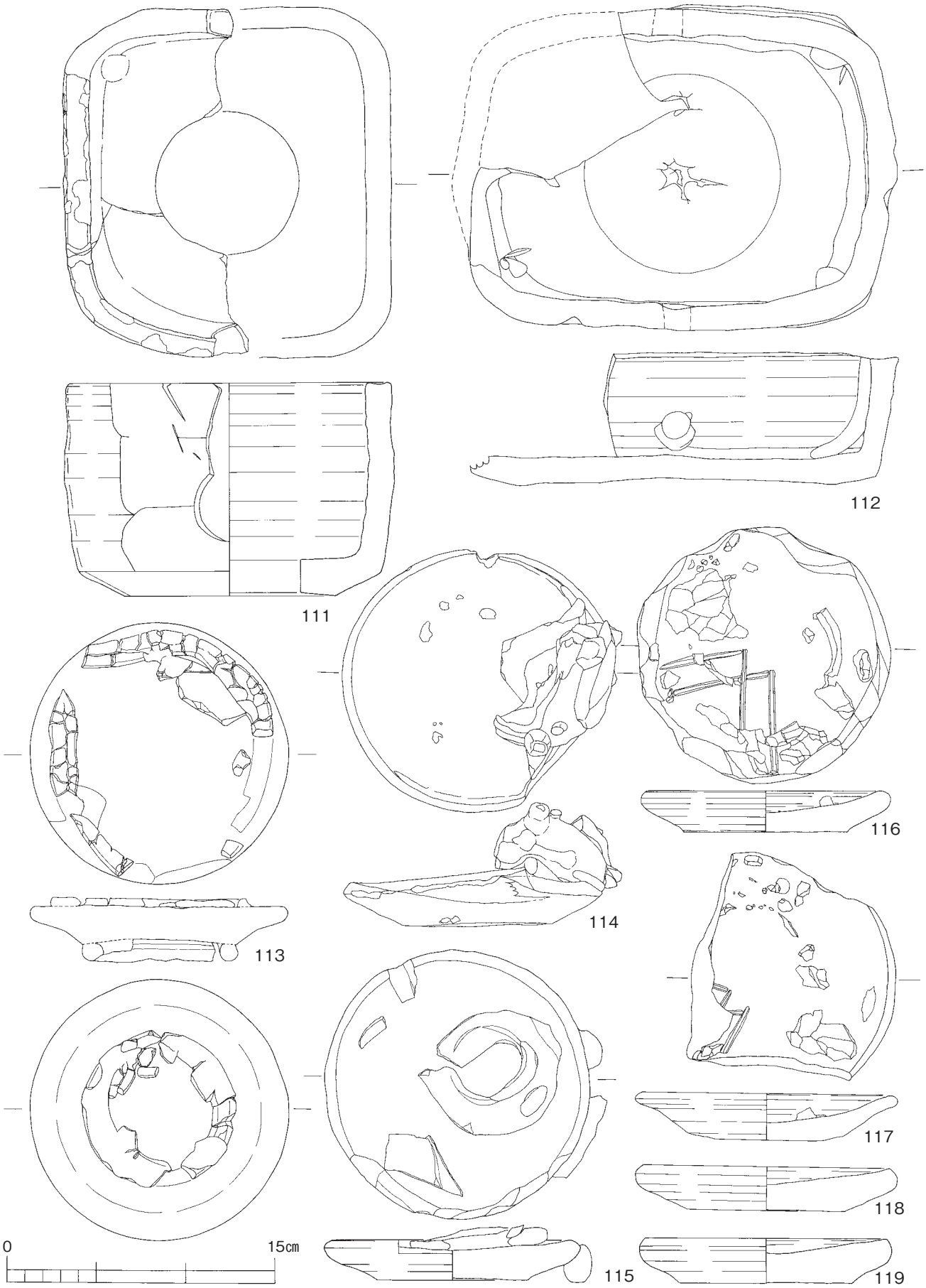
器高2.2cm、口径10.8cm、底径5.8cm 前後、糸切り痕未調整の平底で、体部は直線的に開き、口縁端部は薄く仕上げられる。内面にはコテの押圧による３～４条の凸線が同心円状に巡る。体部外面にはロクロ目が認められる。なお65には内面に輪ドチが付着する。いずれも無釉で、やや粗めの胎土が使用され、破断面は灰白色を呈する。（長縄憲治）

第５節　窯道具類（第19～27図）

窯道具類には、匣鉢・匣鉢蓋・トチン・ハリ・焼台などがある。

１．匣鉢（75～112）

匣鉢は形状からⅠ～Ⅳ類の４種に分類した。Ⅰ類（75～99）は、コテの押圧で底部が押し出された丸底で、器高10.0～13.9cm、口径8.0～18.2cm、底径5.6～18.5cm である。底部外面には糸切り痕が残り、



第22図　第1・2次調査出土遺物（7）

底を押し出すために裏返し、コテに押さえつけた際に付いたと思われる左掌の痕跡が残る。体部内外面ともにロクロ目が強く、口縁部は回転ナデ調整が施される。なお底部外面の外縁に回転ヘラ削り調整（82・83・88・90・92・95～99）や、回転ナデ調整（91）が施されるものがある。86は焼成後に施された穿孔と思われるものや、99は体部中央に1.4cm 程度の穿孔が２カ所認められる。75・77・78は、底部外面の外縁に指起こし痕が認められる。77は鉄釉碗の高台痕が、80は輪ドチ痕、93はヨリ輪痕が認められる。付着物に関して、長石釉・鉄釉碗の付着（76）、鉄釉碗類の付着（79・92・93・99）、端反碗の溶着（82）、灰釉製品（花瓶か）の付着（97）など製品が付着してみられるものや、輪ドチや鉄釉の付着（85～87）、ハリ・ヨリ輪の付着（88・89）、粘土板の付着（90）といった窯道具の付着や自然釉の降灰が認められる。

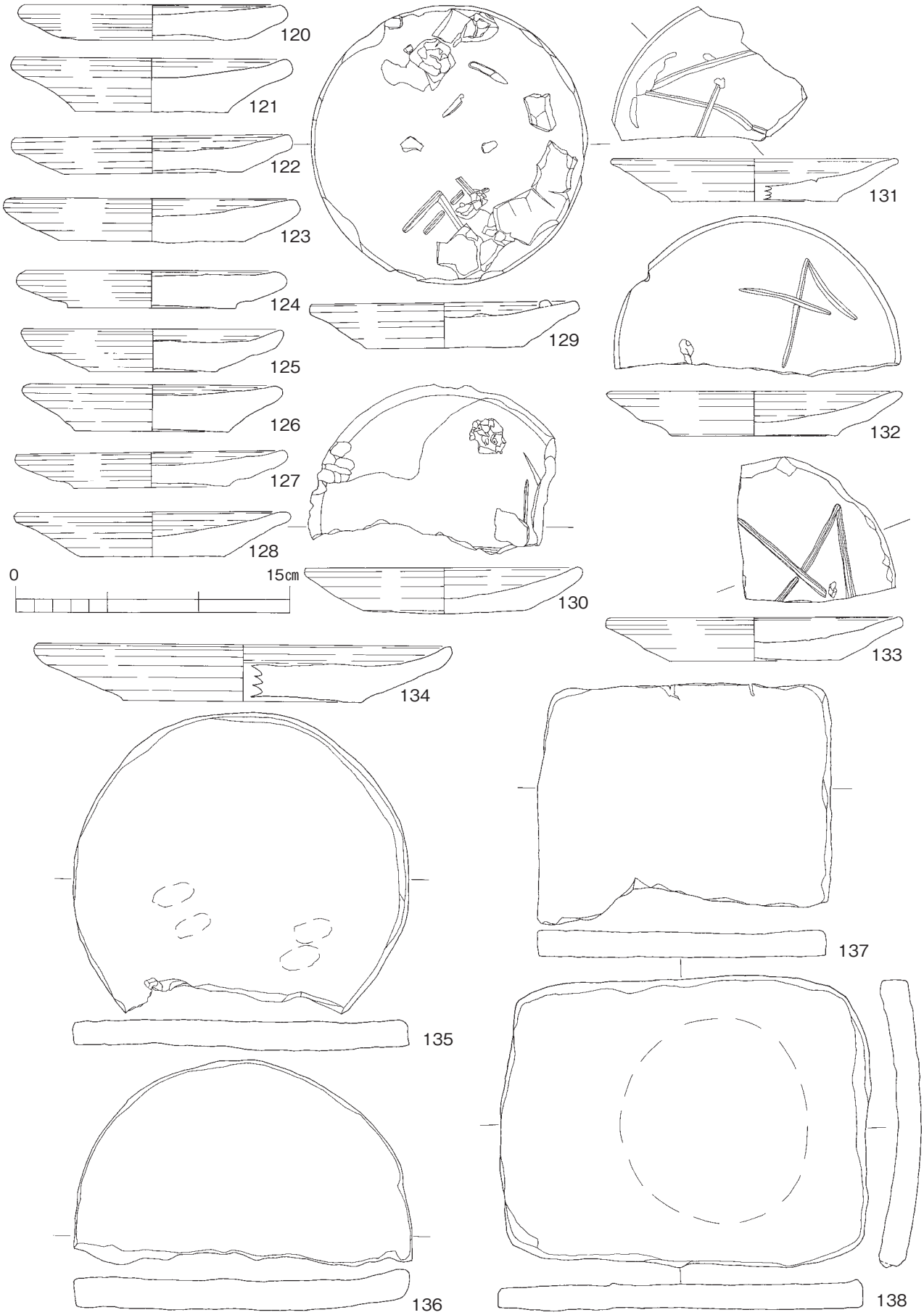
Ⅱ類（100～106）は、丸底で体部下方２カ所に穿孔が認められるが、底部はⅠ類のように押し出されていないものである。100・101は器高8.2～8.5cm、口径12.8cm、底径11.6cm である。底部外面に回転ヘラ削り痕が残り、底部外縁に回転ヘラ削り調整が施される。小杯を焼成される際に使用されていたと思われる。100については残存率が低いため、体部穿孔は２方向あったものと思われる。102～106は器高11.2～12.6cm、口径9.8～19.8cm、底径9.4～19.2cm である。底部外縁に回転ヘラ削りが施され、底部外面に糸切り痕が認められる。102の糸切り痕は左回転している。104は糸切り痕の後で軽く手を押さえた痕跡がある。105の糸切り痕は右回転となっている。102～106は、体部内外面ともにロクロ目が強く、口縁部は回転ナデ調整が施される。

Ⅲ類（107～109）は、器高が低く平底で、底部に3.5～5.1cm 程度の穿孔が認められる。器高5.3～6.2cm、口径16.8～19.6cm、高台径12.8～14.2cm、内径は幅14.4～17.6cm、深さ4.1～4.6cm である。穿孔部には回転ナデ調整が施され、底部外面には糸切り痕が残り、底部外縁に回転ヘラ削り調整が施される。体部内外面ともにロクロ目が強く、口縁部は回転ナデ調整が施される。

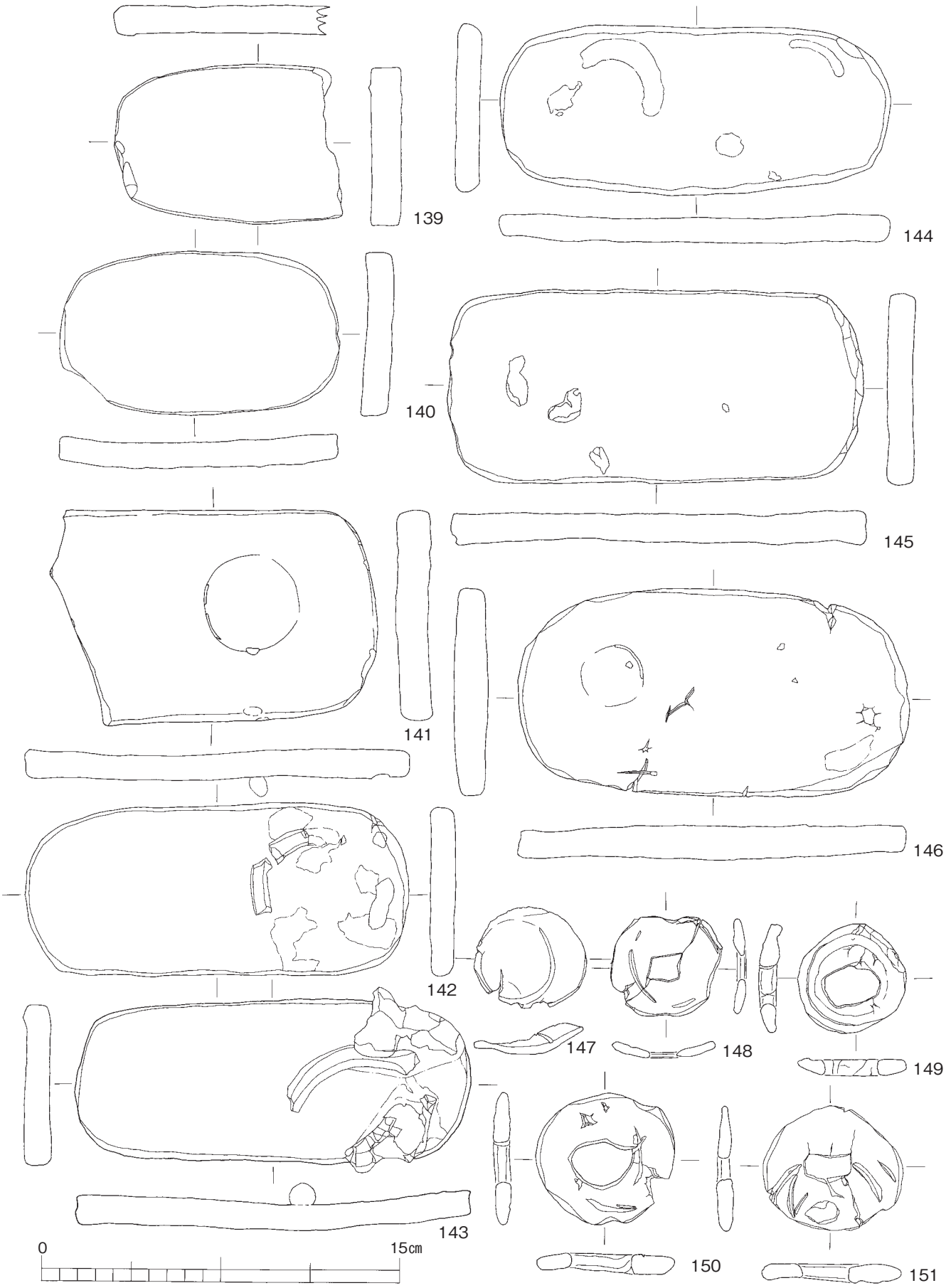
Ⅳ類（110～112）は、平底で糸切り後に形を変形させたもので、110は三日月形で器高10.8cm、口径16.0cm、底径10.0cm、内径は幅13.2cm、深さ9.5cm、111は正方形で器高11.8cm、口径17.8cm、底径11.7cm、内径の幅15.6cm、深さ9.8cm、112は長方形で、器高6.7cm、口径17.5×25cm、底径12×17cm、内径の幅15×22cm、深さ5.5cm である。底部外面に糸切り痕が残り、底部内面には外線にナデ痕が残る。体部下方の２カ所に1.5～2.5cm ほどの穿孔が認められる。体部外面上方から体部内面下方にかけてロクロ目が強く、口縁部は回転ナデ調整が施される。110の底部内面にはヘラ状工具による「千」の窯印が認められる。底部外面の外縁から体部外面下方にかけてフリーハンドのヘラ削り調整が施される。111は底部に8.0cm ほど、体部下方２カ所に4.0cm ほどの穿孔が認められる。底部外面に糸切り痕が残り、底部外縁には回転ヘラ削り調整が施される。体部内外面ともにロクロ目が強く、口縁部は回転ナデ調整が施される。内面には平面形が四角い長石釉系の製品が付着している。（松岡里奈）

２．匣鉢蓋（113～146）

匣鉢蓋はロクロ成形のⅠ類と手捏ね成形のⅡ類に大別できる。Ⅰ類（113～134）はすべてＣ類である。器高2.3cm、口径12.8cm、底径9.2cm のやや小型の116や器高3.1cm、口径22.4cm、底径13.0cm の大型の134を除くと、器高1.9～2.95cm、口径13.0～16.0cm、底径6.7～10.2cm である。いずれも糸切り痕未調整の平底で、体部外面にはロクロ目が残り、口縁部内外面は回転ナデ調整される。底部内面から体部内面にはコテで押圧されるもの（115・117～126・128～132・134）とロクロ目が残るもの（113・114・116・127・133）がある。体部内面にヘラ状工具で116・117に「⋔」、130～133に「千」の窯印が施さ



第23図　第1・2次調査出土遺物（8）



第24図　第1・2次調査出土遺物（9）

れている。114は匣鉢蓋が２枚重ねられその上に耳付水注が置かれている116・117には輪ドチが付着し自然釉がかかっており、特に116は欠損部に釉がかかっていることから何回も使用されたようである。119は内面に製品が融着しており、121は体部内面に製品が溶着している。120・123はともに歪みがあり、123は歪みが大きい。122にはヘラ刻文様と思われるものがある。124・129は自然釉が降灰している。126は直径6.0cm 大の高台が溶着しており、129には輪ドチが溶着している。無釉でやや粗目の胎土が使用され0.1～0.2cm 大の鉄分の噴き出しがみられる。

Ⅱ類（135～146）は円盤形、方形、小判形と３種類ある。135・136は円盤形で、直径18.3cm 程の円形で、厚さ1.55cm 前後である。135は上下面に押圧痕と静止糸切痕が残る。136は上面に薄く糸切り痕と手の平の押さえ痕、下面に板目状圧痕が認められる。やや粗目の胎土を使用し、破断面は薄茶色から淡赤褐色を呈する。

137・138は方形で137は残存長径13.0cm、短径15.9cm、138は長径19.8cm、短径15.5cm の長方形で厚さ1.3cm 程である。上下面に静止糸切り痕が認められる。137はタタラ成形を行っていない。無釉でやや粗目の胎土を使用し、破断面は薄茶色から茶褐色を呈する。

139～146は小判形で139・140は小形で139は残存長径11.9cm、短径9.0cm、140は長径15.5cm、短径9.0cm の楕円形で厚さ1.6cm 程度である。139・140は上下面に糸切り痕が認められる。141は残存長径17.0cm、短径11.5cm、142～146は長径21.8cm、短径10.0cm 前後の楕円形である。厚さは1.5cm 程度である。141は上面に径5.5cm 程の高台端部が付着し円状に灰釉系か長石釉系の釉が付着しており、小杯を焼成したと思われる。142は上面にトチの付着と剥離痕があり鉄釉が付着している。143は上面にヨリ輪とボロが溶着しており、下面にはヨリ輪の痕跡が認められることから焼成時に上下関係なく使用されたと思われる。144は三日月状に長石釉、鉄釉が付着している。145はトチンが溶着しており、トチンの痕には長石釉がかかっている。側面には指跡が残る。146は径3.5cm の高台端部が付着している。長石釉がかかりヘラ刺突痕が認められる。無釉でやや粗目の胎土が使用され、0.1～0.7cm 大の鉄分の噴き出しがみられる。（髙野夏姫・大矢敬子・西森睦月）

３．板ドチ（147・171）

板ドチは製品を重ね焼きする際に溶着を防止するために使用されたものである。147・171には上下面に掌紋がみられることから、手捏ねによる成形と思われる。147の上面には径4.0cm ほどの高台の痕跡、171の上面には径4.6cm ほどの高台の痕跡が残っている。無釉でやや粗目の胎土が使用されている。

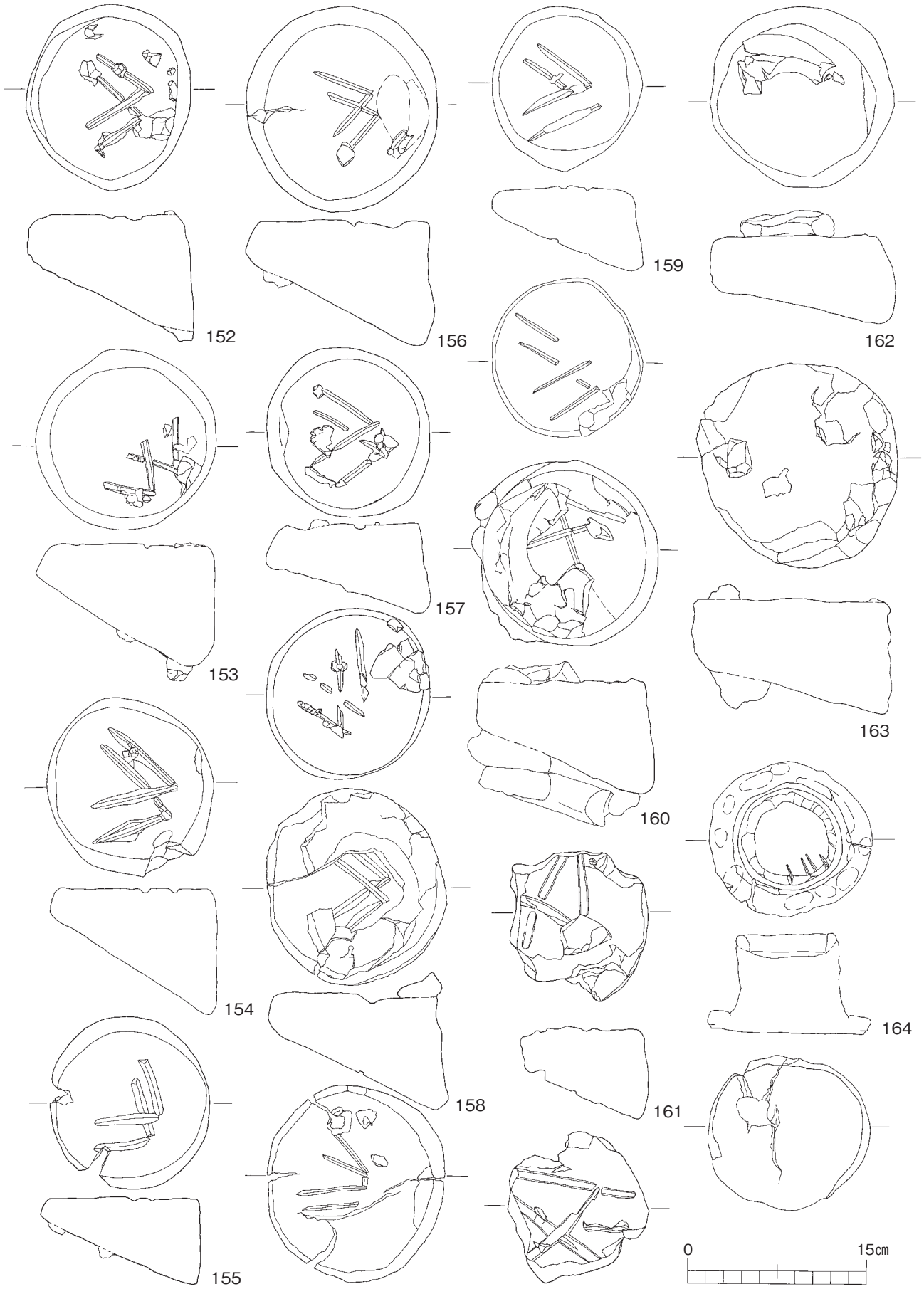
（伊藤真央）

４．輪ドチ（148～151・172・173）

輪ドチは板ドチと同様に製品を重ね焼きする際に溶着を防止するために使用されたものである。148・151・172・173には上下面に掌紋がみられることから、手捏ね成形と思われる。148・172・173の上面には径4.2～5.0cm ほどの高台の痕跡、151には上面に灰釉が流し掛けされた鉄釉丸皿の高台の接合痕が残っている。無釉で、やや粗目の胎土が使用される。（伊藤真央）

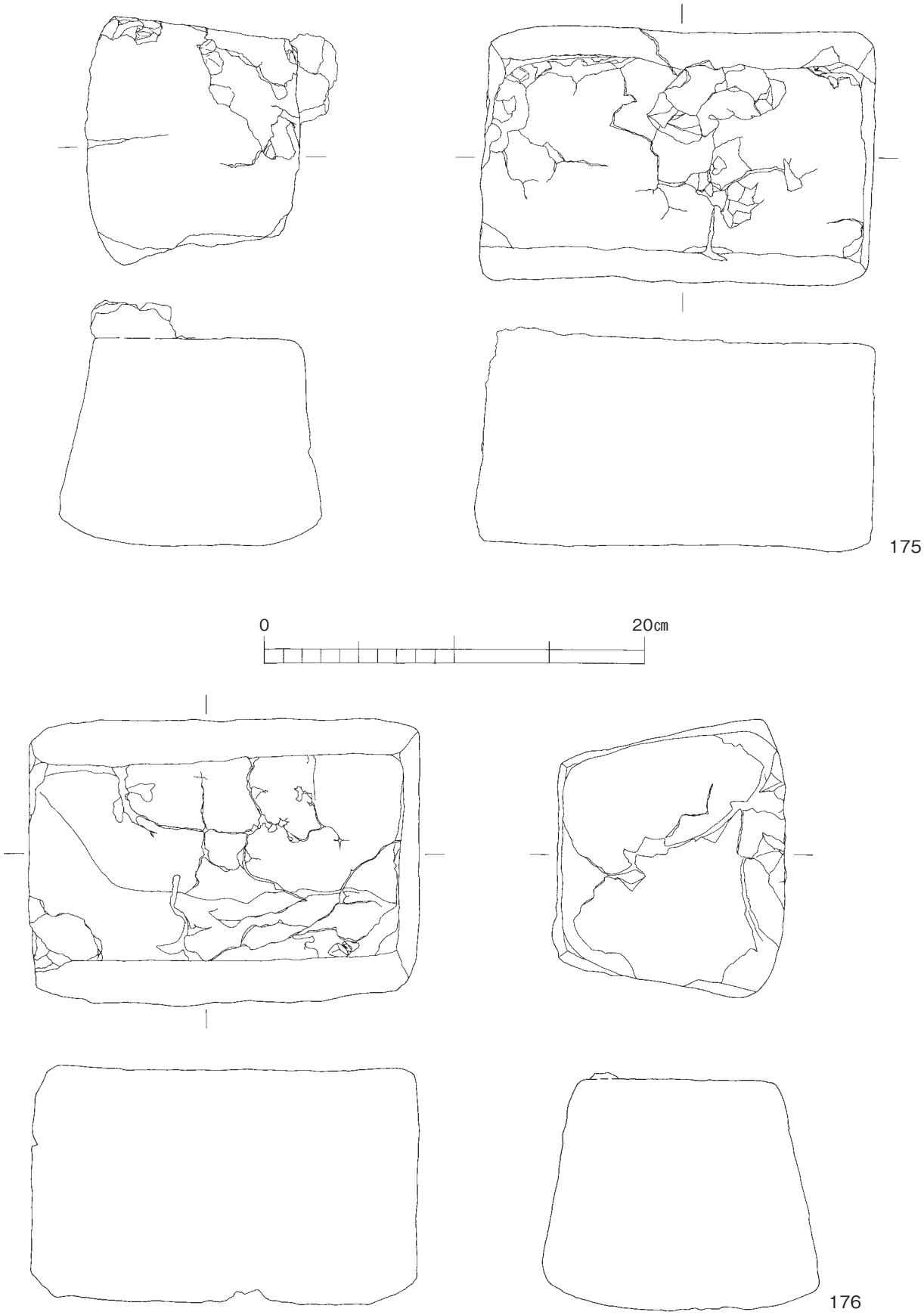
５．焼台（152～163）

焼台とは焼成室に水平面を作るために置かれる粘土塊である。上面の径が8.3cm、床面傾斜が13度の162と上面の径が10.4cm と大形で床面傾斜が16度と緩やかな163を除くと上面の径は7.2cm～9.3cm、床面傾斜は21度～32度である。152～156は上面に「⋔」、157～159は上下面に「⋔」、160は上面に「千」、161は上下面に「千」の窯印がヘラ状工具によって施されている。「千」はＣ区の窯内とＤ区から出土



第25図　第1・2次調査出土遺物（10）

第26図　第1・2次調査出土遺物（11）



第27図　第1・2次調査出土遺物（12）

している。156は親指と思われる指跡が確認される。156・158・159～163は輪ドチの付着、痕跡が残る。なお、160は上面に１個、下面に２個輪ドチが付着している。側面に自然釉が降灰している。無釉でやや粗目の胎土が使用され、0.2～0.5cm 大の礫を含む。（高野夏姫）

６．ハリ（165～170）

ハリとは、積み重ねて窯詰めされた匣鉢を、焼成時に倒れないようにするための粘土塊である。両側面を除く全体に指痕・指紋・掌紋がみられる。165・169は両側面にロクロ目が残っており、匣鉢と匣鉢の間に挟んで使用したものである。165～168・170は片側にロクロ目がみられるが、反対側にはみられず、匣鉢と側壁の間に挟んで使用されたものと思われる。火表と上面には自然釉が付着している。胎土は粗く、0.1～1.0cm 大の礫を含む。器表・破断面は赤褐色を呈する。（森まどか）

７．クレ（174～176）

クレとは耐火度の非常に高い粘土で作られ、窯を構築するために用いられる粘土塊である。175は側面の３面に、176は側面の２面に板目状圧痕が残っている。さらに174は正面を除き５面、175・176では上面に砂状の付着物やクレをつくる際に使われる粘土とは異なる粗い粘土の付着がみられることから、クレの上に何かが載っていた可能性がある。なお、それぞれ１面のみよく焼けている面があり、主に窯内の燃焼室と焼成室を仕切るものとして使用された可能性が考えられる。胎土はやや粗目で、0.2～1.5cm 大の礫を含む。器表・破断面は茶色・茶褐色を呈する。（伊藤真央）

８．その他（164）

器高5.5cm、口径5.0cm、底径8.5cm 前後である。径6.0cm ほどの手捏ねの粘土円柱に、円盤状の底部とヨリ輪状の粘土紐を接合している。底部外面の糸切り痕は未調整で、ヨリ輪の上面には長石釉が付着している。無釉で胎土は粗いため、トチンの一種と思われる。（堀内 有）

第６節　溶着資料および天井支柱（第28図）

１．溶着資料（第１次調査報告書写真Ｄ～Ｊ）

溶着資料は天目茶碗や丸碗、端反碗などの碗類に窯道具が溶着しているものと、丸皿や折縁皿などの小皿類に窯道具が溶着しているものとに大別できる。原則的に前者は丸底匣鉢（匣鉢Ａ類）が使用されており、後者には平底の匣鉢が使用されていた。前者は概ね製品と匣鉢が交互に重なるように溶着しており、１点につき一つから三つの製品で構成されている。また製品の形が崩れていて器種を判別できないものも確認された。

後者は基本的に１点につき０ないし１個の匣鉢が溶着している。匣鉢が二つ溶着しているものは２点のみ確認された。後者は製品を連続で重ねているものが多く、最多で折縁皿を５枚重ね、匣鉢を１枚挟み、さらに折縁皿を４枚重ねたものが確認されている。特徴的な品として後者の中で１点だけ天目茶碗が溶着しているものがあった。また大窯で焼かれたものも２点見つかっている。（脇田 遼）

２．天井支柱（177）

天井支柱は平面形が楕円形を呈する。三日月形の匣鉢を四つ重ねて作られており、匣鉢と匣鉢の間はより土によって接着されている。中には粘土が詰められ、窯道具や製品の破片が僅かに混じる。三日月形の凹みの部分には土を詰め、上から粘土を貼って固めており、自然釉が付着している。このことから、凹み部分側が火表と考えられる。匣鉢全体には同じく粘土が貼られており、裏面では２層の粘土が確認される。Ｂ区の窯内から出土している。（森まどか）

第28図　第１・２次調査出土遺物（13）

第１表　第２次調査Ｄ区出土遺物台帳

No.	日付	調査区	出土層位	基本土層	注記
1	20160816	Ｄ１区	腐植土	①黒褐色土	YH2.D1.No.1
2	20160816	Ｄ１区	腐植土	①黒褐色土	YH2.D1.No.2
3	20160816	Ｄ４区	腐植土	①黒褐色土	YH2.D4.No.3
4	20160816	Ｄ４区	腐植土	①黒褐色土	YH2.D4.No.4
5	20160817	Ｄ１区	にぶい赤褐色	④にぶい赤褐色土	YH2.D1.No.5
6	20160817	Ｄ１区	にぶい赤褐色	④にぶい赤褐色土	YH2.D1.No.6
7	20160817	Ｄ１区 P-1	にぶい赤褐色	④にぶい赤褐色土	YH2.D1.No.7
8	20160817	Ｄ１区 P-1	にぶい赤褐色	④にぶい赤褐色土	YH2.D1.No.8
9	20160817	Ｄ１区	にぶい赤褐色	④にぶい赤褐色土	YH2.D1.No.9
10	20160817	Ｄ４区	腐植土	①黒褐色土	YH2.D4.No.10
11	20160817	Ｄ４区	にぶい赤褐色	④にぶい赤褐色土	YH2.D4.No.11
12	20160817	Ｄ４区	にぶい赤褐色	④にぶい赤褐色土	YH2.D4.No.12
13	20160818	Ｄ１区	にぶい赤褐色	④にぶい赤褐色土	YH2.D1.No.13
14	20160818	Ｄ１区	にぶい赤褐色	④にぶい赤褐色土	YH2.D1.No.14
15	20160818	Ｄ１区	にぶい赤褐色	④にぶい赤褐色土	YH2.D1.No.15
16	20160818	Ｄ２区	腐植土	①黒褐色土	YH2.D2.No.16
17	20160818	Ｄ２区	腐植土	①黒褐色土	YH2.D2.No.17
18	20160818	Ｄ２区	腐植土	①黒褐色土	YH2.D2.No.18
19	20160819	Ｄ２区	赤褐色土	⑦褐色土	YH2.D2.No.19
20	20160819	Ｄ２区	赤褐色土	⑦褐色土	YH2.D2.No.20
21	20160819	Ｄ２区	赤褐色土	⑦褐色土	YH2.D2.No.21
22	20160819	Ｄ２区	赤褐色土	⑦褐色土	YH2.D2.No.22
23	20160819	Ｄ２区窯外	赤褐色土	⑦褐色土	YH2.D2.No.23
24	20160819	Ｄ２区窯外	赤褐色土	⑦褐色土	YH2.D2.No.24
25	20160819	Ｄ３区	腐植土	①黒褐色土	YH2.D3.No.25
26	20160819	Ｄ３区	腐植土	①黒褐色土	YH2.D3.No.26
27	20160819	Ｄ３区	腐植土	①黒褐色土	YH2.D3.No.27
28	20160820	Ｄ２区 P-2	赤褐色土	⑦褐色土	YH2.D2.No.28
29	20160820	Ｄ３区	にぶい赤褐色	④にぶい赤褐色土	YH2.D3.No.29
30	20160820	Ｄ３区	にぶい赤褐色	④にぶい赤褐色土	YH2.D3.No.30
31	20160820	Ｄ３区	にぶい赤褐色	④にぶい赤褐色土	YH2.D3.No.31
32	20160820	Ｄ３区	にぶい赤褐色	④にぶい赤褐色土	YH2.D3.No.32
33	20160820	Ｄ３区	にぶい赤褐色	④にぶい赤褐色土	YH2.D3.No.33
34	20160820	Ｄ３区	にぶい赤褐色	④にぶい赤褐色土	YH2.D3.No.34
35	20160820	Ｄ３区	にぶい赤褐色	④にぶい赤褐色土	YH2.D3.No.35
36	20160820	Ｄ３区	にぶい赤褐色	④にぶい赤褐色土	YH2.D3.No.36
37	20160820	Ｄ３区	にぶい赤褐色	④にぶい赤褐色土	YH2.D3.No.37
38	20160820	Ｄ４区窯外	にぶい赤褐色	④にぶい赤褐色土	YH2.D4.No.38
39	20160820	Ｄ４区	にぶい赤褐色	④にぶい赤褐色土	YH2.D4.No.39
40	20160821	Ｄ３区	にぶい赤褐色	④にぶい赤褐色土	YH2.D3.No.40
41	20160821	Ｄ３区	にぶい赤褐色	④にぶい赤褐色土	YH2.D3.No.41
42	20160821	Ｄ３区拡張部	にぶい赤褐色	④にぶい赤褐色土	YH2.D3.No.42
43	20160821	Ｄ３区拡張部	にぶい赤褐色	④にぶい赤褐色土	YH2.D3.No.43
44	20160821	Ｄ４区拡張部	赤褐色	⑦褐色土	YH2.D4.No.44
45	20160821	Ｄ４区拡張部	赤褐色	⑦褐色土	YH2.D4.No.45
46	20160822	Ｄ３区拡張部	にぶい赤褐色	④にぶい赤褐色土	YH2.D3.No.46
47	20160822	Ｄ３区拡張部	にぶい赤褐色	④にぶい赤褐色土	YH2.D3.No.47
48	20160822	Ｄ３区拡張部	にぶい赤褐色	④にぶい赤褐色土	YH2.D3.No.48

第２表　第２次調査Ｅ区出土遺物台帳

No.	日付	調査区	出土層位	基本土層	注記
1	20160815	Ｅ区	表採	表採	YH2.E1.No.1
2	20160816	Ｅ区	腐植土	①黒褐色土	YH2.E1.No.2
3	20160816	Ｅ区	腐植土	①黒褐色土	YH2.E1.No.3
4	20160816	Ｅ区	腐植土	①黒褐色土	YH2.E1.No.4
5	20160816	Ｅ区	茶褐色土	③褐色土	YH2.E1.No.5
6	20160816	Ｅ区	茶褐色土	③褐色土	YH2.E1.No.6
7	20160816	Ｅ区	暗褐色土	②暗赤褐色土	YH2.E1.No.7
8	20160816	Ｅ区	暗褐色土	②暗赤褐色土	YH2.E1.No.8
9	20160817	Ｅ区	暗褐色土	②暗赤褐色土	YH2.E1.No.9
10	20160817	Ｅ区	暗褐色土	②暗赤褐色土	YH2.E1.No.10
11	20160817	Ｅ区	暗褐色土	②暗赤褐色土	YH2.E1.No.11
12	20160817	Ｅ区	暗褐色土	②暗赤褐色土	YH2.E1.No.12
13	20160817	Ｅ区	サブトレンチ	②暗赤褐色土	YH2.E1.No.13
14	20160818	Ｅ区	暗褐色土	②暗赤褐色土	YH2.E1.No.14
15	20160818	Ｅ区	暗褐色土	②暗赤褐色土	YH2.E1.No.15
16	20160818	Ｅ区	暗褐色土	②暗赤褐色土	YH2.E1.No.16
17	20160819	Ｅ区拡張部	腐植土	①黒褐色土	YH2.E2.No.17
18	20160819	Ｅ区拡張部	腐植土	①黒褐色土	YH2.E2.No.18
19	20160819	Ｅ区拡張部	腐植土	①黒褐色土	YH2.E2.No.19
20	20160819	Ｅ区拡張部	表採	表採	YH2.E2.No.20
21	20160820	Ｅ区	赤褐色土	④赤褐色土	YH2.E1.No.21
22	20160820	Ｅ区	暗褐色土	②暗赤褐色土	YH2.E1.No.22
23	20160820	Ｅ区	暗褐色土	②暗赤褐色土	YH2.E1.No.23
24	20160821	Ｅ区拡張部	暗褐色土	②暗赤褐色土	YH2.E2.No.24
25	20160821	Ｅ区拡張部	茶褐色土	③褐色土	YH2.E2.No.25
26	20160821	Ｅ区拡張部	茶褐色土	③褐色土	YH2.E2.No.26
27	20160821	Ｅ区拡張部	茶褐色土	③褐色土	YH2.E2.No.27
28	20160821	Ｅ区拡張部	腐植土	①黒褐色土	YH2.E2.No.28
29	20160821	Ｅ区拡張部	腐植土	①黒褐色土	YH2.E2.No.29
30	20160822	Ｅ区拡張部	暗褐色土	②暗赤褐色土	YH2.E2.No.30
31	20160822	Ｅ区拡張部	暗褐色土	②暗赤褐色土	YH2.E2.No.31
32	20160822	Ｅ区拡張部	茶褐色土	③褐色土	YH2.E2.No.32
33	20160822	Ｅ区拡張部上方	茶褐色土	⑤褐色土	YH2.E2.No.33
34	20160822	Ｅ区拡張部上方	茶褐色土	⑤褐色土	YH2.E2.No.34
35	20160822	Ｅ区拡張部	暗褐色土	②暗赤褐色土	YH2.E2.No.35
36	20160822	Ｅ区拡張部	茶褐色土	⑤褐色土	YH2.E2.No.36
37	20160823	Ｅ２区上方	茶褐色土	⑤褐色土	YH2.E2.No.37
38	20160823	Ｅ２区	茶褐色土	⑤褐色土	YH2.E2.No.38
39	20160823	Ｅ２区	茶褐色土	⑤褐色土	YH2.E2.No.39
40	20160823	Ｅ２区	茶褐色土	⑤褐色土	YH2.E2.No.40
41	20160823	Ｅ２区中間	褐色土	④赤褐色土	YH2.E2.No.41
42	20160823	Ｅ２区中間	褐色土	④赤褐色土	YH2.E2.No.42

第３表　第２次調査Ｆ区出土遺物台帳

No.	日付	調査区	基本土層	基本土層	注記
1	20160815	Ｆ区	表採	表採	YH2.F1.No.1
2	20160816	Ｆ区	黒褐色土	①黒褐色土	YH2.F1.No.2
3	20160816	Ｆ区	黒褐色土	①黒褐色土	YH2.F1.No.3
4	20160817	Ｆ区	黒褐色土	①黒褐色土	YH2.F1.No.4
5	20160817	Ｆ区	黒褐色土	①黒褐色土	YH2.F1.No.5
6	20160818	Ｆ２区	黒褐色土	①黒褐色土	YH2.F2.No.6
7	20160818	Ｆ２区	黒褐色土	①黒褐色土	YH2.F2.No.7
8	20160818	Ｆ区	黒褐色土	①黒褐色土	YH2.F1.No.8
9	20160821	Ｆ３区	暗赤褐色土	⑦暗赤褐色土	YH2.F3.No.9
10	20160821	Ｆ３区	暗赤褐色土	⑦暗赤褐色土	YH2.F3.No.10
11	20160821	Ｆ３区	暗赤褐色土	⑦暗赤褐色土	YH2.F3.No.11
12	20160821	Ｆ３区	暗赤褐色土	⑦暗赤褐色土	YH2.F3.No.12
13	20160822	Ｆ３区拡張部	暗赤褐色土	⑦暗赤褐色土	YH2.F3.No.13
14	20160822	Ｆ３区拡張部	暗赤褐色土	⑦暗赤褐色土	YH2.F3.No.14
15	20160822	Ｆ３区拡張部	暗赤褐色土	⑦暗赤褐色土	YH2.F3.No.15
16	20160822	Ｆ３区拡張部	暗赤褐色土	⑦暗赤褐色土	YH2.F3.No.16
17	20160822	Ｆ３区	暗赤褐色土	⑦暗赤褐色土	YH2.F3.No.17
18	20160822	Ｆ３区	暗赤褐色土	⑦暗赤褐色土	YH2.F3.No.18
19	20160822	Ｆ３区	暗赤褐色土	⑦暗赤褐色土	YH2.F3.No.19
20	20160822	Ｆ３区	暗赤褐色土	⑦暗赤褐色土	YH2.F3.No.20
21	20160822	Ｆ２区・Ｆ３区	溝中	④にぶい赤褐色	YH2.F2.3.No.21
22	20160822	Ｆ３区	暗赤褐色土	⑧暗赤褐色土	YH2.F3.No.22
23	20160823	Ｆ３区	暗赤褐色土	⑧暗赤褐色土	YH2.F3.No.23
24	20160823	Ｆ３区	暗赤褐色土	⑧暗赤褐色土	YH2.F3.No.24
25	20160823	Ｆ３区	暗赤褐色土	⑧暗赤褐色土	YH2.F3.No.25

第４表　第２次調査全体（表採）出土遺物台帳

No.	日付	調査区	出土層位	基本土層	注記
1	20160818	全体	表採	表採	YH2.No.1
2	20160822	全体	表採	表採	YH2.No.2
3	20160823	全体	表採	表採	YH2.No.3
4	20160824	全体	表採	表採	YH2.No.4
5	20160824	全体	表採	表採	YH2.No.5

第５表　第１・２次調査出土遺物計測表

図	器種	高台※	法量（cm）				注記番号	口縁残存率％	高台残存率％	釉薬	備　考	１次報告書
			器高	口径	底径	高台径						
1	天目茶碗Ａ	B	7.4	12.2		4.6	YH1.AB.№11	50	100	鉄		図１
2	天目茶碗Ｂ	B	7.3	12.2		4.6	YH1.C.№25	5	65	鉄	灰流しか、焼成過多	図２
3	天目茶碗Ｂ	B	8.0	11.4		3.8	YH1.BC.№5	50	50	鉄	灰流しか、やや焼成不足、D4No.3と接合	
4	天目茶碗Ｂ	B	8.3	11.4		4.2	YH2.D3.№32	70	100	鉄	灰流し、やや焼成不足	
5	天目茶碗Ｂ	B	8.3	12.8		4.2	YH2.F3.№12	45	100	鉄	灰流し、焼成過多	
6	天目茶碗Ｂ	B	8.2	11.6		4.4	YH2.F1.№3	20	100	鉄	灰流し、焼成良好	
7	天目茶碗Ｂ	B	7.3	12.2		4.6	YH1.AB.№1	40	100	鉄	灰流し、焼成過多、歪み大	図４
8	天目茶碗Ｂ	B	8.0	12.7		4.5	YH2.E1.№13.14	10	100	鉄	灰流し、焼成良好	
9	天目茶碗Ｂ	B	6.9	11.7		4.4	YH2.E1.№10	10	100	鉄	灰流し、焼成良好	
10	丸碗Ａ	A	8.0	10.9		4.6	YH1.C.№39	15	100	長石		図５
11	丸碗Ａ	A	8.3	11.4		4.4	YH2.D3.№32	70	90	長石	焼成不足	
12	丸碗Ａ	A	8.9	11.7		4.6	YH2.D2.№3.22	60	100	長石	焼成不足	
13	丸碗Ａ	A	8.2	11.5		4.8	YH2.D3.№32.93	80	100	長石	焼成不足	
14	丸碗Ａ	A	7.8	10.9		4.2	YH2.D3.№32	10	100	長石	やや焼成過多	
15	丸碗Ａ	A	8.3	11.6		4.2	YH2.D3.№32	80	100	長石	焼成不足	
16	丸碗Ａ	A	8.4	11.8		4.6	YH2.D3.№32.48	10	70	長石	やや焼成不足	
17	丸碗Ａ	A	8.7	11.6		4.4	YH2.D3.№32.43	60	100	長石	焼成不足	
18	丸碗Ｂ	A	7.7	10.8		5.0	YH1.C.№28	20	55	長石	焼成過多	図６
19	丸碗Ｂ	A	7.4	10.8		5.0	YH1.C.№25・28	15	35	鉄	灰流し	図８
20	丸碗Ｂ	A	7.5	11.7		4.7	YH1.A.№17・18	5	100	鉄	灰流し	図７
21	丸碗Ｂ	A	7.5	11.8		5.0	YH1.C.№28	10	50	鉄	灰流し、焼成不足	図９
22	丸碗Ｂ	A	7.4	10.8		5.0	YH1.C.№25・28	15	35	鉄	灰流し	図10
23	丸碗Ｂ	A	7.8	11.2		4.8	YH2.D3.№32	15	100	鉄	焼成不足	
24	端反碗Ｂ	A	7.6	11.8		4.9	YH2.D3.№32	55	100	鉄	灰流し	
25	端反碗Ｂ	A	7.3	9.8		5.0	YH1.C.№36	10	50	鉄	灰流し	図16
26	端反碗Ｂ	A	7.5	11.7		5.2	YH1.B.№54	10	100	鉄	灰流し	図15
27	端反碗Ｂ	A	7.2	11.4		4.4	YH1.AB.№1	5	100	鉄	灰流し、焼成過多、歪み大	図11
28	端反碗Ｂ	A	7.1	11.4		4.4	YH1.A.№29	5	70	鉄	灰流し、歪み大	図14
29	端反碗Ｂ	A	7.4	12.0		4.9	YH1.C.№42・44・45	10	100	鉄	灰流し	図13
30	端反碗Ｂ	A	7.2	11.4		4.4	YH1.C.№39	10	40	鉄	灰流し、歪み大	図12
31	水滴	Ｃか	2.2				YH1.A.№32	100		灰		図21
32	丸皿	B	2.5	12.4		6.8	YH2.E2.№41	20	50	長石	鉄絵	
33	丸皿	B	2.4	12.1		8.4	YH2.E2.№41	20	20	長石	鉄絵	
34	丸皿	B	2.4	12.4		6.9	YH2.E2.№23	25	25	長石	焼成不足	
35	中皿Ｂ	A	2.7	11.6		6.1	YH2.D3.№43	35	70	鉄	灰流し、焼成過多、歪みあり	
36	中皿Ｂ	A	3.0	12.9		6.8	YH2.D3.№32	80	90	鉄	灰流し	
37	中皿Ａ	A	4.0	12.9		6.8	YH2.D3.№43 32	60	95	長石	焼成やや不足	
38	蓋	C	1.9	4.5			YH1.C.№36	100	100	灰		図19
39	平向付	A	4.2	15.0		6.6	YH2.D3.№32	10	10	長石	焼成やや不足	
40	平向付	C	4.2				YH2.F1.№8			錆・長石		
41	小杯	A	5.5	9.2		5.2	YH1.A.№32・36	25	15	長石		図17
42	小杯	A	5.3	9.0		5.2	YH1.A.№42	25	70	長石		図18
43	徳利	—		5.2			YH1.C.№38	100	—	鉄		図20
44	擂鉢Ⅰ	—					YH1.C.№1	5	—	錆		図22
45	擂鉢Ⅱ	—		35.0			YH1.A.№32	15	—	鉄	摺目12本一組	図23
46	天目茶碗Ａ	B	7.8	12.3		4.4	YH1.№24	5	100	鉄		図24
47	天目茶碗Ａ	B	7.4	12.8		4.4	YH1.№2・4	5	100	鉄		図25
48	天目茶碗Ｂ	B	7.7	13.0		5.0	YH1.№2	25	100	鉄	灰流し	図26
49	天目茶碗Ｂ	B	7.7	12.2		4.7	YH1.№2・22	25	100	鉄	灰流し	図27
50	天目茶碗Ｂ	B	7.8	12.8		4.5	YH1.№7・30	5	100	鉄	灰流し、焼成不足	図28
51	天目茶碗Ｂ	B	7.6	12.6		4.5	YH1.№6	5	100	鉄	灰流し、焼成過多	図29
52	天目茶碗Ｂ	B	7.3	12.8		4.4	YH1.№29	5	20	鉄	灰流し	図30
53	天目茶碗Ｂ	B	7.1	12.8		4.4	YH1.№6	5	40	鉄	灰流し	図31
54	丸碗Ａ	A	8.3	12.4		4.7	YH1.№7	10	100	長石	鉄絵	図32
55	端反碗Ａ	B	7.2	11.4		5.0	YH1.№6	5	100	鉄	灰流し、歪みあり	図33
56	端反碗Ｂ	A	8.4	11.8		5.0	YH1.№30	10	100	鉄	灰流し、焼成不足	図34
57	端反碗Ｂ	A	7.7	11.4		4.7	YH1.№2	25	100	鉄	灰流し、歪みあり	図35
58	端反碗Ｂ	A	7.6	11.8		5.0	YH1.№6	40	100	鉄	灰流し、歪みあり	図36
59	端反碗Ｂ	A	7.7	12.2		5.0	YH1.№10	5	70	鉄	灰流し、焼成不足	図37
60	小杯	A	5.0	7.1		4.0	YH1.№2	10	10	不明	焼成不足	図38
61	小杯	A	6.2	8.3		4.4	YH1.№6	10	5	長石		図39
62	筒向付	A				6.5	YH1.№10	—	50	長石	鉄絵	図40
63	中皿Ｂ	Ａか	2.3	12.4		6.0	YH1.№2	5	25	鉄	灰流し	図41
64	中皿Ａ	A	3.2	13.6		6.6	YH1.№32	10	30	長石		図42

図	器種	高台※	法量（cm）				注記番号	口縁残存率％	高台残存率％	釉薬	備　考	1次報告書
			器高	口径	底径	高台径						
65	灯明皿	C	2.2	10.6	6.0		YH1.№6	10	100	無		図43
66	灯明皿	C	2.2	10.8	5.6		YH1.№6	20	100	無	内面に輪ドチ付着	図44
67	灯明皿	C	2.1	10.9	5.8		YH1.№28	20	20	無		図45
68	片口	—		13.6			YH1.№2	10	—	鉄	灰流し	図46
69	片口	B				8.4	YH1.№6	—	55	鉄		図47
70	擂鉢Ⅱ	—					YH1.№29	5	—	鉄		図48
71	擂鉢Ⅱ	—					YH1.№10・26	5	—	錆	摺目13本一組	図49
72	擂鉢Ⅱ	—					YH1.№2	5	—	鉄		図50
73	擂鉢Ⅱ	—					YH1.№16	5	—	鉄		図51
74	擂鉢Ⅱ	—					YH1.№29	5	—	錆	摺目13本一組	図52
75	匣鉢Ⅰ	D	11.0	15.0	14.0		YH2.F3.№25	55	55	無		
76	匣鉢Ⅰ	D	10.2	15.6	15.4		YH2.D4.№11	100	100	無	長石釉・鉄釉碗付着	
77	匣鉢Ⅰ	D	10.0	14.9	14.9		YH1.B.№48	100	100	無	鉄釉碗高台痕	図53
78	匣鉢Ⅰ	D	11.0	14.8	14.4		YH2.F3.№25	100	100	無		
79	匣鉢Ⅰ	D	11.4	15.5	14.4		YH1.A.№50	100	100	無	鉄釉碗付着	図62
80	匣鉢Ⅰ	D	10.0	15.3	15.0		YH1.B.№48	100	100	無	輪ドチ痕	図55
81	匣鉢Ⅰ	D	10.9	16.6	15.2		YH1.AB.№4	100	100	無	焼成後底部穿孔か	図56
82	匣鉢Ⅰ	D	10.3	8.0	8.0		YH2,D3.№35	100	100	無	端反碗溶着	
83	匣鉢Ⅰ	D	10.3	16.6	5.6		YH2.E2.№7	40	50	無		
84	匣鉢Ⅰ	D	10.6	15.2	15.3		YH1.B.№49?	100	100	無		図54
85	匣鉢Ⅰ	D	10.8	16.7	15.4		YH1.A.№48	100	100	無	輪ドチ・鉄釉付着	図57
86	匣鉢Ⅰ	D	10.6	16.8	15.8		YH2.F2.№7	55	60	無	鉄釉付着	
87	匣鉢Ⅰ	D	10.9	17.8	17.5		YH1.A.№48	100	100	無	輪ドチ・鉄釉付着	図58
88	匣鉢Ⅰ	D	10.9	15.8	15.6		YH2.D3.№37	100	100	無	ハリ付着	
89	匣鉢Ⅰ	D	10.3	16.6	16.0		YH2.D3.№30	100	100	無	ヨリ輪付着	
90	匣鉢Ⅰ	D	12.1	15.8	15.6		YH2.D3.№36	100	100	無	粘土板付着	
91	匣鉢Ⅰ	D	10.7	17.2	17.2		YH1.AB.№4	90	100	無		図60
92	匣鉢Ⅰ	D	10.9	16.1	16.4		YH1.AB.№9	100	100	無	鉄釉端反碗付着	図63
93	匣鉢Ⅰ	D	10.8	16.4	16.0		YH2.D3.№30	100	100	無	ヨリ輪痕、鉄釉碗口縁部付着	
94	匣鉢Ⅰ	D	10.6	15.0	15.0		YH2.D3.№36	100	100	無		
95	匣鉢Ⅰ	D	11.5	16.5	16.2		YH2.D3.№30	100	100	無		
96	匣鉢Ⅰ	D	12.2	18.2	18.0		YH1.A.№48	100	100	無		図65
97	匣鉢Ⅰ	D	13.9	18.0	17.0		YH1.AB.№11	15	25	無	灰釉製品付着	図66
98	匣鉢Ⅰ	D	10.2	17.6	18.5		YH1.A.№48	100	100	無		図64
99	匣鉢Ⅰ	D	10.0	16.0	15.4		YH1.AB.№11	100	100	無	体部穿孔、鉄釉丸碗Ｂ付着	図61
100	匣鉢Ⅱ	D	8.2	12.8	11.6		YH1.A.№43	25	55	無	体部穿孔２方か、輪ドチ・長石釉付着	図69
101	匣鉢Ⅱ	D	8.5	12.8	11.6		YH1.B.№44	75	100	無	体部穿孔２方	図68
102	匣鉢Ⅱ	D	11.7	19.6	18.6		YH2.D3.№35	100	100	無	体部穿孔２方	
103	匣鉢Ⅱ	D	11.9	19.8	18.7		YH1.BC.№1	100	100	無	体部穿孔２方	図70
104	匣鉢Ⅱ	D	12.2	19.4	19.2		YH2.D4.№10	100	100	無	体部穿孔２方	
105	匣鉢Ⅱ	D	12.0	19.8	19.2		YH2.D3.№29	100	100	無	体部穿孔２方	
106	匣鉢Ⅱ	D	12.6	9.8	9.4		YH2.D3.№30	100	100	無	体部穿孔２方	
107	匣鉢Ⅲ	C	5.3	16.8	12.8		YH1.A.№7	20	30	無	底部穿孔	図71
108	匣鉢Ⅲ	C	5.6	18.8	14.2		YH1.A.№6	35	35	無	底部穿孔	図72
109	匣鉢Ⅲ	C	6.2	19.6	14.0		YH1.B.№30	30	30	無	底部穿孔	図73
110	匣鉢Ⅳ	C	10.8	16.0	10.0		YH1.A.№45	65	70	無	三日月形、「千」の窯印	図74
111	匣鉢Ⅳ	C	11.8	17.8	11.7		YH1.A.№7	40	50	無	底部穿孔、正方形か、長石釉付着	図75
112	匣鉢Ⅳ	C	6.7	17.5×25	12×17		YH1.A.№50・52	70	80	無	長方形、体部穿孔２方	図67
113	匣鉢蓋Ⅰ	C	2.0	14.0	7.5		YH2.E1.№2	100	100	無	焼成過多	
114	匣鉢蓋Ⅰ	C	2.4	14.0	8.4		YH1.C.№2	70	100	無	耳付水注付着	図81
115	匣鉢蓋Ⅰ	C	2.8	13.0	8.4		YH2.D3.№47	85	100	無	製品溶着・剥離、輪ドチ・ヨリ輪溶着	
116	匣鉢蓋Ⅰ	C	2.3	12.8	9.2		YH1.C.№38	60	100	無	「⋀⋀」の窯印	図79
117	匣鉢蓋Ⅰ	C	2.6	14.0	8.7		YH1.A.№52	20	80	無	「⋀⋀」の窯印	図80
118	匣鉢蓋Ⅰ	C	2.4	14.8	8.8		YH2.D3.№36	95	100	無		
119	匣鉢蓋Ⅰ	C	2.5	13.6	9.6		YH2.D3.№47	95	100	無	内面に製品融着	
120	匣鉢蓋Ⅰ	C	1.9	14.0	8.0		YH2.D3.№47	90	100	無	歪みあり	
121	匣鉢蓋Ⅰ	C	2.95	14.7	8.3		YH2.D3.№47	85	100	無	体部内面に製品溶着	
122	匣鉢蓋Ⅰ	C	2.0	15.0	9.8		YH2.D3.№47	100	100	無	ヘラ刻か	
123	匣鉢蓋Ⅰ	C	2.3	15.7	10.2		YH2.D3.№47	60	100	無	歪み大	
124	匣鉢蓋Ⅰ	C	2.0	13.6	9.2		YH2.E1.№22	60	75	無	自然釉降灰	
125	匣鉢蓋Ⅰ	C	2.3	14.0	7.0		YH2.E2.№21	80	100	無		
126	匣鉢蓋Ⅰ	C	2.5	13.4	8.4		YH2.E2.№42	75	100	無	降灰、直径６cm 大の高台溶着	
127	匣鉢蓋Ⅰ	C	1.9	14.6	8.6		YH1.A.№25	90	100	無		図82
128	匣鉢蓋Ⅰ	C	2.4	14.8	7.8		YH1.A.№25	70	100	無		図83

図	器種	高台※	法量（cm）器高	口径	底径	高台径	注記番号	口縁残存率％	高台残存率％	釉薬	備　考	1次報告書
129	匣鉢蓋Ⅰ	C	2.45	14.4	8.6		YH2.E2.№42	90	100	無	上面に「ΛΛ」の窯印、輪ドチ付着	
130	匣鉢蓋Ⅰ	C	2.5	15.0	9.0		YH1.C.№38	35	50	無	上面に「千」の窯印	図77
131	匣鉢蓋Ⅰ	C	2.3	15.4	9.0		YH1.№29	30	30	無	上面に「千」の窯印	図76
132	匣鉢蓋Ⅰ	C	2.4	15.8	9.0		YH2.№2	50	50	無	上面に「千」の窯印	
133	匣鉢蓋Ⅰ	C	2.4	16.0	9.4		YH1.AB.№1	25	25	無	上面に「千」の窯印	図78
134	匣鉢蓋Ⅰ	C	3.1	22.4	13.0		YH2.E2.№37	5	50	無		
135	匣鉢蓋Ⅱ	—	1.5	18.25			YH2.E2.№42	75	75	無		
136	匣鉢蓋Ⅱ	—	1.6	18.3			YH2.E2.№37	50	50	無		
137	匣鉢蓋Ⅱ	—	1.35	15.9			YH2.E2.№33			無	上下面に静止糸切痕	
138	匣鉢蓋Ⅱ	—	1.3	19.8 × 15.5			YH2.E2.№33+37	100	100	無	上下面に静止糸切痕	
139	匣鉢蓋Ⅱ	—	1.8	8.9			YH2.E2.№37			無		
140	匣鉢蓋Ⅱ	—	1.4	15.5 × 9.05			YH2.E2.№42	90	90	無	上下面に静止糸切痕	
141	匣鉢蓋Ⅱ	—	1.7	11.7			YH1.BC.№1			無		図84
142	匣鉢蓋Ⅱ	—	1.4	21.3 × 9.3			YH2.D3.№35	100	100	無		
143	匣鉢蓋Ⅱ	—	1.4	21.5 × 8.9			YH2.E1.№13	100	100	無		
144	匣鉢蓋Ⅱ	—	1.4	21.7 × 9.25			YH2.D3.№35	100	100	無		
145	匣鉢蓋Ⅱ	—	1.5	23.0 × 10.6			YH2.D3.№41	100	100	無	長石釉付着	
146	匣鉢蓋Ⅱ	—	1.9	21.7 × 11.95			YH2.D3.№36	100	100	無		
147	板ドチ	—					YH1.C.№36			無		
148	輪ドチ	—					YH2.E2.№37			無		図85
149	輪ドチ	—					YH2.D3.№35			無		
150	輪ドチ	—					YH2.D3.№35			無		
151	輪ドチ	—					YH2.D3.№35			無		
152	焼台	—	7.2	7.6			YH1.№26			無	上面に「ΛΛ」の窯印	図87
153	焼台	—	6.7	8.7			YH1.C.№28			無	上面に「ΛΛ」の窯印	図88
154	焼台	—	7.0	9.3			YH1.A.№43			無	上面に「ΛΛ」の窯印	図89
155	焼台	—	4.6	8.3			YH2.D3.№36			無	上面に「ΛΛ」の窯印	
156	焼台	—	6.9	9.1			YH2.E2.№33			無	上面に「ΛΛ」の窯印	
157	焼台	—	5.0	8.0			YH2.D3.№37			無	上面に「ΛΛ」の窯印	
158	焼台	—	6.4	9.0			YH1.A.№45			無	上下面に「ΛΛ」の窯印	図93
159	焼台	—	4.8	7.2			YH1.C.№28			無	上下面に「ΛΛ」の窯印	図92
160	焼台	—	6.1	9.1			YH2.D3.№35			無	上面に「千」の窯印	
161	焼台	—	4.2				YH1.C №4			無	上下面に「千」の窯印	図91
162	焼台	—	5.0	8.3			YH2.E2.№42			無		
163	焼台	—	6.4	10.4			YH1.C №4			無		図90
164	トチンか	—	5.5	5.0	8.5		YH1.C №28			無		図86
165	ハリ	—					YH1.C №4			無		図94
166	ハリ	—					YH1.BC №4			無		図96
167	ハリ	—					YH1.BC №4			無		図97
168	ハリ	—					YH1.C №4			無		図99
169	ハリ	—					YH1.C №11			無		図95
170	ハリ	—					YH1.C №4			無		図98
171	板ドチ	—					YH2.D4.№10			無		
172	輪ドチ	—					YH2.D3.№41			無		
173	輪ドチ	—					YH2.D3.№41			無		
174	クレ	—	14.5	24.3 × 16.1			YH2.D2.№18			無		
175	クレ	—	10.7	20.4 × 12.9			YH2.D1.№15			無		
176	クレ	—	12.0	20.3 × 14.2			YH2.D1.№9			無	３面に板目状圧痕	
177	天井支柱	—					YH1.B			無	２面に板目状圧痕	図100
写真A	蓋	C	1.6	4.6			YH2.E2.№32	100	100	長石		
写真B	盤（向付）	B					YH2.E2.№13	45	50	灰	３枚付着、鉄絵、緑釉流し	
写真C	盤（向付）	—					YH2.D3.№41･32	20	—	長石	鉄釉・呉須釉流し	
写真C	中皿B	A	3.0			5.8	YH2.D3.№41	45	95	鉄	灰流し、歪みあり	
写真D	菊皿	C					YH2.E1.№	—	—	灰	匣鉢底部･輪ドチ付着	
写真E	筒向付	—					YH2.D2.№2	—	—	長石		
写真F	盤	C					YH2.E1.№5	—	—	長石	呉須絵、型づくりか	
写真G	型打皿	—					YH2.E1.№1	—	—	灰		
写真H	丸碗A	A				4.4	YH2.E1.№5	—	100	長石		
写真I	中皿A	A				6.6	YH2.E3.№32	—	80	長石		

※　A：付高台　B：削り出し高台　C：平底　D：丸底

第７章　小結

第１節　遺物について

第１・２次調査で出土した碗類を分類し、出土地点との関係を検討することにより、弥七田窯跡の操業期間を位置付ける。

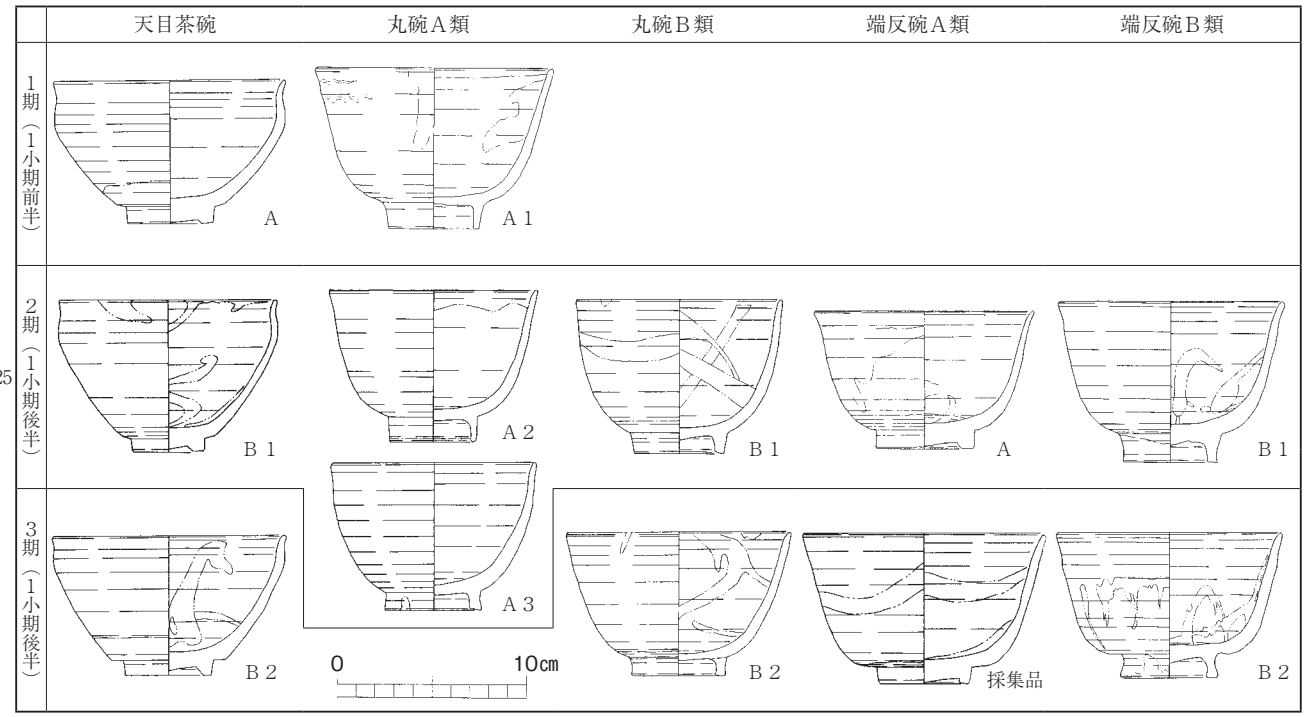
天目茶碗はいずれも削り出し高台で、鉄釉のみが施されたＡ類と、体部内外面に灰釉が流し掛けられたＢ類に分類される。Ｂ類は器高が高く高台内の削り込みが浅いＢ１類と、器高が低く高台内の削り込みが深いＢ２類に細分される。

丸碗にはいずれも付高台で、長石釉が施されたＡ類と、鉄釉に灰釉が流し掛けられたＢ類に分類され、Ａ類は高台の形状により、細長い長方形を呈するＡ１類、高台の内側が湾曲するＡ２類、高台幅が広く断面形が方形を呈するＡ３類に細分される。Ａ１・Ａ２類は全面施釉、Ａ３類は高台端部から底部内面にかけて露胎である。Ｂ類は高台幅が広く断面形が方形を呈する１類、高台内側中央が指ナデにより窪み撥形を呈する２類に細分される。

端反碗は削り出し高台のＡ類と付高台のＢ類に大別されるが、いずれも高台周辺を除き鉄釉、体部内外面に灰釉が流し掛けられる。Ａ類には出土した55以外に、高台が小さく端部が撫で調整されたものが採集されている。Ｂ類には丸碗Ｂ類と同様、高台幅が広く断面形が方形を呈する１類、高台内側中央が指ナデにより窪み撥形を呈する２類がある。

さて、弥七田窯では２基の連房式登窯が確認されており、１号窯を埋めて２号窯を構築していることから、１号窯の廃絶後に２号窯が操業していたことは明らかである。各調査区の位置からみて、１次調査のＡ区・Ｂ区や２次調査のＤ区の出土遺物は、１号窯の操業期間中のものを含んでいる可能性が高く、特にＤ区の出土遺物はやや焼成不足で完形品に近いことから１号窯の最終焼成時のものと考えられる。

第６表　弥七田窯跡出土の碗類編年表



同様に１次調査のＣ区や２次調査のＥ区は、２号窯の操業期間中のもので、１次調査の表採遺物には弥七田窯操業の全期間を含んでいる可能性が高い。

主要器種の型式学的特徴および出土状況から、弥七田窯における生産は次の３時期に変遷したと考えられる。１期は、１号窯の最終焼成時を除く操業期間にあたる。天目茶碗はＡ類、丸碗はＡ１類、端反碗はＡ類が焼成される。大窯以来の器種である擂鉢・片口などもこの時期のものであろう。２期は、１号窯の最終焼成時にあたる。天目茶碗はＢ１類、丸碗はＡ２・Ａ３・Ｂ１類、端反碗はＢ１類、その他に中皿Ａ・Ｂ類が焼成される。なお鼠志野向付や弥七田織部製品はこの時期まで焼成されていた可能性が高く、弥七田織部の透明釉は長石釉系のものである。３期は、２号窯の操業期間にあたる。天目茶碗はＢ２類、丸碗はＢ２類、端反碗はＢ２類、その他に鉄絵のある丸皿などが焼成される。御深井製品が確実に出現し、弥七田織部の透明釉は光沢の強い灰釉系のものに変化したようである。

これを連房式登窯導入期における天目茶碗編年表（第９表）と比較すると、１期の天目茶碗Ａ類は登窯第１小期前半、２期のＢ１類および３期のＢ２類は同じく第１小期後半にあたり、弥七田窯の暦年代は慶長期後半から寛永期前半頃に位置付けられる。（藤澤良祐）

第７表　第１・２次調査出土遺物個体数

大分類	中分類	小分類	Ａ区	Ｂ区	Ｃ区	Ｄ区	Ｅ区	Ｆ区	小計		表採	合計	
碗類	天目茶碗	Ａ類	1	1	0	0	1	0	3	34	7	10	93
		Ｂ類	6	3	7	4	2	8	30		43	73	
		小天目	0	0	0	0	1	0	1		0	1	
		不明	0	0	0	0	0	0	0		9	9	
	丸碗	Ａ類	0	1	6	10	4	1	22	44	33	55	130
		Ｂ類	6	2	11	1	2	0	22		53	75	
		不明※	3	1	4	7	1	4	20	20	34	54	54
	端反碗	Ａ類	5	2	2	1	0	0	10	56	12	22	124
		Ｂ類	13	8	12	5	1	7	46		56	102	
	長石釉小杯		4	0	1	0	1	0	6	6	15	21	21
	小計		38	18	43	28	13	20	160		262	422	
皿・向付類	中皿	Ａ類	1	0	0	2	2	0	5	10	6	11	17
	中皿	Ｂ類	0	0	0	4	1	0	5		1	6	
	丸皿		0	0	0	0	3	0	3	3	0	3	3
	御深井菊皿		0	0	0	1	0	0	1	11	0	1	12
	御深井向付類		0	0	0	0	4	0	4		0	4	
	織部向付類		0	0	1	0	4	0	5		1	6	
	鼠志野向付		0	0	0	0	0	1	1		0	1	
	小計		1	0	1	7	14	1	24		8	32	
調理鉢	鉄釉擂鉢		0	1	0	0	0	0	1	1	0	1	1
	鉄釉片口		0	0	0	0	0	0	0	0	3	3	3
	小計		0	1	0	0	0	0	1		3	4	
その他	鉄釉徳利		0	0	0	0	0	0	0	8	1	1	1
	鉄釉耳付水注		2	1	1	0	0	0	4		5	9	9
	灰釉水注蓋		0	0	1	0	1	0	2		0	2	2
	灰釉水滴		1	0	0	0	0	0	1		0	1	1
	無釉灯明皿		0	0	0	0	0	0	0		3	3	3
	茶入		0	0	0	0	1	0	1		0	1	1
	小計		3	1	2	0	2	0	8		9	17	
合計			42	20	46	35	29	21	193		282	475	

第２節　遺構について

弥七田窯跡では２基の連房式登窯が上下に重なって確認され、下層の窯を１号窯、上層の窯を２号窯とした。１号窯は、推定長約20.6ｍで、焚口・煙道部は未検出であるが、燃焼室を含めて焼成室が10室以上あることが確認された。焼成室は、Ｄ区の調査から幅約2.95ｍ、奥行は約1.7ｍ、床面傾斜は約20°である。なお、一部の焼成室は２号窯が重なっているため、確認できなかった。部屋と部屋の境に

は天井支柱が６～７本建ち、狭間・隔壁がみられない。天井支柱は丸形や角形、三日月形の匣鉢に粘土を充填したものを積み重ねてその周りを粘土で塗り固めて構築している。また、第１次調査で設定したトレンチは窯の軸からずれており、やや東側に窯体の軸がふれることが確認された。Ａ区では左側壁が確認され、焼成室に対し直線的に構築されている。Ｂ区では天井支柱が高さ約80cmまで残存しており、少なくとも天井はそれ以上の高さをもっていたことが分かる。Ｄ区では両側壁が焼成室に対してやや内傾して構築され、両側壁の裏側では覆屋の柱穴が確認された。また、Ｄ区では製品の出し入れ口が左側に、Ａ区では右側に確認されたことから、各焼成室の左右いずれかに設けられていたと思われる。Ｅ区では燃焼室の一部と思われる床面、Ｆ区では右側壁とその外側には窯体と平行に設けられていたと考えられる排水溝が検出された。

２号窯は１号窯の上に重なるように造られており、上部は既に削平され消滅していたため、焚口・燃焼室・煙道部は不明である。残存長は約8.5ｍで、床面は少なくとも１回貼り直され、２面確認される。焼成室はＣ２区・Ｅ区の調査から２号窯２次面で幅約2.0ｍ前後、奥行は約1.2ｍ以上、床面傾斜は約15～25°である。１号窯とは異なり狭間柱が焼成室の境に建つが、隔壁は検出されなかった。２号窯に伴う両側壁は、窯道具や不良の製品を構築材として使用している。検出された側壁の状況から、焼成室に対して直線的に構築されるが、２号窯２次面については狭間柱が左側壁の一部として検出されていることから、窯体を改修する際に左側壁を縮小して構築していることが明らかとなった。

連房式登窯導入期の窯体構造は、定林寺窯のように上部まで隔壁がみられないものもあるが、いずれも狭間構造をもっており、全て狭間柱と狭間柱が連結し隔壁をもって狭間孔を構築している。狭間構造には有段横狭間・無段斜狭間・有段斜狭間・有段縦狭間がみられ、狭間上部の隔壁によって部屋と部屋が区切られている（森2017）。しかし、弥七田１号窯でみられる柱は、隣接する柱とつながれることなく独立して築かれ、隔壁をもっていないため、狭間構造をもたない窯体構造であることが確認される。

弥七田窯の構築順序に関しては１号窯の上層に２号窯が構築されていることから、１号窯が古く２号窯が新しいことが明白である。１号窯の床面は、支柱の構築部分のみを水平にし焼成室はほぼ同じ角度で直線的に構築されており、２号窯では支柱は焼成室の後方に構築され、支柱後方に段差が造られている。狭間構造をもたない弥七田１号窯であるが、この構造から１号窯は、窯体構造の変遷（森2017）のＢ類あるいはＥ類に、２号窯はＣ類と似た床面構造をとることが指摘される。Ｂ類は定林寺地区でのみみられ、Ｃ類はＢ類から変遷することが述べられているが、弥七田窯も同様に変遷するといえるであろう。Ｂ類・Ｃ類はいずれも登窯第１小期の範疇に含まれており、遺物の年代観と矛盾しない。

連房式登窯導入期には様々な形状の窯体構造がみられるが、共通して狭間柱の上部に隔壁をもつため、隔壁のみられない弥七田窯は狭間構造をもつとはいえず、他の窯と比べ特殊な窯といえよう。しかし、焚口や煙道部は検出されておらず、窯体周辺の工房跡なども確認されていないため、不明な点が多く残っている。

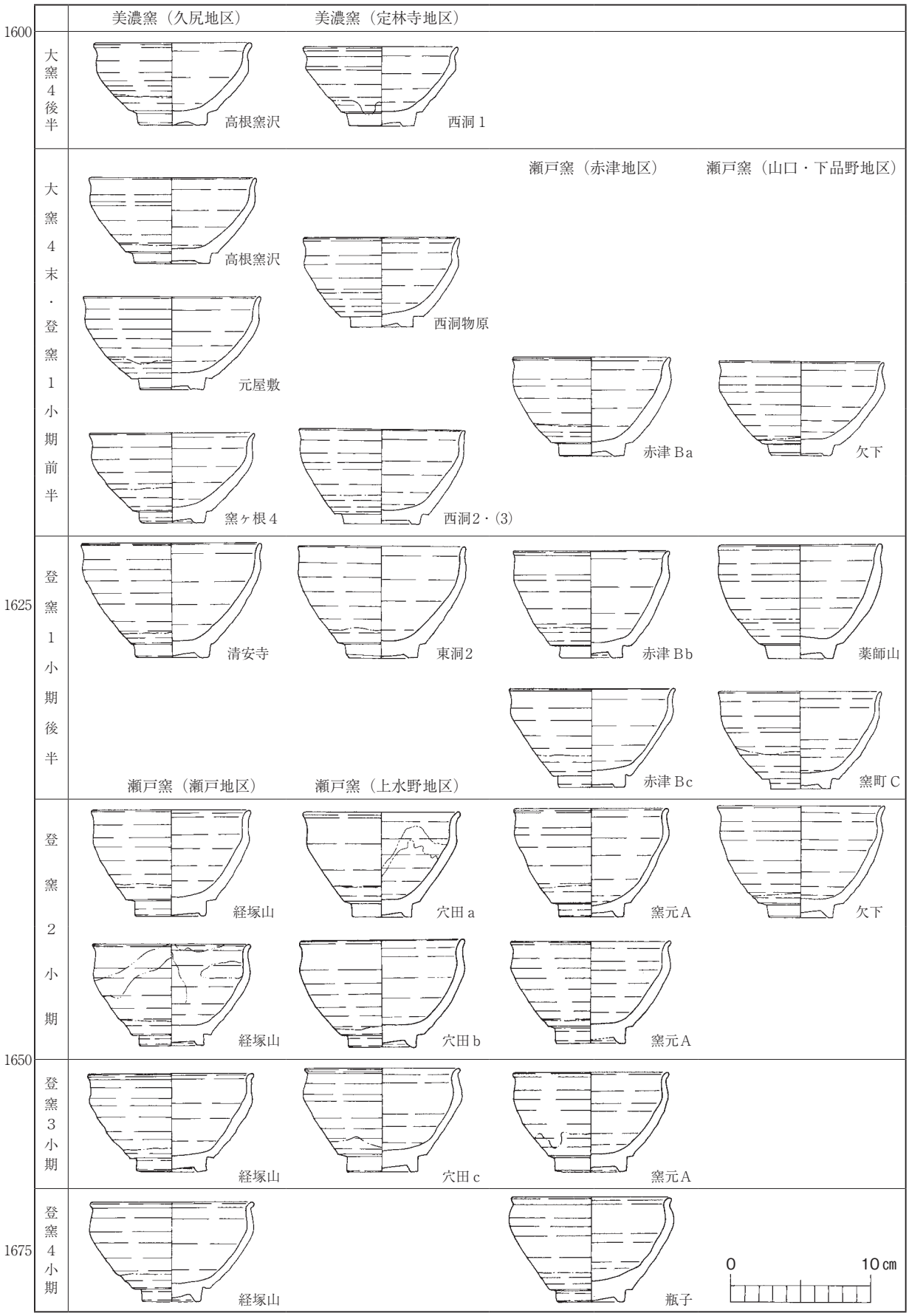
（伊藤真央）

第８表　窯印器種別集計表

窯　印	器　種	Ａ区	Ｂ区	Ｃ区	Ｄ区	Ｅ区	Ｆ区	小計	表採	合計
「千」	匣鉢 ※1	1	1	1				3	2	5
	匣鉢蓋	1		1				2	2	4
	焼台			2	1	4	1	8		8
「ᗰ」	匣鉢							0		0
	匣鉢蓋			1				1		1
	焼台	5	4	8	6	11		34	1	35
不明	匣鉢 ※2				1			1		1
	焼台		1	2	1			4		4
計		7	6	15	9	15	1	53	5	58

※1：三日月形の匣鉢　※2：大形の匣鉢

第９表　連房式登窯導入期における天目茶碗編年表（藤澤2017より転載）



引用・参考文献

加藤唐九郎1933『黄瀬戸』寶雲舎

高木康一1936「美濃に於ける黄瀬戸、志野、織部」『陶磁』第８巻第２号　東洋陶磁研究会

加藤土師萌1953「織部」『陶説』日本陶磁教会

荒川豊蔵1959『志野』陶磁全集第４巻　平凡社

一瀬武1966『美濃焼の歴史』郷土文化研究会

奥磯栄麓1971『美濃焼』光琳社

楢崎彰一・井上喜久男1976『美濃古窯跡群』㈶観光資源保護財団

楢崎彰一1976「美濃の古陶のながれ」『美濃の古陶』光琳社

今井静雄1976「中世の施釉陶器」『美濃の古陶』光琳社

奥磯栄麓1976「可児地区」『美濃の古陶』光琳社

楢崎彰一1983「瀬戸・美濃近世編年表（連房式登窯期）」『江戸のシンポジウム』五島美術館

藤澤良祐1986「瀬戸大窯発掘調査報告」『研究紀要　Ⅴ』瀬戸市歴史民俗資料館

井上喜久男1988「美濃窯の研究（一）―十五～十六世紀の陶器生産―」『東洋陶磁』第15・16号　東洋陶磁研究会

斎藤基生1989『研究紀要１　牟田洞窯』㈶荒川豊蔵資料館

楢崎彰一1990「第６章　総括」『尾呂』瀬戸市教育委員会

田口昭二1993「第９章　江戸時代・明治時代前半代の美濃窯編年と製造品種」『美濃窯の焼物』

藤澤良祐2002「瀬戸美濃大窯編年の再検討」『研究紀要　第10輯』㈶瀬戸市埋蔵文化財センター

可児市2005『可児市史　第一巻　通史編　考古・文化財』

高橋健太郎他2006『窯ヶ根窯跡発掘調査報告書』岐阜県土岐市教育委員会

可児市2007『可児市史　第四巻　自然編・民俗編』

亀谷泰隆2013「弥七田織部・弥七田窯概説」『弥七田織部展図録』可児郷土歴史館

春日美海2015「昭和前半期の元屋敷窯発掘史―高木康一と小川栄一、文化財保護の視点から―」『元屋敷窯発掘史―美濃桃山陶の再発見と古窯跡発掘ブームの中で―』土岐市美濃陶磁歴史館

愛知学院大学文学部歴史学科2016『大萱窯跡群牟田洞窯跡第１・２発掘調査概要報告書』

愛知学院大学文学部歴史学科2017『大萱窯跡群弥七田窯跡第１次発掘調査概要報告書』

藤澤良祐2017「連房式登窯導入期における天目茶碗について」『大萱窯跡群弥七田窯跡第１次発掘調査概要報告書』愛知学院大学文学部歴史学科2017

森まどか2017「連房式登窯導入期における窯体構造について」『大萱窯跡群弥七田窯跡第１次発掘調査概要報告書』愛知学院大学文学部歴史学科2017

後論　大萱窯跡群の変遷と生産構造

藤澤良祐・森まどか

はじめに

大萱窯跡群（美濃窯大萱支群）は土岐川以北の地域の旧可児郡側に立地する。美濃窯では最も北に位置し、大窯である牟田洞窯・大萱窯下窯・向林窯・若林窯・岩ヶ根窯、連房式登窯である弥七田窯の６窯跡（小群）構成されるといわれ、向林窯・若林窯では大窯第４段階の遺物が採集されているが窯体の所在は未確認で、岩ヶ根窯に至っては遺物や窯体等についての情報は一切ない。

平成25年以降の可児市教育委員会を主体とする発掘調査によって、牟田洞窯では１～３号窯の３基、大萱窯下窯では１・２号窯の２基の大窯、弥七田窯では１・２号窯の２基の連房式登窯の存在が確認されている。牟田洞窯では１号窯は第３段階後半から第４段階前半、３号窯は第４段階前半から第４段階後半に位置付けられ、立地状況等から１号窯⇒２号窯⇒３号窯の順に、大萱窯下窯では１号窯は第４段階前半が主体で第４段階後半まで、２号窯は第４段階後半に位置付けられ、１号窯⇒２号窯の順に構築されたという（長江2016）。弥七田窯では下層の窯を１号窯、上層の窯を２号窯としたため、層位的に１号窯⇒２号窯の順に構築され、１号窯は登窯第１小期前半、２号窯は第１小期後半に概ね位置付けられる（愛知学院大学2018）。

以上のように、牟田洞窯と窯下窯は概ね大窯第３段階後半から第４段階後半、弥七田窯は登窯第１小期に位置付けられ、牟田洞・窯下窯から弥七田窯への移動についても指摘されているが（長江2016）、操業期間がほぼ併行する牟田洞窯と窯下窯とは如何なる関係にあったのであろうか。さらに同じ土岐川以北地域の久尻窯跡群・定林寺窯跡群など旧土岐郡側とは如何なる関係にあったのであろうか。本稿では、当該期の瀬戸・美濃窯にみられる窯体構造や窯印について検討を加えることによって、大萱窯跡群における窯業生産の特質を明らかにしたい。

１．大萱窯跡群の天目茶碗

天目茶碗は、古瀬戸中期様式において出現して以来、古瀬戸編年や瀬戸美濃大窯編年における基準資料の一つであるとともに、近世瀬戸・美濃窯においても一定量生産されている編年研究上重要な器種の一つである。大窯段階の天目茶碗には付高台のものは存在せず、全て削り出し高台で、一般的に口唇部が玉縁状あるいはＳ字状になり、輪高台のＤ類、内反り高台のＥ類に大別される。それらとは別に、大形で口唇部が直立するものがあり、これについてはＦ類とした。また登窯段階の天目茶碗は、削り出し輪高台で高台周辺が露胎のＧ類と、内反り高台で高台周辺に錆釉が施されたＨ類に大別され、Ｇ類のうち体部下方に段を有する「段付き天目」をＧ′類とした（藤澤1999）。連房式登窯導入期（登窯第１小期）までの天目茶碗は、瀬戸・美濃窯に共通して存在し細かい編年が可能であるため、ここでは天目茶碗を取り上げることによって大萱窯跡群（大萱地区）の３窯の操業期間について検討を加えたい。

（１）牟田洞窯・大萱窯下窯の天目茶碗（図１）

牟田洞窯の天目茶碗は、Ｄ類（１～７）、Ｅ類（８・９）、Ｆ類（10～13）に大別される。主体となるＤ類のうち、１～６が大窯第４段階前半、長石釉の７が第４段階後半、Ｅ類では８が第４段階前半、９が第４段階後半、Ｆ類では全形は不明であるが10が第３段階後半、11～13が第4段階前半に位置付けられる。したがって、牟田洞窯の天目茶碗は第３段階後半のものは少なく、第４段階前半が最も多く第４

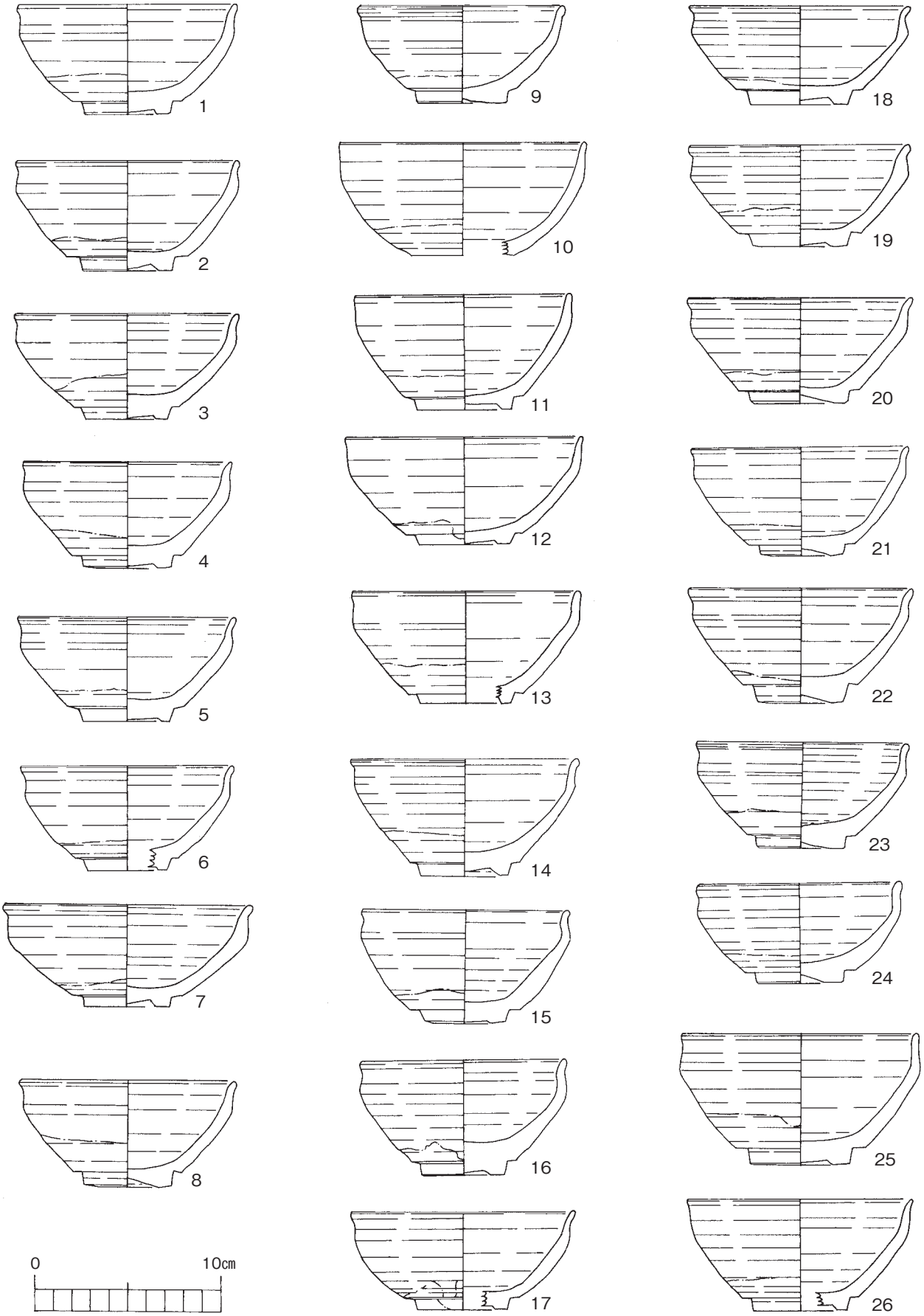


図１　牟田洞窯・大萱窯下窯の天目茶碗

表１　牟田洞窯・窯下窯天目茶碗計測表

図	窯名	出土地点	類型	釉薬	法量（㎝）			径高指数×100	口縁残存率%	高台残存率%	時期	報告書※
					器高	口径	高台径					
1-1	牟田洞	３グリッド	Ｄ類	鉄釉	5.8	11.5	4.5	50	50	100	大窯４前半	第18図１
2	牟田洞	１グリッド	Ｄ類	鉄釉	5.9	11.7	4.7	50	65	100	大窯４前半	第11図５
3	牟田洞	６トレンチ	Ｄ類	鉄釉	5.6	11.8	4.4	47	20	80	大窯４前半	第７図３
4	牟田洞	６トレンチ	Ｄ類	鉄釉	5.6	11.0	4.7	51	100	100	大窯４前半	第７図２
5	牟田洞	１グリッド	Ｄ類	鉄釉	5.5	11.4	4.6	48	10	50	大窯４前半	第11図３
6	牟田洞	６トレンチ	Ｄ類	鉄釉	5.5	11.2	4.2	49	15	30	大窯４前半	第７図１
7	牟田洞	１グリッド	Ｄ類	長石釉	5.4	13.0	4.6	42		100	大窯４後半	第11図８
8	牟田洞	６トレンチ	Ｅ類	鉄釉	5.7	11.4	4.7	50	45	70	大窯４前半	第７図４
9	牟田洞	２グリッド	Ｅ類	鉄釉	5.2	10.7	4.8	49	15	50	大窯４後半	第16図１
10	牟田洞	６トレンチ	Ｆ類	鉄釉		13.0			50	0	大窯３後半	第７図５
11	牟田洞	１グリッド	Ｆ類	鉄釉	6.1	11.2	5.0	54	20	40	大窯４前半	第11図６
12	牟田洞	１グリッド	Ｆ類	鉄釉	5.7	12.4	4.8	46	5	50	大窯４前半	第11図４
13	牟田洞	１グリッド	Ｆ類	鉄釉	5.9	12.0	4.8	49	20	40	大窯４前半	第11図７
14	大萱窯下	１トレンチ	Ｄ類	鉄釉	6.2	12.0	4.6	52	90	100	大窯４前半	図114の20
15	大萱窯下	採集	Ｄ類	鉄釉	6.0	10.8	4.3	56	55	100	大窯４後半	
16	大萱窯下	採集	Ｄ類	鉄釉	6.1	10.8	4.4	56	25	100	大窯４後半	
17	大萱窯下	１トレンチ	Ｄ類	鉄釉	5.2	10.8	4.8	48	5	45	大窯４後半	図114の８
18	大萱窯下	１トレンチ	Ｄ類	鉄釉	5.2	11.6	5.2	45	5	100	大窯４後半	図114の12
19	大萱窯下	２トレンチ	Ｄ類	鉄釉	5.4	11.6	5.0	47	50	100	大窯４後半	図97の１
20	大萱窯下	採集	Ｅ類	鉄釉	5.6	10.8	4.8	52	50	100	大窯３後半	
21	大萱窯下	１トレンチ	Ｅ類	鉄釉	5.7	11.4	4.4	50	10	100	大窯３後半	図114の17
22	大萱窯下	採集	Ｅ類	鉄釉	6.1	11.7	4.6	52			大窯４前半	
23	大萱窯下	１トレンチ	Ｅ類	鉄釉	5.6	11.0	4.7	51	20	100	大窯４後半	図114の6
24	大萱窯下	採集	Ｅ類	鉄釉	5.3	10.6	4.6	50	30	100	大窯４後半	
25	大萱窯下	採集	Ｆ類	鉄釉	6.9	12.4	5.3	57	15	100	大窯４末	
26	大萱窯下	採集	Ｇ類	長石釉	6.0	11.8	5.0	51	15	30	大窯４末	図124の78

※牟田洞窯の天目茶碗は愛知学院大学2016より転載、大萱窯下窯のものは長江2016に対応し、空欄は多治見工業高校採集品。

段階後半まで存在する。なお、このことは、小皿類のうち内禿皿が極めて少なく折縁皿が多いということと軌を一にする（愛知学院大学2016）。

大萱窯下窯の天目茶碗は、Ｄ類（14～19）、Ｅ類（20～24）、Ｆ類（25）、Ｇ類（26）に大別される。Ｄ類では14が第４段階前半、15～19までが第４段階後半、Ｅ類では20・21が第３段階後半、22が第４段階前半、23・24が第４段階後半、25・26が第４段階末に位置付けられる。なお17にのみ高台周辺に薄い錆釉が施され、26には高台周辺を除き長石釉が施される。窯下窯ではＥ類に大窯第３段階後半が確実に存在するが、牟田洞窯では主体となった第４段階前半の天目茶碗は少ない。第４段階後半でも17～19・23・24は、牟田洞窯と比べると器高が低く、口径が狭く器壁が厚い傾向にあり、第４段階末のものが確実に存在する。なお26は、久尻地区の高根窯沢窯や元屋敷窯、定林寺地区の西洞窯物原のものに酷似しており、登窯第1小期前半の古い時期に位置付けることができる（藤澤2017）。

以上のことから、大萱地区では第３段階後半に窯下窯で生産が開始されるが、牟田洞窯はやや遅れ第４段階前半に近い時期に成立したと思われる。両窯は第４段階後半にかけて併行して操業されるが、牟田洞窯ではこの時期に廃絶するのに対して、窯下窯では第４段階末（登窯第１小期前半の古い時期）まで継続したと思われる。このような傾向は、擂鉢Ｉ類においても同様で、牟田洞窯では各調査区とも第４段階前半が主体となる。それに対して、窯下窯では２号窯の焼成室上方に入れられた７トレンチから第３段階後半のものがまとまって出土しており、物原に入れられた１トレンチでは第４段階後半が主体で第４段階末までのものが認められる（長江2016）。

（２）弥七田窯の天目茶碗

弥七田窯の天目茶碗は全てＧ類で、登窯第２小期に出現するＧ′類とＨ類は確認されていない。Ａ類・Ｂ１類・Ｂ２類の３型式に細分され、後二者（Ｂ類）は灰釉の流し掛けを特徴とする。連房式登窯導入期の編年観では、Ａ類が窯ヶ根４号窯に併行する登窯第１小期前半でも新しい時期、Ｂ１類が清安寺窯に併行する登窯第１小期後半の古い時期、Ｂ２類が赤津Ｂ窯ｃ類や窯町Ｃ窯に併行する登窯第１小期後半の新しい時期に位置付けられよう（藤澤2017）。なお、天目茶碗等の型式により弥七田窯の操業期間は３時期に区分され、天目茶碗Ａ類が生産された弥七田窯第１期は１号窯の主要操業時期、Ｂ１類が生産された第２期は１号窯の最終焼成時を前後する時期、Ｂ２類が生産された第３期は２号窯の操業時期にあたる（愛知学院大学2018）。

以上、天目茶碗から大萱地区の変遷をみると、大窯第３段階後半（16世紀第４四半期）に大萱窯下窯で生産が開始され、引き続き第４段階前半（16世紀末）頃に牟田洞窯が開窯し、第４段階後半（17世紀初）にかけて両窯の生産はピークに達する。この時期に牟田洞窯は廃絶するが窯下窯は第４段階末にかけて操業した。そして、元屋敷窯の成立から若干遅れるものの、窯下窯から連続して登窯第１小期前半（17世紀第１四半期）の新しい時期に弥七田１号窯が開窯し、第１小期後半（17世紀第２四半期）にかけて２号窯が操業したものと思われる。（藤澤良祐）

２．大萱窯跡群の窯体構造

（１）瀬戸美濃大窯の変遷―研究抄史―

ここでは牟田洞窯・大萱窯下窯にみられる大窯の窯体構造について検討を行う。瀬戸美濃大窯の窯体構造の変遷に関しては伊藤嘉章氏の研究がある。伊藤氏は大窯による生産段階を前期と後期に分け、さらにそれぞれがⅠ期とⅡ期に細分される編年観を示し[1)]（伊藤1988）、この編年観を基に各期に代表的な窯の構造を取り上げて、前Ⅰ期は瀬戸窯の小金山窯、前Ⅱ期は妙土窯、後Ⅰ期は定林寺東洞１号窯、後Ⅱ期は高根窯沢窯とし、窯体構造がどのように変遷しているか検討した。その結果、前Ⅰ期には既に大窯としての基本的な構造はほぼ整っているが、焼成室の下方以下まで地下に掘り込まれた構造で、焼成室のプランは古瀬戸後期の山口八幡２号窯と大差はなく、小分炎柱も片側３本で床面傾斜は窖窯に比べて急になっており、前Ⅱ期になると小分炎柱と昇炎壁により炎の安定供給が可能となり、小分炎柱を増やして焼成室の最大幅を拡大し、大窯の特徴的な平面形がこの段階で完成されるという。また後Ⅰ期には前Ⅱ期の段階にみられた焼成室の拡大傾向が更に顕著で小分炎柱も片側９本と最多となり、焚口の幅も最大となって大窯として最大の規模となるが、後Ⅱ期になると拡大傾向が一転し、全長・焼成室最大幅・小分炎柱の本数といった全ての点で縮小する。そして、後Ⅰ期にみられる急激な拡大傾向はそれまでの大きさの変化とは比べものにならないほど顕著な変化で、その後の後Ⅱ期には再び前Ⅱ期と同等規模に縮小していると述べている[2)]（伊藤1989）。すなわち、大窯の窯体は時代が下るにつれて窯の規模が拡大し、その後また小形化することが指摘されている。

（２）大窯後半期における窯体構造の分類と変遷

牟田洞窯・窯下窯は概ね第３段階後半から第４段階末に比定されているが、現在までに土岐川以北の窯で操業期間が第３段階後半以降で窯体の規模が判明している大窯には、元屋敷東１～３号窯・隠居西窯・隠居表１号窯・高根窯沢窯・尼ヶ根２号窯・定林寺西洞１号窯・東洞１号窯がある。加藤真司氏は元屋敷東窯跡において、２号窯では分炎柱が昇炎壁手前に立てられているのに対して、３号窯では分炎

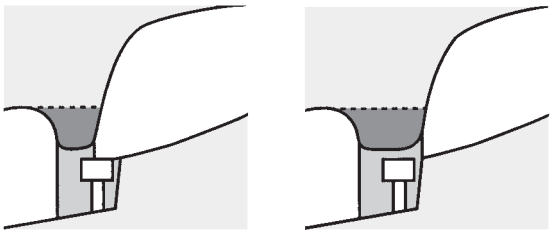


図２　大窯窯体構造分類図

柱は密着して立てられ、前者は妙土窯・尼ヶ根２号窯・昔田窯・王子沢窯・小金山窯でもみられ第４段階前半までに、後者は隠居西窯・高根窯沢窯・隠居表１号窯・赤津Ｂ窯でもみられ第４段階前半以降に比定される大窯であることを指摘している（加藤2002）。

加藤氏の指摘から、土岐川以北に位置する第３段階後半以降の大窯は、分炎柱の位置から分炎柱が昇炎壁に密着しているＡ類と、分炎柱が昇炎壁から離れているＢ類に大別される（図２）。Ａ類は全長７ｍ前後、火炎室の幅が約3.5～4.0ｍ、小分炎柱が片側７～10本で、元屋敷東１号Ａ窯・元屋敷東２号窯・尼ヶ根２号窯が該当する。Ｂ類は火炎室の幅と小分炎柱の数により分類が可能で、概ね3.5ｍ以上のものは小分炎柱が片側７本から10本、概ね3.5ｍ未満のものは小分炎柱が片側６本以下となる（表２）。よってＢ類はＢ１類とＢ２類に細分でき、Ｂ１類は全長７ｍ前後、最大幅約3.5～4.0ｍ、小分炎柱が片側７～10本で隠居表１号窯（改修前）・定林寺東洞１号窯・定林寺西洞１号窯が、Ｂ２類は全長６ｍ前後、最大幅約3.0～3.5ｍ、小分炎柱が片側６本以下で元屋敷東１号Ｂ窯・元屋敷東１号Ｃ窯・元屋敷東３号窯・隠居西窯・高根窯沢窯が該当する。

次に出土遺物の様相からこれらの大窯には次の年代観が与えられている。若干の幅をもつものの、元屋敷東１号Ａ窯・元屋敷東２号窯・尼ヶ根２号窯は第３段階後半、隠居表１号窯・定林寺東洞１号窯・元屋敷東１号Ｂ窯は第４段階前半、定林寺西洞１号窯・元屋敷東１号Ｃ窯・元屋敷東３号窯・隠居西窯は第４段階後半、高根窯沢窯は第４段階末が操業の主体である。こうした年代観から、Ａ類は大窯第３段階後半、Ｂ１類は第３段階後半を若干含むものの第４段階前半、Ｂ２類は第４段階前半を若干含むものの第４段階後半から末に概ね該当するといえよう。したがって、Ａ類・Ｂ１類・Ｂ２類は時期差であり、概ね第４段階後半から末ごろに窯の規模が小形化する傾向が認められるのである[3)]。

（３）牟田洞窯・大萱窯下窯の窯体構造

では牟田洞窯・窯下窯を窯体構造から考察した場合、どこに位置付けられるであろうか。牟田洞窯では大窯が３基確認されているが、規模が推定できるのは１号窯と３号窯である。１号窯は火炎室と燃焼室下方が調査によって確認されており、全長推定6.7ｍ、最大幅推定3.3ｍ、火炎室の幅が3.1ｍで、分

表２　瀬戸美濃大窯窯体計測表

	全長（残存長）	最大幅	小分炎柱	火炎室の幅	傾斜	第１支柱までの距離	出入口	時期	分類
元屋敷東１号Ａ窯	未調査	3.95	痕跡有	3.9	不明	不明	右	３後	Ａ
元屋敷東２号窯	7.53	3.9	10	3.85	20°	1.25	不明	３後～４前	Ａ
尼ヶ根２号窯	7.02	3.48	８か	3.5	23°	1.35	右	３後	Ａ
隠居表１号窯（改修前）	不明	3.8	７か	不明	不明	1.4	右	３後～４後	Ｂ１
定林寺東洞１号窯	4.1以上	4.25	9	4.0	22°	1.1	不明	３後～４前	Ｂ１
定林寺西洞１号窯	4.15以上	4.1以上	8	3.5	16°	1.6	不明	４前～後	Ｂ１
元屋敷東１号Ｂ窯	未調査	3.36	不明	3.1	不明	1.7か	右	４前	Ｂ２
元屋敷東１号Ｃ窯	未調査	3.06	不明	不明	27.5°	1.7か	右	４後	Ｂ２
元屋敷東３号窯	5.77	2.83	痕跡無	2.75	22.5°	1.75	不明	４後	Ｂ２
隠居西窯	6.35	2.97	6	2.9	23°	0.55か1.2	右	４後～末	Ｂ２
高根窯沢窯	6.2	3.3	４か	3.0	23°	1.05	右か	４末	Ｂ２
牟田洞１号窯	(6.7)	3.3	不明	3.1	不明	不明	右	３後～４前	Ｂ２
牟田洞３号窯	(5.2)	3.5	不明	不明	不明	不明	左	４前～後	－
大萱窯下１号窯	(7.0)	(2.8)	不明	不明	不明	不明	右	４前～後	Ｂ２
大萱窯下２号窯	(7.0)	3.4	(６?)	不明	不明	不明	右	３後～４後	Ｂ２

※牟田洞窯と大萱窯下窯の全長は現地形からの推定値

炎柱は昇炎壁に密着している。小分炎柱の痕跡は確認されていない。１号窯は火炎室の規模や分炎柱の位置からＢ２類に比定される。３号窯は窯体の調査は行われていないため数値は全て地表面からの推定であるが、全長推定5.2ｍ、最大幅推定3.5ｍ、分炎柱の位置や小分炎柱の数、火炎室の幅は不明である。そのためＡ類かＢ類のどちらに大別されるか、またＢ類であった場合は１類か２類かが判別できない。

大萱窯下窯では１号窯と２号窯の２基の大窯が確認されている。１号窯は全長推定7.0ｍ、最大幅推定2.8ｍで、牟田洞３号窯と同じく分炎柱や小分炎柱の状況、火炎室の幅などは不明である。１号窯はその幅が2.8ｍと狭いことから、小形化した後の窯体と推測するとＢ２類に比定できよう。また２号窯では火炎室や焚口付近と煙道部に調査区を設定しており、全長推定7.0ｍ、最大幅3.4ｍで、２号窯もまた分炎柱や小分炎柱、火炎室の幅は不明である。なお、２号窯は1932年に加藤唐九郎氏が調査を行った窯であり、その記載には小分炎柱が12本あったことが記されている（加藤1933）。この12本が設置痕も含めたものなのか、残存本数であるのかは不明であるが、仮に２号窯の小分炎柱は片側６本であった場合、最大幅の規模と合わせてＢ２類に相当すると考えられる。よって、牟田洞１号窯・大萱窯下１号窯および２号窯はＢ２類に比定されるものであるが、推定全長が正しいとすると、同時期のものに比べ、やや大きめの窯体構造であったといえる。しかしながら、大萱窯跡群の大窯は土岐川以北の他の窯と比較しても、その変遷や構造に差違はみられないといえよう。

次に、窯体の変遷から大萱窯跡群の変遷をみていきたい。Ｂ２類の中で唯一、第４段階前半にその操業が位置付けられる元屋敷東１号Ｂ窯は最大幅3.36ｍである。また、第４段階後半から末にその操業の主体が位置付けられる元屋敷東１号Ｃ窯・元屋敷東３号窯・隠居西窯では最大幅が約2.8～3.0ｍで、Ｂ２類の中でも時期が下るとさらに小形化することが認められ、牟田洞１号窯および３号窯、大萱窯下２号窯は前者に、大萱窯下１号窯は後者に近い数字が確認されている。すなわち、大萱窯下１号窯は大萱窯跡群の大窯では最も新しい時期に構築された窯といえよう。なお大萱窯下窯跡では出土遺物から１号窯から２号窯へと変遷することが指摘されているが（小山1967・長江2016）、窯体構造からみると２号窯から１号窯への変遷が想定される。

（４）弥七田窯の窯体構造

次に弥七田窯の窯体構造について検討を加える。瀬戸・美濃窯における連房式登窯導入期の窯体構造については、『大萱窯跡群 弥七田窯跡第１次発掘調査概要報告書』の付編２「連房式登窯導入期における窯体構造について」で分類と変遷を行い、窯業地のみならず村単位でも窯体構造に地域差がみられることを明らかにした（森2017）。この時点では、弥七田窯の調査は窯体の規模の確認に留まっており、平面形は不明で、天井支柱の位置と焼成室の床面から１号窯は無段斜狭間に、２号窯は有段斜狭間にその構造が類似していることを指摘したにすぎないが、新たに１部屋の規模や燃焼室の構造などが明らかとなったため、今一度検討を加えていく。

弥七田窯跡は１号窯と２号窯の２基の連房式登窯が確認されている。１号窯と２号窯は上下に重なって構築されており、下層の窯体が１号窯、上層の窯体が２号窯である。１号窯は全長20.6ｍ以上、焼成室10室以上で煙道部は確認されていない。部屋の区切りは天井支柱によって分けられ、残りのいいものでは高さが80cm まで残存していることから、少なくとも天井はそれ以上の高さをもっていた。隔壁は検出されておらず、狭間構造をもたない窯といえる。天井支柱は丸形や四角形、三日月形の匣鉢に粘土を充填し周りを粘土で固めて構築している。焼成室は支柱の基底部のみを水平にし、焼成室の床面は全室ほぼ同じ角度で直線的に構築されている。また、第４室から第６室の天井支柱列の軸線と、第７室

表３　弥七田窯窯体計測表

	弥七田１号窯				
	幅	奥行き	狭間孔	傾斜	出入口
燃焼室	不明	不明		(30°)	
第１室	不明	150	不明	不明	不明
第２室	不明	180	不明	不明	不明
第３室	不明	160	不明	23°	不明
第４室	280	180	7	20°	左
第５室	不明	155	7	33°	不明
第６室	不明	160	不明	28°	不明
第７室	不明	175	不明	23°	不明
第８室	250	195	不明	20°	不明
第９室	不明	不明	不明	(不明)	不明
第10室	不明	不明	不明	(不明)	不明
第11室以降	未調査				
煙道部					
備考／床面平均傾斜				25.3°	

	弥七田２号窯				
	幅	奥行き	狭間孔	傾斜	出入口
燃焼室	未検出				
第１室					
第２室	不明	不明	不明	(25°)	不明
第３室	不明	160か	不明	24°	不明
第４室	不明	180か	不明	27°	不明
第５室	不明	165か	不明	22°	右
第６室	削　平				
第７室					
第８室					
第９室					
第10室					
第11室以降					
煙道部					
備考／床面平均傾斜				24.5°	

と第８室の間の天井支柱列の軸線が異なることや、第４室と第５室で確認された右側壁と、第８室の右側壁の平面形が直線的にならないことから、第７室以降は増設された可能性がある。なお、第８室のみ床面が炭化していることから、第８室は最終的に煙道部として使用された可能性が高い。各焼成室の幅は約250～280cm、奥行きは約150～195cm、床面傾斜は約20～33°である（表３）。なお各焼成室には左右どちらかに出し入れ口が設けられているが、いわゆる火床は確認されておらず部屋毎に窯炊きが行われたか否かは不明である。

２号窯は１号窯の上に造成され、少なくとも４室以上あったことが確認される。上部はすでに削平されて消滅している。１号窯と同様、隔壁は検出されておらず、支柱は残りの良いもので約35cmまでしか確認されていないため、それより上部の構造は判らず隔壁をもっていたかは不明であるが、狭間構造を有していた可能性があるため検出された柱は狭間柱として報告されている。狭間柱は丸形や四角形の匣鉢を用いて立てられている。１次調査の際には床面が１～３次面検出されているが、２次調査では３次面は検出されなかったことから、３次面の形成は一部に留まったものと思われる。つまり全面的な窯の補修は１回であり、床面は２面であったと認識される。また側壁を新たに焼成室側に増築し、焼成室の幅を狭くしていることが確認される。２号窯では狭間柱は焼成室の後方に構築され、支柱後方には段差が造られている。奥行きは約160～180cm、床面傾斜は約22～27°である（表３）。

（５）初期連房式登窯の分類と変遷

瀬戸窯と美濃窯の初期連房式登窯は、主に狭間構造からＡ～Ｅ類に分類され、Ａ類は有段横狭間構造、Ｂ類は無段斜狭間構造、Ｃ類は有段斜狭間構造、Ｄ類は有段縦狭間構造、Ｅ類は分炎柱をもつ連房式登窯である。さらにＡ～Ｄ類は焼成室の床面傾斜から細分を行っている。また、Ａ１類の上部構造は芋虫形[4)]、Ｂ類は割竹形、Ｃ・Ｄ類は横室形をとっている。一方で、Ｅ類は東海地方の瓷器系陶器窯に古くからみられる分炎柱をもっていることから、前代の大窯の系譜を受け継いでいることが分かる。なお、瀬戸窯では美濃窯に遅れて第２小期以降に連房式登窯が導入される。

弥七田１号窯は隔壁をもたず狭間構造をとらない窯であるため、狭間構造を有するＡ～Ｄ類に分類することは出来ない。また平面形をみると左右の側壁が平行するＡ～Ｄ類などの一般的な連房式登窯とは異なり、焼成室の幅が上方に行くに従い狭くなっているようで、窯体上方の左側壁は内傾気味に形成されている（図３）。これは瀬戸窯の瓶子１号窯と類似した平面形をとると考えられる（図４）。また燃焼室では側壁の構築材と思われる石が検出されており、これは大窯構造の焚口部分にみられる構築方法で、

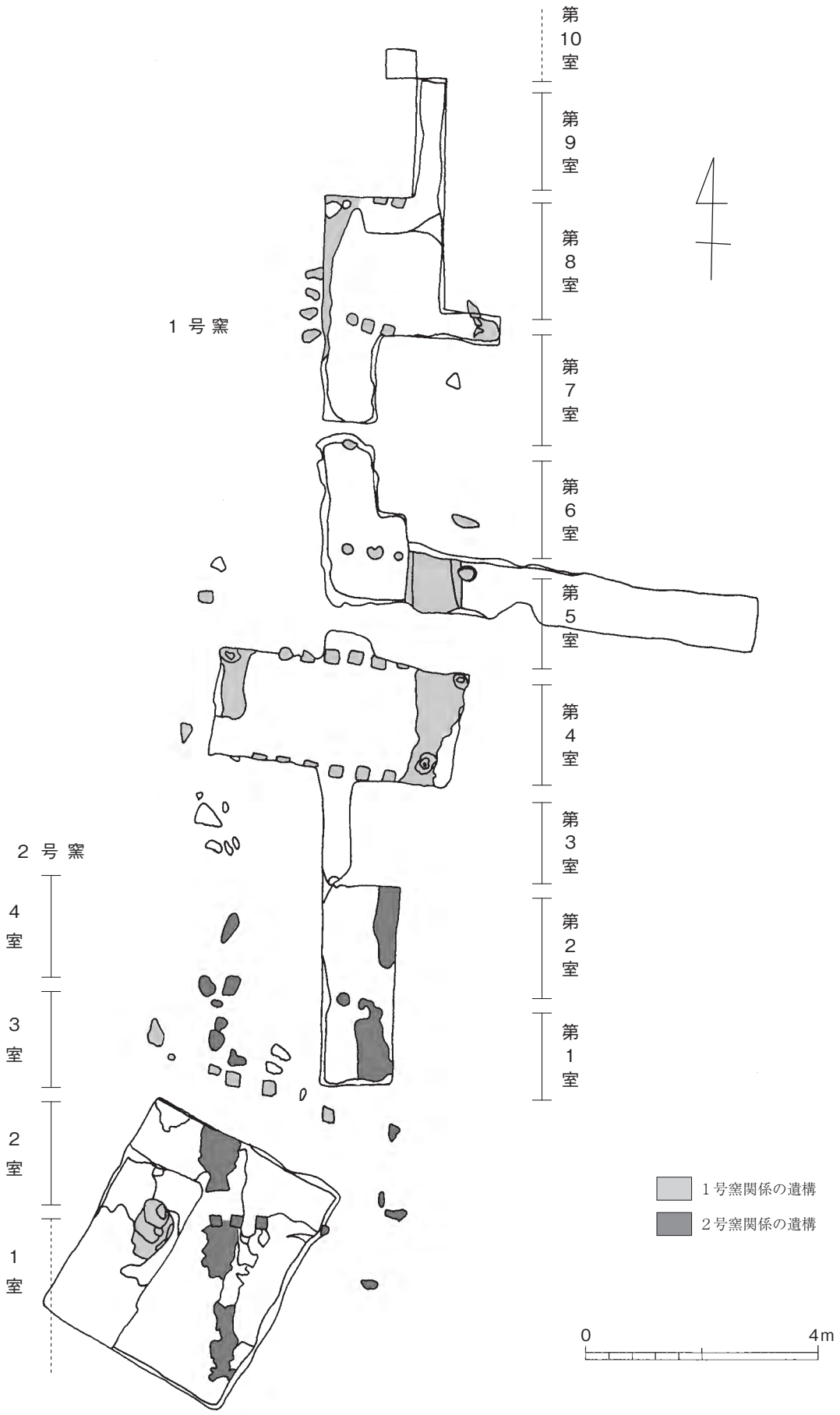


図３　弥七田窯窯体実測図

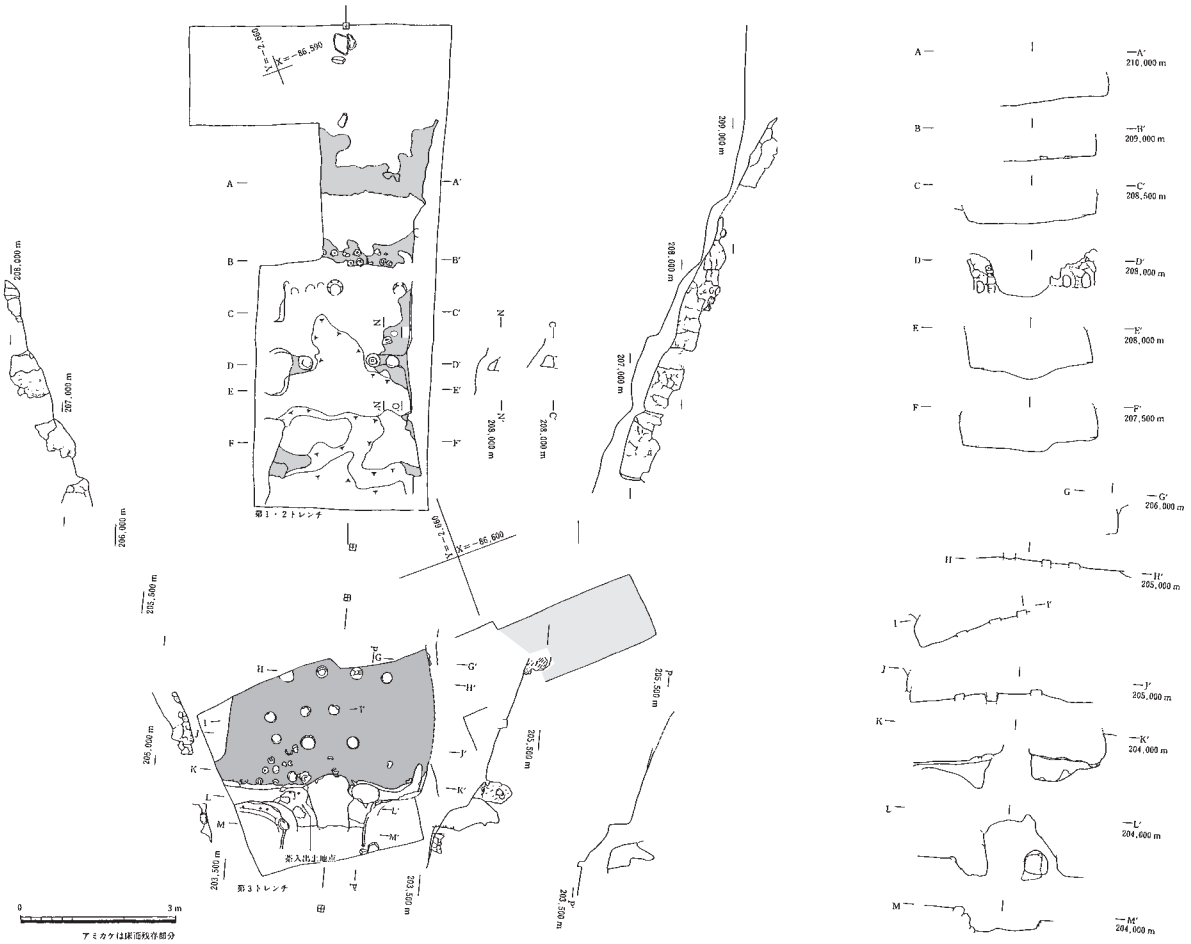


図４　瓶子１号窯窯体実測図（青木2000）

窯体下方では大窯の構造をもつ可能性がある。そのため、弥七田１号窯は瓶子１号窯と同じく分炎柱を有する連房式登窯と想定される。

さて、付編２ではＥ類は分炎柱を有する連房式登窯と位置付けたが、これは平面形によりさらに分類する必要がある。そのため、新しくＦ類を設定し、Ｅ類は分炎柱を有するが連房式登窯の平面形をもつもの、Ｆ類は窯体の平面形の前方が大窯、後方が連房式登窯の構造をもつものとして分類する。さらにＥ類は焼成室の傾斜や構造からそれぞれ１～３類に細分される。Ｅ１類は無段斜狭間（Ｂ類）の構造をとり、焼成室の角度は平均20°前後である。穴田２号窯１次窯が該当する。Ｅ２類は有段斜狭間（Ｃ類）の構造をとり､焼成室の角度は平均10.7°である。穴田２号窯４次窯が該当する。Ｅ３類は有段縦狭間（Ｄ類）の構造をとり、焼成室の角度平均2.3°で、瓶子２号窯が該当する。なおＦ類では、弥七田１号窯のように分炎柱の有無は不明であるが、狭間構造をもたず焼成室は天井支柱によって区切られ、焼成室の角度は平均25.3°であるＦ１類と、瓶子１号窯のように分炎柱を有し有段斜狭間（Ｃ類）の構造をとり、焼成室の角度は平均15°であるＦ２類に細分が可能である。

次に弥七田２号窯では、左右の両側壁がほぼ平行し直線的な形状を持つことから、側壁と天井壁が一貫して造られたものと考えられる。２号窯の狭間柱は焼成室の最後部に造られるが、有段縦狭間とは異なり、次室の床面と狭間柱は密着していない。これは有段斜狭間の特徴であり、２号窯は焼成室の傾斜角度からＣ１類に分類され、おそらく横室形の上部構造を有する窯といえよう。なお１号窯上方の側壁

は直線的にすぼまっていることから、２号窯とは異なり割竹形の上部構造が推測される。

連房式登窯の焼成室の床面傾斜角度は、はじめは傾斜をもつが時代が下るにつれ平坦に近くなる傾向が確認される。弥七田１号窯は焼成室の角度が平均25.3°で、これは割竹形の上部構造を有し、第１小期前半に位置付けられる定林寺東洞３号窯（平均25.8°）と近似した数値である。また、２号窯（平均24.5°）も同分類のＣ１類に比定される清安寺窯（平均25.5°）や定林寺東洞２号窯（平均21.8°）と近似した数値を現しており、これらの窯は窯体構造の型式的変遷と遺物の年代から第１小期後半に位置付けられている。さらに天目茶碗から弥七田窯は第１小期前半から後半に位置付けられることなどから、弥七田１号窯が第１小期前半、２号窯が後半に比定されよう。なお、同じ土岐川以北の第１小期前半に位置付けられる窯は全て狭間構造をもつ連房式登窯で、狭間構造をもたない弥七田１号窯は他の窯場にはみられないかなり特徴的な窯といえる。（森まどか）

３．大萱窯跡群の窯印―窯印からみた生産組織―

窯印とは、製品や窯道具に刻まれた簡単な選別標識（識別記号）で、複数の工人の製品を同一の窯で焼成する際に各自の製品を区別する目的でつけられたもので、桃山期までは各窯業地で製品にも使用されたが江戸時代以降は窯道具のみに使用される。消費地から出土する茶陶類に、各窯業地に共通した窯印が存在することから注文者の印とする考え方もあるという（齊藤2002）。いずれにせよ、窯印は生産技術の伝播の実態を明らかにする上で重要な存在で、大萱窯跡群では牟田洞窯・大萱窯下窯・弥七田窯において共通した窯記号（窯印）が認められることから、大窯である牟田洞・窯下窯から連房式登窯の弥七田窯へ、陶工あるいは陶工集団の有機的な繋がりが指摘されている（長江2016）。

（１）瀬戸美濃窯の窯印（図５・６の№１～34）

ここでは大萱地区・久尻地区など当該期（大窯第３段階後半から連房式登窯導入期）の窯跡の発掘調査が多く行われている美濃窯土岐川以北の地域を中心に窯印の概要を述べる。

①大萱地区

牟田洞窯では発掘調査によって「千」「オ」「卌」の３種類が確認されている。窯印が記された器種には、窯道具では平底匣鉢の内底と手捏ね成形の小判形匣鉢蓋に「千」「オ」「卌」が、製品では付高台の灰釉丸皿の内外面（№22）と灰釉折縁皿の内面（№31）に「卌」があり、いずれも大窯第４段階前半に位置付けられる（愛知学院大学2016）。ところが小山冨士夫氏の著作によると、牟田洞窯からは「千」「〆」「Ｔ」「△」「Ｆ」「⊕」「⊖」「∧」などの窯印を刻した窯道具が確認され、このうち「△」「〆」「一」「⊕」「∧」の窯印は茶碗類にも記されているという（小山1967）。したがって、窯印が工人（陶工）の識別記号であったとすると、牟田洞窯では10名以上の工人が３基の大窯の操業に携わったことになる。

大萱窯下窯では発掘調査によって「千」「オ」「〆」「卌」の４種類が確認されており、これらは牟田洞窯にも存在した。窯道具では平底匣鉢の内底に「千」「オ」「〆」、ロクロ成形の匣鉢蓋に「卌」が、製品では大窯第３段階後半の灰釉丸皿（№21）の内外面に「オ」が記される（長江2016）。その他に第４段階前半の灰釉向付の外底に「〆」が記されたものがあり（井上1988）、牟田洞窯と共通する少なくとも４名の工人が操業に携わったことになる。

弥七田窯の発掘調査では「千」「〆」の２種類が確認されている。窯内出土のものでは焼台の上面あるいは上下面に入るものが最も多く、匣鉢や匣鉢蓋には少なく、製品には確認されていない。なお「千」「〆」の焼台は、１号窯・２号窯とも各房（焼成室）で出土していることから（愛知学院大学2018）、弥

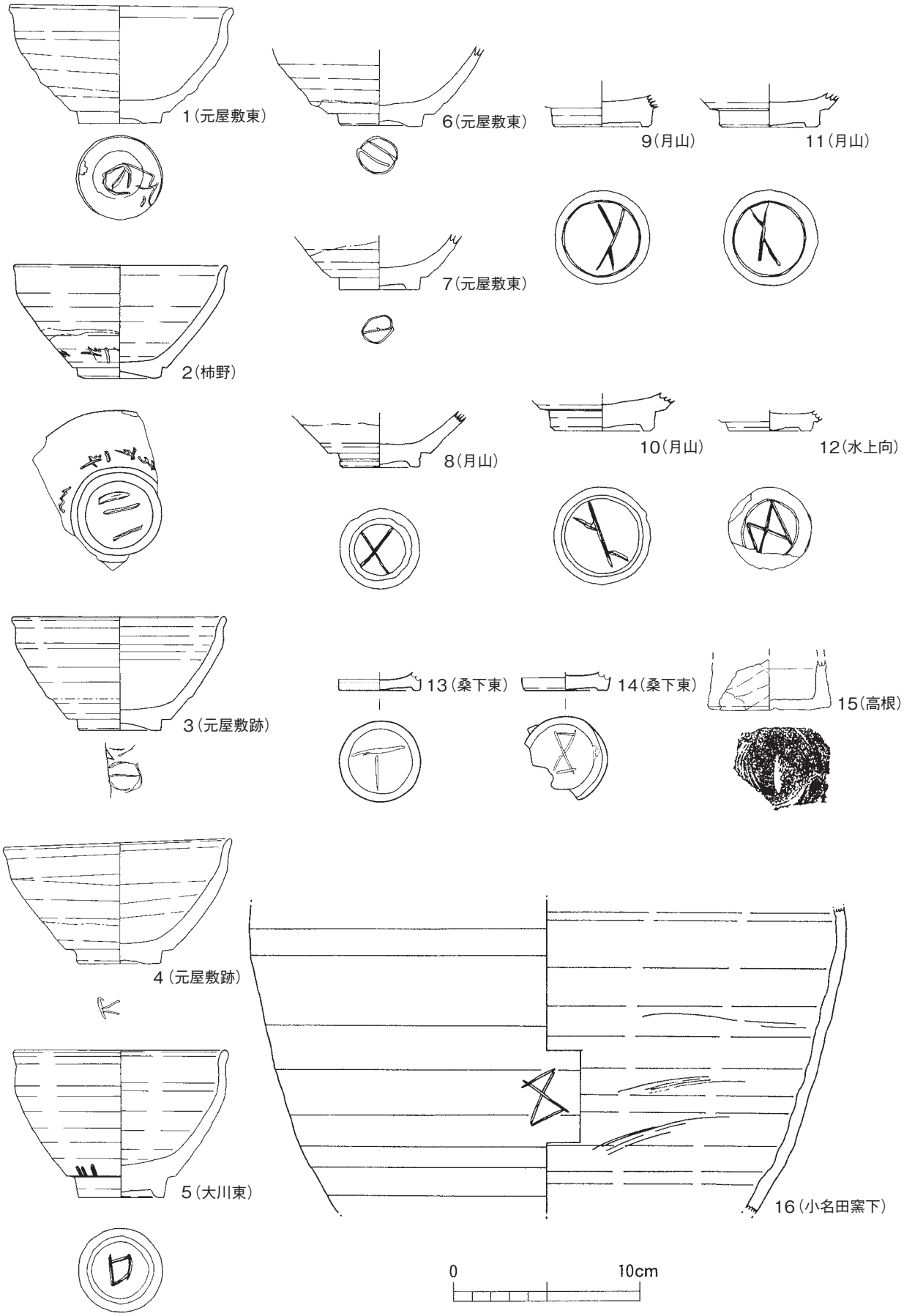


図５　製品に記された窯印（1）

七田窯の２名の工人は連房式登窯の各部屋に一定の権利を有していた可能性が高い。

②久尻地区

久尻地区では元屋敷窯・窯ヶ根窯をはじめ当該期の発掘調査例は多い。まず、瀬戸美濃地方で最初の連房式登窯といわれる元屋敷窯では、匣鉢に「一」、匣鉢蓋に「常」という文字がみられる以外は、窯道具に窯印はない（図７）。製品では沓形碗に「一」「×」「∧」「→」「Ｔ」「イ」、水指蓋の底に「∧」「一」、茶入の底部に「上」「∧」「Ｔ」、水指の底部に「Ｔ」などがある。なお隣接する元屋敷東の大窯からは、第３段階後半の天目茶碗（№１・６・７）の外底に「㊀」「㊀と⋔」「㊀」があり、元屋敷跡出土の第３段階後半の天目茶碗（№３・４）にも「㊀と⋔」「Ｋ」がある（張替2008）。

また窯体構造の類似性から元屋敷窯からの技術伝播が想定される窯ヶ根窯では、１号窯と４号窯の２基の連房式登窯が上下に重なって検出されており、窯道具に多くの種類の窯印が出土している（図７・８）。焼台の上面に「オ」「⋔」「∧」「Ｋ」「一」「±」「Ⓣ」「千」「⧖」、匣鉢の底部外面に「オ」「十」「±」「一」「∧」、匣鉢蓋に「⊕」「Ⓣ」「×」「一」「⧖」などがある。このうち、「一」「十」「×」「オ」「㊀」は第１小期前半の４号窯段階に、「⋔」「千」などは、おそらく１号窯段階（第２小期以降）に登場する。なお、窯ヶ根窯では製品には水指の底に「Ｔ」「×」がみられるが、いずれも４号窯の構築材であることから、元屋敷窯から持ち込まれた可能性が高い（高橋2006）。

第１小期後半の連房式登窯である清安寺窯では、方形の匣鉢蓋に「⊕」、円形の匣鉢蓋に「×」「Ｋ」「千」がみられるが製品には確認されていない（大江1971、中嶌2005）。また第４段階後半以降の大窯である隠居西窯では、沓形碗の高台内に「×」が記されるが窯道具には認められない（田口1988）。さらに隠居表窯では、大窯である１号窯からは、第３段階後半の灰釉内禿皿（№25）の内外底に「⧺」、第４段階後半の沓形碗の高台内に「一」が、第１小期後半の連房式登窯である２号窯からは、焼台下面に「⊠」が記されるが他にはみられない（林・加藤1992）。

③その他土岐川以北の窯印

定林寺地区では、東洞１～３号窯、西洞１～３号窯の発掘調査が行われているが、窯印の報告は少ない。第４段階前半の大窯である東洞１号窯で円形の匣鉢蓋に「⋇」、西洞１号窯では第４段階後半の長石釉折縁皿（№32）の内底に「×」が確認されている。第１小期前半の連房式登窯である西洞２・３号窯では焼台上面に「十」が、第１小期後半の東洞２号窯では焼台上面に「千」が記されている（大江1970、中嶌2005）。

小名田地区では、窯下窯と尼ヶ根窯が発掘調査されている。大窯第１段階から第３段階にかけて操業した小名田窯下窯では、第１段階の灰釉端反皿の外底（№17）に「×」、時期不詳の祖母懐茶壺（№16）の下胴部に「⧖」が記される。窯道具では匣鉢の内底やロクロ成形の匣鉢蓋の上面に、櫛書きによる「×」「ノ」などや同心円状や波状の文様が認められる（山内1997）。第３段階後半から第４段階前半の尼ヶ根窯では、１号窯からは第４段階前半の天目茶碗の高台内に「〓」、２号窯からは第３段階後半の灰釉内禿皿の内底に「±」、その他には同じく灰釉内禿皿の内外底に「オ」が記されるが、窯道具には確認されていない（田口・若尾1987）。

その他に３基の大窯からなる高根窯では製品にのみに窯印が確認され、第４段階末の織部茶入（№15）の外底に「一」、小皿類では第４段階後半の灰釉折縁皿（№29）の内底に「㊀」、志野丸皿（№23）の内底に「Ｌ？」が、第４段階末の美濃唐津風向付（№33）の外底に「オ」、鼠志野小皿（№24）の外底に「×」が記されている（張替2009）。なお第３小期の連房式登窯である八幡窯では、一つの焼台の

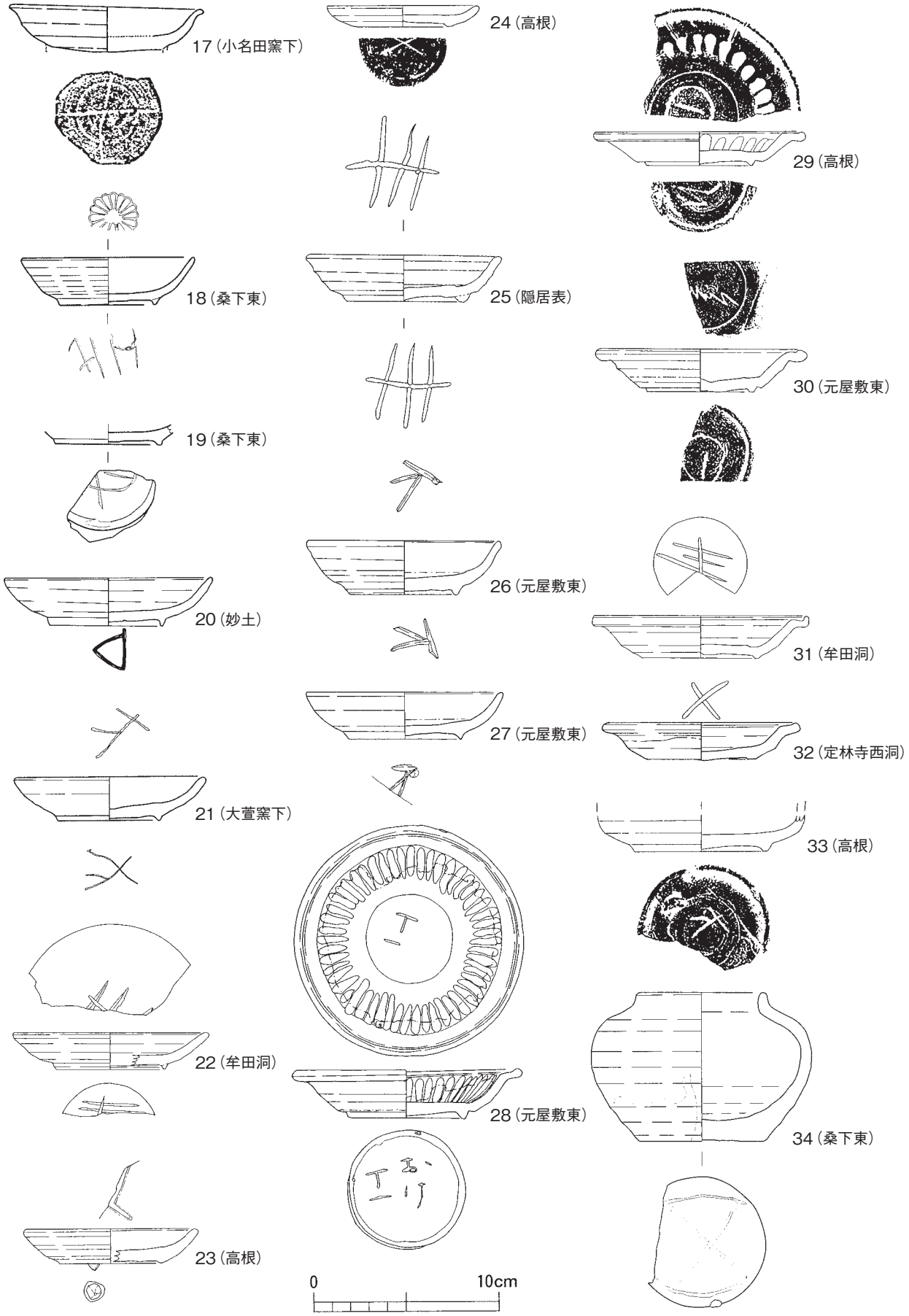


図６　製品に記された窯印（２）

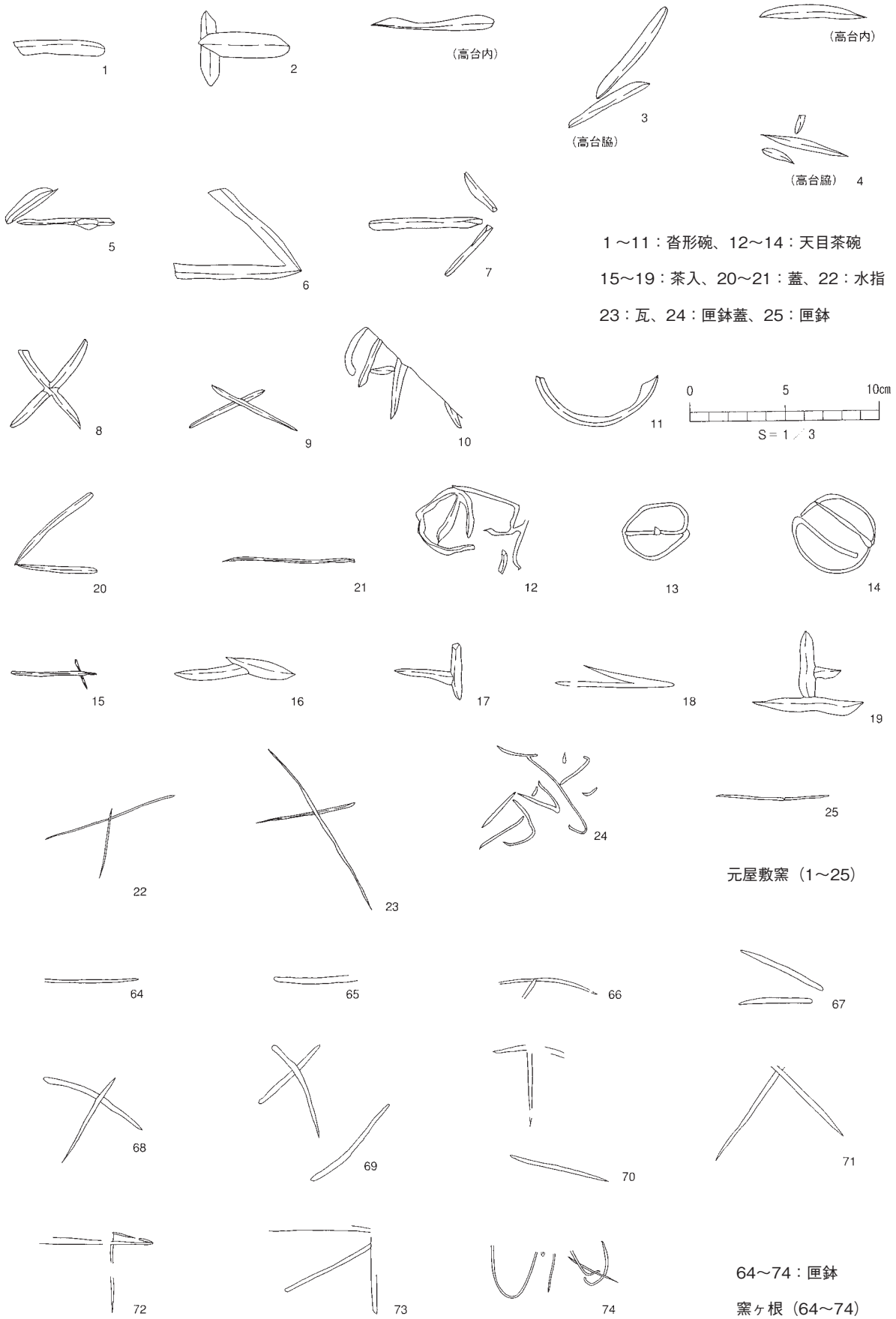


図7　元屋敷窯・窯ヶ根窯（1）の窯印（張替2008より作成）

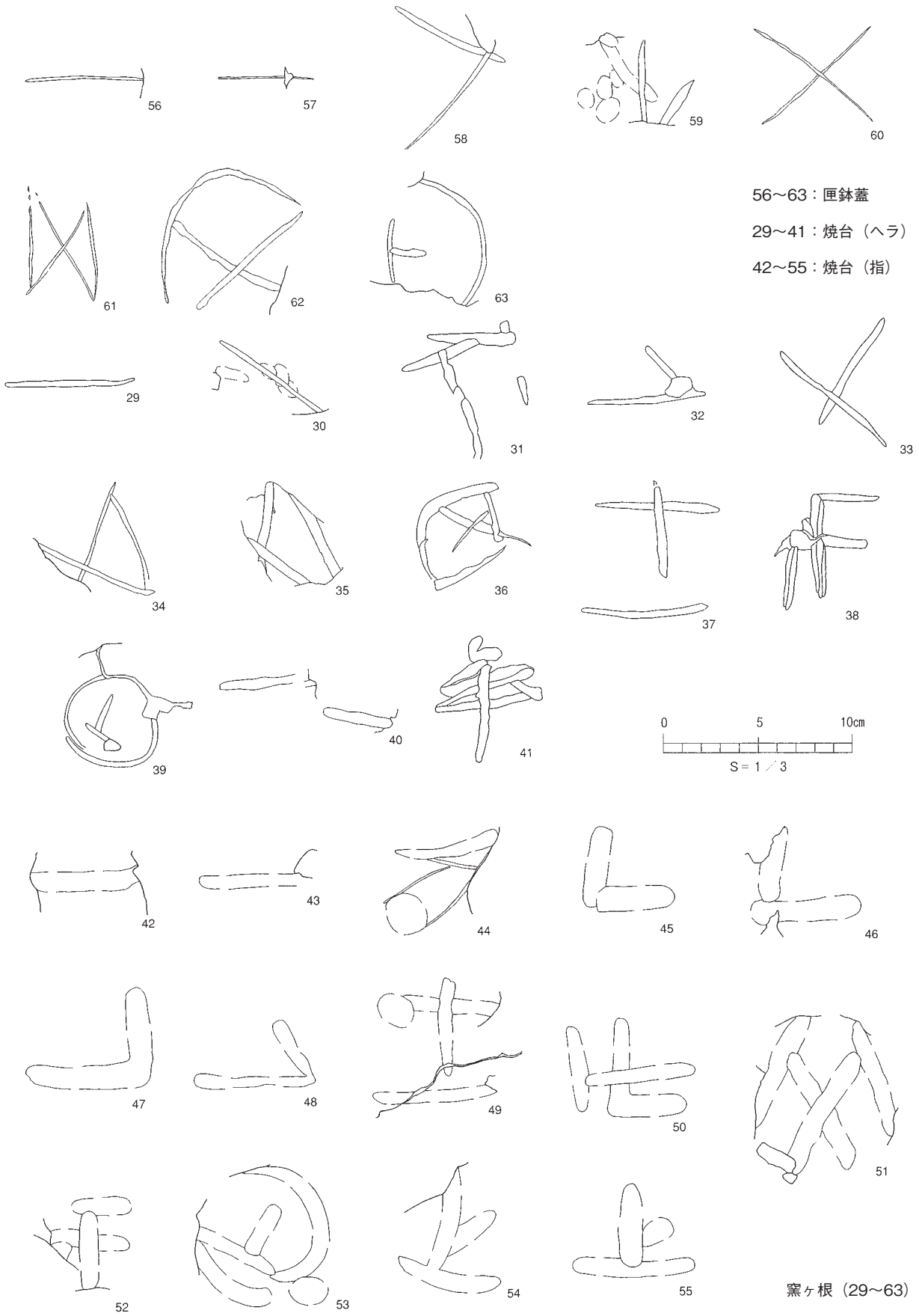


図８　窯ヶ根窯（２）の窯印（張替2008より作成）

上下面に「八」と「彦右□」という人名が認められるが、それ以外に窯印は確認できない（加藤・長瀬2000）。

④美濃窯土岐川以南の窯印

土岐川以南の東部地域では、大窯第３段階以降、初期連房式登窯が引き続き構築され、このうち大川地区で大川東窯跡、水上地区で田ノ尻窯跡の発掘調査が行われている。大川東窯では窯道具には窯印は確認されておらず、製品では第1小期後半の天目茶碗（№５）の高台内に「Ｄ」、体部下端に「≡」が記される（田口1979）。田ノ尻窯では、薪の投入孔を塞ぐ「元和」銘の栓に、窯印らしきものが認められる以外は、窯道具・製品ともに窯印は報告されていない（小澤1981）。なお水上向窯の採集遺物には、第１小期前半の長石釉天目茶碗（№12）の高台内に「⊠」が記されている（住田1982）。

土岐川以南の中央部では、妙土窯（楢崎・井上1976）・滝呂日影窯（若尾1992）・柿野窯（桃井・今井1996）など主に前半期の大窯の発掘調査が行われている。滝呂日影窯では確認されていないが、妙土窯では灰釉丸皿（№20）の外底に「△」、柿野窯では天目茶碗（№２）の高台内に「≡」が記されている。いずれの大窯でも窯道具に窯印は確認できない。

⑤ 瀬戸窯側の窯印

大窯段階の概要を述べる前に、後期様式における古瀬戸焼成窯の窯印について少し触れておく。後Ⅱ期に位置付けられる赤津区小長曽窯では全く窯印の報告はない（河合2002）。後Ⅲ期の赤津区音玄窯跡でも天目茶碗の高台内に「十」などの窯印が認められる程度で（松澤2012）、この時期まで窯道具に窯印は存在しないようである。それに対して、古瀬戸系施釉陶器である後Ⅳ期古段階の下石西山窯では、匣鉢の体部外面および笠状になる匣鉢蓋の内面に、ヘラ書きの「⊠」「×」「ノ」「⊖」の他に櫛書き記号が、記されており、少なくとも５種類の窯印が確認されているが製品にはみられない（近藤2004）。

続く古瀬戸後Ⅳ期新段階および大窯第２段階の昔田窯では、匣鉢蓋の上面に「×」「〓」が記されるが、他に窯印は確認されていない（藤澤1986、河合2008）。大窯第１・２段階を主体とする桑下東窯では、第１段階の天目茶碗（№13・14）の高台内や小壺（№34）の外底に「Ｔ」「⊠」が記され、匣鉢の内底や匣鉢蓋・ハサミ皿の上面には「一」「∧」「×」「十」「〓」「イ」「ノ」や櫛書き沈線が施されている（小澤2011）。大窯第３段階前半の月山窯では天目茶碗（№８～10）の高台内に「×」「⊿」、徳利の外底に「十」が記されるが窯道具には確認できない（藤澤1986）。なお瀬戸窯では第３段階後半から第４段階末の大窯は存在せず、連房式登窯の出現は第２小期以降である。

（２）窯印の種類と機能

以上のように、窯印が記された器種は窯道具と製品に大別されるが、それぞれどのような意味があるのであろうか。当該期を中心に焼成室が単房の大窯段階と、複数の焼成室から構成され房の分割所有が可能となる初期連房式登窯段階とに分けて検討を加える（表４）。

瀬戸美濃大窯では、発掘調査が行われ一定量の出土遺物が報告されている窯では、出土量は非常に少ないが窯印が出土する。地域毎にみると発掘調査例が多い土岐川以北がやや多い傾向で、特に大萱地区の牟田洞窯は種類が豊富で目立つ存在である。小山冨士夫氏が調査したものを含めると11種類が確認され、このうち全てが匣鉢や匣鉢蓋など窯道具に記されており、茶碗類や小皿類など製品に記されたものは５種類存在する。窯道具のみにしか確認されていないものは「Ｆ」のみで、製品のみに使用された窯印には「⊖」がある。大窯の窯道具にみられる窯印には、匣鉢の場合は内底あるいは匣鉢蓋の上面に記されるものがほとんどである。また牟田洞窯に続いて窯印の種類が多い瀬戸窯品野地区の桑下東窯で

表４　瀬戸美濃窯の窯印

地区	窯跡	窯体	器種		卌	千	オ	⋀⋀	⊕	⊖	ー	∧	T	△	F	×	＋	±	工	⧖	✳	K	Ⓣ	→	⊜	＝	⊠	D	≡	イ	ノ	櫛書
大萱	牟田洞	大窯	窯道具	匣鉢類	◎	◎	◎	○	○	○	○	○	○	○	○																	
			製品	茶碗類				○	○		○	○		○																		
				小皿類	◎																											
	窯下	大窯	窯道具	匣鉢類	◎	◎	◎	◎																								
			製品	小皿・向付			◎	◎																								
	弥七田	登窯	窯道具	匣鉢類		◎		◎																								
				焼台		◎		◎																								
久尻	元屋敷東	大窯	製品	天目茶碗				◎		◎															◎							
				小皿類						◎									◎			◎			◎							
	元屋敷	登窯	窯道具	匣鉢類							◎																					
			製品	沓形碗							◎		◎			◎	◎							◎						◎		
				水指・茶入							◎	◎	◎								◎									◎		
	窯ヶ根	登窯	窯道具	匣鉢類			◎		◎		◎	◎				◎	◎	◎		◎			◎	◎								
				焼台		◎	◎	◎			◎	◎				◎		◎		◎		◎	◎				◎			◎		
			製品	水指									◎			◎																
	清安寺	登窯	窯道具	匣鉢蓋		◎			◎							◎						◎										
	隠居西	大窯	製品	沓形碗												◎																
	隠居表	大窯	製品	小皿類	◎																											
				沓形碗							◎																					
		登窯	窯道具	焼台																							◎					
	高根	大窯	製品	小皿・向付			◎			◎						◎																
				茶入							◎																					
定林寺	東洞	大窯	窯道具	匣鉢蓋																	◎											
		登窯		焼台		◎																										
	西洞	大窯	製品	小皿類												◎																
		登窯	窯道具	焼台													◎															
小名田	窯下	大窯	窯道具	匣鉢類												◎															◎	◎
			製品	小皿類												◎																
				茶壺																◎												
	尼ヶ根	大窯	製品	天目茶碗																						◎						
				小皿類			◎											◎														
土岐川以南	水上向	登窯	製品	天目茶碗																◎												
	大川東	登窯	製品	天目茶碗																								◎	◎			
	妙土	大窯	製品	丸皿										◎																		
	柿野	大窯	製品	天目茶碗																									◎			
	下石西山	古瀬戸	窯道具	匣鉢類						◎						◎				◎											◎	◎
瀬戸窯	音玄	古瀬戸	製品	天目茶碗												◎	◎															
	桑下東	大窯	窯道具	匣鉢類							◎	◎				◎	◎									◎					◎	◎
			製品	天目・小壺									◎							◎												
	昔田	大窯	窯道具	匣鉢蓋												◎										◎						
	月山	大窯	製品	天目・徳利												◎	◎															

◎は報告書等で確認できたもの、○は小山1967による。

は、匣鉢・匣鉢蓋に加えてハサミ皿の上面にも記されており、各工人が匣鉢の中に入れられた製品や、匣鉢蓋やハサミ皿の上に置かれた製品の所有権を主張する目的で記された可能性が高い。

一方、大窯製品にみられる窯印には、丸皿・内禿皿・折縁皿などの小皿類や向付など食器に記されたものと、天目茶碗・沓形碗・茶壺・茶入など茶陶に記されたものとに大別される。前者の食器関係では外底をはじめ内底にも施されている場合が多く、商品とはなりえないことから各工人の個人使用のため記されたと推測している。後者の茶陶関係では天目茶碗や沓形碗など茶碗類に多く､釉薬の無い露胎部、特に高台内に記されるものが大半で、天目茶碗では古瀬戸後期様式のものに既に存在する。その希少性からみて特殊品や特注品の類であることに間違いはなく、他の窯業地の製品にも同一の窯印が存在することから注文者の印とするという考え方もある。しかし、窯道具や食器類の窯印と共通するものが多いことから、祖母懐茶壺にみられるように工人が贈答用として記したものと考えておきたい（藤澤2001）。

瀬戸・美濃窯の連房式登窯における窯印は、久尻地区の元屋敷窯や窯ヶ根窯を除くと、大窯と比べてもさらに報告例が少なく、全ての連房式登窯に存在するとはいえないようである。窯道具では、匣鉢類

の他に新たに焼台の上面あるいは上下面に記されるようになる。久尻地区の窯ヶ根窯・隠居表窯をはじめ、大萱地区の弥七田窯、定林寺地区の東洞窯・西洞窯など、これまでのところ土岐川以北の窯に限定され、当該地域では元屋敷窯を除くほとんどの初期連房式登窯で確認できる。焼台は匣鉢を垂直に積み上げるため窯の床面に置かれ、匣鉢の最上部には匣鉢蓋が載せられるが、焼台の上に積み上げられたすべての製品の所有権を主張したものであろうか。

一方、登窯製品に記される窯印は、土岐川以北では元屋敷窯を除くとほとんどみることができない。ただし、元屋敷窯でも窯印は沓形碗・水指・水指蓋・茶入など贈答用の茶陶に限定され、小皿類など一般的な食器類には窯印はみられなくなる。なお土岐川以南の水上地区では天目茶碗に大窯製品と同様の窯印が存在する。

（３）大萱窯跡群の成立と展開

窯印の使用が工人各自の製品を区別するために付けられたとすると、共通する窯印の存在は工人の職場（窯場）間の移動を意味する可能性があり、特に窯場の操業時期が近ければ近いほどその蓋然性が高くなり工人移動の実態に具体性を与える。表５は、大萱地区にみられる窯印を取り上げ、類似する窯印が出土した窯跡を時期毎に配列したものである。なお製品に記された窯印からは細かい時期同定が可能であったが、窯道具に記された窯印からは各窯の操業期間を当て嵌めているため、筆者の思い込みや精粗があることをお断りしておきたい。

まず大萱地区の３窯にみられる窯印は、小山氏分を含めると11種類が確認されている。全て牟田洞窯に存在しており、「卌」「千」「オ」「⋀⋀」の４種は窯下窯で、「千」「⋀⋀」は弥七田窯でも確認できる。窯下窯の成立を第３段階後半、牟田洞窯を第４段階前半とすると、第４段階前半以降に多くの工人が生産に参加したものと思われる。11種類の窯印のうち、その直前の第３段階後半には「卌」が隠居表窯で、「オ」が尼ヶ根窯で、「⋀⋀」「㊀」は元屋敷東窯で確認されており、それらの窯印を持つ久尻地区や小名田地区の工人が、大萱地区の成立に直接関与したことは明らかである。その他に大萱地区の成立と直接は関係しないが、「一」「∧」「Ｔ」が瀬戸窯品野地区の桑下東窯で、「△」が美濃窯土岐川以南笠原地区の妙土窯で確認されており、大窯第1・２段階に瀬戸窯や土岐川以南中央部にいた工人との関係が窺われる。

次に牟田洞窯が廃絶する大窯第４段階末前後には、「一」が隠居表窯で、「オ」「㊀」「一」が高根窯で確認されるが窯下窯では認められないことから、それらの窯印を持つ工人は大萱地区から移動した可能性が高い。続く弥七田窯の操業時期には窯印はさらに少なくなり「千」「⋀⋀」の２種類のみとなる。「卌」「△」「Ｆ」の窯印は他地区の連房式登窯でも発見されていないが、「一」「∧」「Ｔ」は元屋敷窯、「千」「オ」「⋀⋀」「㊥」「一」「∧」は窯ヶ根窯、「千」「㊥」は清安寺窯、「千」は定林寺東洞窯でも確認されている。大萱地区にいた多くの工人は久尻地区を中心に帰還したものと推測できる。以上のように、土岐川以北の地域では久尻地区と大萱地区との工人レベルでの強い繋がりが想定できる。

（４）窯印の出現と変遷

最後に、大萱地区以外の窯印の変遷（表６）を含めて、瀬戸美濃窯における窯印の出現と変遷についてまとめておく。窯道具に記された窯印の本格的な出現は、古瀬戸系施釉陶器窯の成立する後Ⅳ期古段階である。前述の下石西山窯では５種類の窯印が確認されており、これは下石西山窯における平坦面（工房）の数と一致する。すなわち、後Ⅲ期までの古瀬戸焼成窯では１基の窯炉と１棟の工房とがセットで存在し、単一の工人集団により半地下式窖窯が経営されたため窯印は不要であったのに対して、下石西

表５　窯印の変遷（大萱地区関係）

	⧻	千	オ	⩘	⊕	⊖	ー	∧	T	△	F
後Ⅲ期											
後Ⅳ期古						下石西山					
後Ⅳ期新											
大窯１							桑下東	桑下東	桑下東		
大窯２										妙土	
大窯３前											
大窯３後	隠居表		尼ヶ根･窯下	元屋敷東		元屋敷東					
大窯４前	牟田洞	牟田洞･窯下	牟田洞･窯下	牟田洞･窯下	牟田洞	牟田洞	牟田洞	牟田洞	牟田洞	牟田洞	牟田洞
大窯４後	牟田洞･窯下						牟田洞･隠居表				
大窯４末	窯下	窯下	高根	窯下		高根	高根･元屋敷	元屋敷	元屋敷		
登窯１前		弥七田･東洞	窯ヶ根	弥七田	窯ヶ根		窯ヶ根				
登窯１後		弥七田･清安寺			清安寺						
登窯２～		窯ヶ根		窯ヶ根			窯ヶ根	窯ヶ根			

表６　窯印の変遷（大萱地区以外）

	×	＋	±	⧖	⁎	K	→	＝	⊠	イ	ノ	櫛書き
後Ⅲ期		音玄										
後Ⅳ期古	下石西山			下石西山							下石西山	下石西山
後Ⅳ期新	昔田							昔田				
大窯１	桑下東	桑下東		桑下東				桑下東			桑下東	桑下東･小名田
大窯２				小名田								
大窯３前	月山	月山										
大窯３後	小名田		尼ヶ根			元屋敷東						
大窯４前					東洞			尼ヶ根				
大窯４後	西洞･隠居西											
大窯４末	高根･元屋敷	元屋敷			元屋敷		元屋敷			元屋敷		
登窯１前		窯ヶ根	窯ヶ根	水上向･窯ヶ根			窯ヶ根		窯ヶ根	窯ヶ根		
登窯１後	清安寺	西洞				清安寺			隠居表			
登窯２～	窯ヶ根？		窯ヶ根？									

※元屋敷窯と窯ヶ根４号窯の時期差を明確にするため、前者を「大窯４末」、後者を「登窯１前」とした。

山窯では、１基の窯炉と５棟の工房および乾燥施設から構成されており（近藤2004）、各工房を区別するため窯印が必要であったと推測される。

古瀬戸後Ⅳ期新段階から大窯第３段階前半にかけて、大窯は瀬戸窯側から美濃窯土岐川以南に展開するが、窯印は天目茶碗の高台内に記される程度で非常に少なく、窯道具にはほとんど記されることはなくなる。こうしたなか、第１・２段階を中心に操業した桑下東窯では７種類以上の窯印が窯道具に認められる。桑下東窯は大窯が１基から数基、作業場４カ所、堅穴２カ所、堅穴建物２棟、掘立柱建物１棟、粘土溜６カ所、ロクロピット55基などが検出された大窯では最大規模の窯場で、生産工房・乾燥施設・窯炉・製品納置所など江戸時代の窯場にみられる各施設が整備されており、古瀬戸焼成窯のそれと比べると格段に進化している。また窯の数百メートル西には在地領主長江氏の居城である桑下城が存在し、窯と城の存続期間がほぼ一致することから（小澤2013）、長江氏の庇護の元、桑下東窯の操業には多くの工人が動員された可能性が高く、ロクロピットが多い割には窯炉の数が少ないことから、識別記号として窯印が必要となったと推測される。

瀬戸窯側で大窯がみられなくなり、土岐川以北と土岐川以南の東部に大窯が集中しはじめる第３段階後半になると、茶陶以外に小皿や向付など食器類にも窯印が記されることがやや増加するものの、窯道具には相変わらずほとんどみられないなか、多くの窯印を有する大萱地区の牟田洞窯では、土岐川以北の地域をはじめ瀬戸窯側や土岐川以南中央部の多くの工人が操業に携わったことは明らかである。大窯第４段階末から登窯第１小期前半にかけて、大萱地区では窯印が激減するのに対して久尻地区の元屋敷窯・窯ヶ根窯で窯印は急増する。元屋敷窯の窯印は窯道具にみられず沓形碗・茶入・水指など茶陶に多

いのが特徴で、多種多様な織部製品の存在とともに元屋敷窯の特殊性を示唆している。元屋敷窯と同様の有段横狭間の窯体構造を有し、製品の特徴から元屋敷窯からの直接的な技術伝播が指摘される窯ヶ根窯では15種類以上の窯印が確認され、窯ヶ根４号窯の構築にあたっては、元屋敷窯および大萱地区から多くの工人が動員されたことは明らかである。なお第１小期後半以降、土岐川以北では元屋敷窯で多くみられた製品の窯印はなくなり、窯道具でも焼台に僅かに残るにすぎない[5)]。

これまで古瀬戸後Ⅳ期古段階（15世紀中葉）の古瀬戸系施釉陶器窯から、第１小期後半（17世紀前葉）前後の連房式登窯まで、主に窯道具に記された窯印を中心にその変遷をたどった。下石西山窯では工房の数と窯印の種類数が一致することから、窯道具にみられる窯印は工人個人の識別記号というよりも、工房単位の選別標識であった可能性が高いことを指摘した。また窯印には、元屋敷窯と窯ヶ根窯のみにみられる「→」「⧄」「イ」のように短期間にのみ使用されたものも存在するが、「×」「十」「一」など須恵器生産以来の窯印は置くとしても、下石西山窯以来の「⊖」「⧖」や櫛書き沈線が、大窯段階から連房式登窯導入期にかけて確認できることなどから、工人一代限りの印ではなかったと推測できる。

（藤澤良祐）

４．連房式登窯導入期における地域性について

（１）大窯後半期から連房式登窯導入期の動向

瀬戸美濃大窯の分布と群構造は、第３段階後半（1575～1590）に大きく変化することが知られている。尾張国の瀬戸窯と三河国の藤岡窯では大窯は全くみられなくなり、美濃窯でも第２段階（1530～1560）に開窯した土岐川以南中央部の滝呂・柿野・細野地区で生産が廃絶するのに対して、土岐川以北の地域では、前段階に成立していた小名田・久尻地区をはじめ大富・定林寺・大萱地区でも開窯し、大窯の生産拠点は当地域に移る。第４段階前半（1590～1600）にはさらにその傾向が進み、土岐川以北の地域では高根・大平・浅間地区でも開窯し全ての地区で生産が行われ窯数も急増し、土岐川以南の地域では東部の大川地区で窯数が増加している。続く第４段階後半（1600～1610）には土岐川以北では引き続き生産が集中的に行われる一方、土岐川以南の地域では、東部の大川地区をはじめ郷ノ木・水上・猿爪地区で開窯し窯数も急増する。それ以外の大窯は中央部の妻木地区で僅かに存続するにすぎない。したがって、第３段階後半から第４段階後半にかけて土岐川以北と土岐川以南東部の２地域に生産が集中し、これらの地域ではその直後に初期連房式登窯が登場するのである。なお慶長15年（1610）以降、瀬戸窯では瀬戸・下品野・赤津・山口地区で施釉陶器生産が復活するが、連房式登窯の導入は少し遅れ大窯構造が主体であったと考えられている。

さて大窯段階の窯体構造は、第２章で述べたように同時期には同形態を有しており地域差は確認されない。一方、初期連房式登窯の窯体構造には様々な形態が存在したことが明らかになりつつある。また焼成器種については、大窯段階においてはいずれの大窯でも天目茶碗・小皿類・擂鉢の３種類を基本としており、第３段階後半以降、土岐川以北の地域を中心に黄瀬戸・瀬戸黒・志野といった「桃山茶陶」が焼成され、近年では土岐川以南の東部でも確認されている。しかし、登窯第１小期になると、土岐川以北の久尻地区・大萱地区では織部製品や御深井製品の生産が顕著であるのに対して、以南中央部や瀬戸窯側では天目茶碗の生産が未だ盛んで、地域・地区によって焼成器種に違いがみられることが知られており、連房式登窯導入期は大窯段階と異なり窯体構造や焼成器種に地域性が顕著に現れる時期であるといえよう。

表７　連房式登窯導入期における窯体構造の分類と変遷

<table>
<tr><th rowspan="2">地域
時期</th><th colspan="4">美　濃　窯</th><th colspan="3">瀬　戸　窯</th></tr>
<tr><th colspan="3">土岐川以北</th><th>土岐川以南東部</th><th colspan="3"></th></tr>
<tr><th>久尻地区</th><th>定林寺地区</th><th>大萱地区</th><th></th><th>赤津地区（大窯）</th><th>赤津地区（連房）</th><th>上水野地区</th></tr>
<tr><td>第１小期
前半</td><td>元屋敷窯（A1）
窯ヶ根４号窯（A2）</td><td>東洞３号窯
西洞２号窯（B）</td><td>弥七田１号窯
（F1）</td><td></td><td rowspan="2">赤津Ｂ窯</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>第１小期
後半</td><td>清安寺窯（C1）
（隠居表２号）</td><td>西洞３号窯（C1）
東洞２号窯（C2）</td><td>弥七田２号窯
（C1）</td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>第２小期</td><td></td><td></td><td></td><td>田ノ尻窯（D1）</td><td rowspan="2">窯元Ａ１窯</td><td></td><td>穴田２号窯1次窯（E1）</td></tr>
<tr><td>第３小期</td><td>八幡窯
窯ヶ根１号窯５面
（D2）</td><td></td><td></td><td>大川東３号窯（D2）</td><td>瓶子１号窯（F2）</td><td>穴田２号窯４次窯（E2）
穴田１号窯（D2）</td></tr>
<tr><td>第４小期
（以降）</td><td>窯ヶ根１号窯１面
（D3）</td><td></td><td></td><td></td><td>サカイ窯</td><td>瓶子２号窯（E3）
窯元Ａ２窯</td><td></td></tr>
</table>

（２）連房式登窯の導入と地域性の顕現

連房式登窯導入期における地域性をもう少し詳しくみていきたい。前段階の大窯後半期から窯が確認される土岐川以北では、久尻地区、定林寺地区、そして大萱地区で逸早く連房式登窯が導入される[6)]（表７）。登窯第１小期前半に久尻地区に導入された元屋敷窯や窯ヶ根４号窯は有段横狭間（Ａ類）、定林寺地区に導入された東洞３号窯や西洞２号窯は無段斜狭間（Ｂ類）で、これらの系譜は異なるもののどちらも瀬戸美濃窯にそれまでみられなかった外来の技術である。一方、大萱地区に造られた窯は連房式登窯の特徴である複数の焼成室をもつものの、狭間構造を持たず、また窯体前方が大窯の構造を有しており、久尻・定林寺地区とは異なる前代からの瀬戸美濃窯の窯体構造の特徴を受け継いだ連房式登窯（Ｆ類）が構築されている。

第１小期後半になると土岐川以北の窯体構造は無段斜狭間の流れを汲む窯体構造に統一され、久尻地区で第１小期前半に構築された有段横狭間の連房式登窯は受け継がれることなく消えてしまう。Ｂ類は床面に段をもつ有段斜狭間構造（Ｃ類）で横室形の上部構造をもつものへと変化し、前時期では異なる窯体構造を有していた久尻・定林寺・大萱地区で、同一の構造をもつ窯体が確認されるようになる。その後、瀬戸美濃大窯が独自に培ってきた窯体の構築技術を取り入れながら、狭間が有段縦狭間構造（Ｄ類）に変化し、その構造は近代まで使用されることとなる。

土岐川以南の東部地域では大川地区や水上地区に連房式登窯が確認される。第１小期の窯は発掘調査が行われていないためよく分かっていないが、第２小期には水上地区の田ノ尻窯、第３小期には大川地区の大川東３号窯が存在していたことが知られている。なお、田ノ尻窯、大川東３号窯の窯体構造はいずれもＤ類である。

瀬戸窯では大窯後半期の窯は一切みられなかったが、登窯第１小期になると再度窯が造られるようになる。しかし、その窯体構造は大窯で地域によっては第４小期まで使用が確認される。第２小期になると連房式登窯（Ｅ類）が構築されるものの、その窯体構造は美濃窯にみられるような完璧なものでなく、美濃窯と同様の構造をもつようになるのは第４小期である。

また、連房式登窯導入期になると、土岐川以北の地域では久尻地区・大萱地区を中心に織部生産を主体として行っており、擂鉢生産はほとんど行われていない。また引き続き御深井製品も焼成されており、

他の地域にはみられない高級志向の製品が生産されている。しかし、同じ土岐川以北に位置しながらも定林寺地区では織部・御深井生産は顕著ではなく、碗・皿・片口といった日常雑器が生産されている。土岐川以南の大川・水上地区では鉄絵皿や鉄絵鉢は極めて少なく、碗・皿・鉢・瓶・壺類などありとあらゆる日常雑器を焼成しており、この様相は瀬戸窯の上水野地区の穴田窯の様相に類似している。穴田窯では赤津・瀬戸地区と比べ天目茶碗や茶入などの茶陶関係の生産が少なく、また擂鉢生産もあまり多くはない。しかし、赤津・瀬戸地区とは異なり鉄絵皿や鉄絵鉢、黄瀬戸鉢を量産しており、日常雑器をバランスよく生産している。赤津地区と瀬戸地区は共通する要素は多いものの、瀬戸地区ではほとんどみられない擂鉢・内反り高台の天目茶碗・折縁皿・茶入・向付などが生産され（藤澤1998)、連房式登窯段階には地域性が確認される。

では、地域性が生み出される要因はどこに求められるのであろうか。まず大窯第３段階後半に瀬戸窯から窯が消え、土岐川以北の地域に集中して大窯が分布しているが、こうした分布構成をとる要因として為政者との関係性を指摘される。すなわち、織田信長による美濃統一以前にあたる第３段階前半までと、統一後の第３段階後半以降で大きく窯の分布が変わるのは、製品の流通経路と関連し、発給文書などからも分かるように信長政権が積極的に窯業生産に関与していたことが背景にあるという。また信長の死後は、替わって東濃地方を支配した豊臣系の大名である森氏が関与していた可能性が極めて高い（藤澤1993)。

しかし、慶長５年（1600）の関ヶ原の合戦以降、東濃地方は幾つかの支配地域に分けられてしまう（図９)。慶長４年（1599）に東濃地方を治めていた森氏が転封され、一時田丸氏の支配下に置かれるが、慶長５年以降、土岐川以北の地域で旧土岐郡に属する久尻地区は旗本妻木氏、定林寺地区は岩村藩松平氏、小名田地区は旗本馬場氏、旧可児郡に属する大萱地区は千村・山村氏らの木曾衆が、土岐川以南の地域に位置する水上・大川地区は小里氏、郷ノ木地区は遠山氏が治めるようになる。また瀬戸窯が展開する尾張東部は、慶長12年（1607）に尾張徳川家の支配下に入り尾張藩領となり、連房式登窯導入時期にはこのような支配体制が敷かれていた。

（３）妻木氏と土岐川以北の美濃窯

さて、第13代美濃国土岐郡妻木城主の妻木頼忠の父である妻木伝兵衛貞徳の娘は、慶長７年（1603）から唐津城を築城しその地を治めた寺沢志摩守広高に嫁いでおり、妻木氏と寺沢氏は縁戚関係にあった。久尻地区の元屋敷窯は加藤四郎右衛門景延が肥前で学び構築した窯で、同地区には他に窯ヶ根４号窯にもみられるように、肥前系の有段横狭間構造をもつ連房式登窯が導入されている。元屋敷窯は「瀬戸大窯焼物並唐津窯取立之由来書」によると、「四方高壁ヲ掛其内ニ竈打ツ也、是ハ余竈ノ者ニ為秘密之ナリ」と、その窯は他窯の者には秘密にされていて、技術は門外不出だったという。新たに瀬戸・美濃窯にもたらされた焼成技術は従来大窯を使用してきた工人らには、思いもよらないものであっただろう。

さらに、貞徳は慶長20年（1615）に千村・山村氏らの木曾衆が治めていた大平村から、妻木氏の領地である笠原村へと陶器生産者を移動させていることが「妻木伝兵衛貞徳判物」から認められる。妻木氏は領内に工人らを誘致する際、諸役の免除や焚木伐採や新田開発の許可、米の配布など特権をつけ優遇して迎え入れており、工人を誘致し領内で焼かせている背景には妻木氏の力が働いているものと考えられる。こうした動きは、大窯第４段階後半に木曾衆所領である大萱地区牟田洞窯にみられた多数の窯印が、大窯第４段階末から登窯第１小期前半にかけて妻木領である久尻地区元屋敷窯・窯ヶ根４号窯で同一のものがみられることからも、工人らが千村・山村氏の所領から妻木氏の所領へと移っていること

が明らかである。こうした唐津からの技術導入には唐津城城主である寺沢氏と縁戚関係である妻木氏の意向が働いていると考えられよう。

また文書等は残っていないものの、定林寺西洞２号・東洞３号窯にみられる無段斜狭間構造の連房式登窯は典型的な朝鮮系割竹形（関口1979）で、これまで瀬戸美濃窯にはない構築技術であるため、定林寺地区でも松平氏がその導入に関与している可能性は極めて高い。なお､同じ土岐川以北にあっても、織部や御深井を焼成した久尻地区と、碗・皿・片口を焼成した定林寺地区は支配者の違いによってこのような焼成器種の違いが認められることが指摘されており（藤澤1998)、こうしたことからも支配者の権限が領内の窯業生産に対し働いていることが推測できる。

一方､前代の大窯の特徴を有する弥七田窯は千村・山村氏ら木曾衆が治めていた地域に立地している。木曾衆は長年に渡って木曾を治めており、領有する木曾山では建築部材に適した木材が伐採され、運材河川として木曾川が機能していた。このような運材機能をもつ木曾川と木曾山は豊臣秀吉によって設置された木曾代官が支配し、関ヶ原の合戦以降、徳川家康はこの体制を受け継いで木曾旧臣である山村氏を木曾代官と任命している（所1983)。そのため、千村・山村氏らは木材関係に対しての権限を持っていたことは明白である。

さて、窯印が最も多くみられる牟田洞窯が位置する大萱窯跡群の主要操業時期は、森氏が治めていた時期から木曾衆が領有した初期に当たる。牟田洞窯は窯印から久尻地区とのつながりが確認され、様々な窯場から工人が寄せ集められている。大萱窯跡群は森氏が城主を勤める金山城(可児市兼山字古城山)

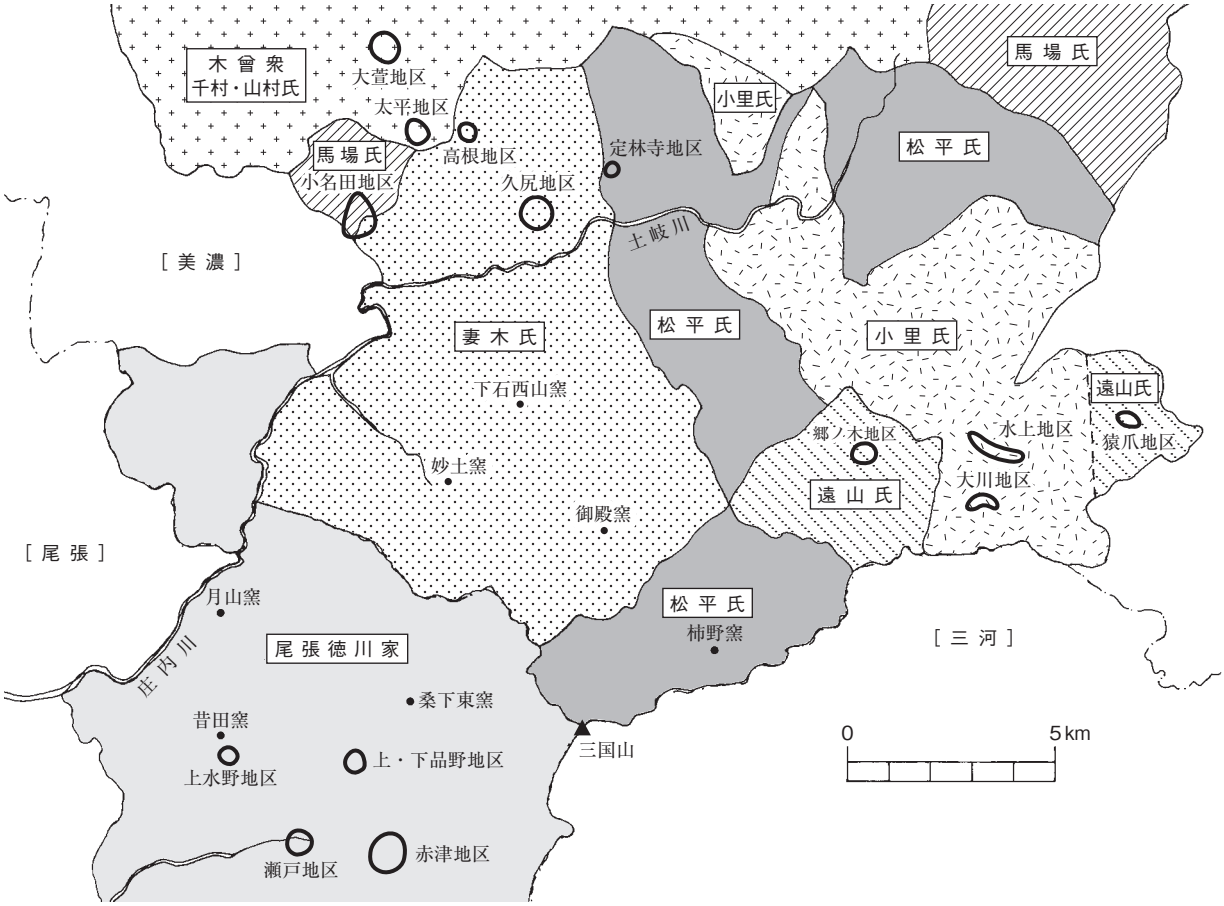


図９　連房式登窯導入期における支配領域

に最も近い窯場であるが、牟田洞窯に少なくとも11種類の窯印が確認されることからも、森氏の力が強く及んでいる可能性がある。しかし、木曾衆が大萱地区を領有する連房式登窯段階になると、久尻地区に再び戻っていることが確認され、久尻から大萱、大萱から久尻へと移動していることが分かっている。また古記録に記されように大平村から妻木領笠原村へと工人が移っており、大萱地区から妻木領に集中して移動が行われている。森氏が移封され、木曾衆がその地を治めるようになると、木材関係に力をもっていた千村・山村氏であるが一方で焼き物生産に関する権限は弱く、代わって連房式登窯を導入し窯業生産に力を入れていた妻木氏所領の久尻地区へと工人が移動してしまうと考えられる。なお、弥七田窯の窯体構造は、朝鮮半島や肥前にはみられないものであるため、大窯にもみられる瀬戸美濃窯独自の技術である天井支柱によって部屋を区切ることが行われたのは自然の流れと捉えられよう。

（４）土岐川以南の美濃窯と瀬戸窯

瀬戸窯では第１小期になると、大窯第３段階後半以降確認されなかった窯が再び出現するが、窯体は前段階の大窯構造である（表７）。赤津地区では第４小期まで大窯構造の窯が使用されており、また同地区では第３小期から連房式登窯が築かれるが窯体前方に大窯の特徴をもつなど、大窯の影響が依然として強いことが窺われる。上水野地区穴田窯では赤津地区より早く第２小期に連房式登窯の平面形を導入しており、第３小期には完全な連房式登窯の構造をとるようになる。すなわち、瀬戸窯では第３小期になるまで完全な連房式登窯の構造を知り得なかったと考えられる。

美濃窯の水上・大川地区、郷ノ木地区は大窯第３段階後半以降に瀬戸からの工人が移動してきた地域の一つであるが、瀬戸窯では慶長15年（1610）に尾張藩の国奉行から瀬戸窯赤津村と下品野村に工人たちが帰ることを認めた文書が発給されている。これに関して古記録によると、この時赤津村へ移動した工人は美濃窯の小里氏の領地である水上村から、下品野村へ移動した工人は遠山氏の領地である郷ノ木村から移動したと記されている。上水野地区穴田窯の廃絶については「瀬戸竈焼物師伝記」によると、上水野村かま之洞で生産を行っていた４人の工人が、同地が御林方奉行所役人衆の屋敷となるために各地に引っ越したという[7)]（藤澤1993）。４人の内、３人は旧妻木領へと移動しており、穴田窯は第２小期から操業が開始され、工人らは穴田窯を開窯する以前に居た場所に戻ったものと想定すると、穴田窯の操業開始には妻木領の工人が関与していたと推測されよう。焼成器種に関しても瀬戸窯の上水野地区穴田窯の類似性が指摘されている（藤澤1998）など、美濃窯の中でも土岐川以南に位置する窯は瀬戸窯とのつながりが強く確認される。

さて、この時期に尾張藩領である瀬戸窯へ工人の誘致が行われている理由として、名古屋城築城及び清須越しとの関係が指摘されている（藤澤1993）。尾張への近世瀬戸・美濃窯の流通は陸送で行われているが、慶長15年に名古屋城の築城が開始され、清須越しにより尾張西部の清須を中心としていた当地方の政治経済の中心が東部の名古屋へと移るにあたり、尾張東部地域への焼物の運送には美濃窯よりも瀬戸窯の方が距離的に有利であることから、尾張徳川家が藩内に工人を誘致したという。

以上のように、大窯段階では織田・豊臣政権下で東濃地方の支配体制は各地区でもさほど違いがなかった。しかし、連房式登窯段階になると各地域で支配者が異なることによって、窯業に対する権限や目的に差違が生まれ、その結果、窯体構造や焼成器種に変化が生まれたものと考えられる。また、慶長年間後期には工人の移動が特に尾張藩領や妻木領内へと頻繁に行われており、尾張徳川家では名古屋城建設や清須越しに伴う焼き物確保のため、妻木氏は大窯以来の窯業生産により領国経済を維持するために、工人らに特権を与え領内への誘致を積極的に行っていることが確認されよう。　（森まどか）

おわりに

以上、連房式登窯導入期における瀬戸・美濃窯の地域性を指摘するとともに、その背景について検討を加えた。古記録や当該期の窯の分布および窯印の変遷から、大窯後半期には織田信長や豊臣系の森氏の所領であった東濃地方が、関ヶ原の戦い以降の幕藩体制成立期における新しい領主等の出現により、美濃窯側は妻木氏・木曾衆・小里氏などの所領、瀬戸窯側は尾張藩領となる中で地域性が生じた可能性が高いことを明らかにした。なお当該期は瀬戸・美濃窯製品の流通が、畿内の大都市圏から尾張名古屋～江戸圏へと転換する重要な画期となっている。製品の出土分布から流通圏・流通経路の確定など流通構造の解明が望まれる。

本稿を草するにあたり、可児市教育委員会の長瀬治義氏・長江真和氏から貴重なご教示・ご助言をいただいた。記して感謝を申し上げます。

註

1） 伊藤嘉章氏は、大窯生産の様相や展開を器種の消長や器形の変化、釉薬や装飾技法、匣鉢詰め技法から前Ⅰ期・前Ⅱ期・後Ⅰ期・後Ⅱ期の４時期に大別している（伊藤1988）。

2） 伊藤氏は小形化の傾向について、大窯後期様式における生産の拡大と結びつけて考えている。後Ⅱ期には窯体の全長が前Ⅱ期よりも縮小するが、焼成室の規模はほぼ変わっておらず、高火度の焼成が必要な施釉陶器は前面部分で焼成され、逆に高火度を必要としない擂鉢等の雑器的な製品を焼成した煙道部に近い部分の面積が切り捨てられている。後Ⅱ期には黄瀬戸・瀬戸黒・志野といった桃山陶器が焼成され始める時期で、それらを生産の主体として焼成の効率化を図ったために小形化したものと推測している。

3） 今回扱ったＡ類は大窯第３段階後半以前の窯体にその特徴がみられ（加藤2002）、さらに細分していくことが可能であるが、今回は対象外であるため扱っていない。

4） Ａ２類に比定される窯ヶ根４号窯は窯体の実測図から、側壁が一貫して造られているようで、また天井支柱を有していることからも、芋虫形ではなく横室形の上部構造が想定できる。

5） その後、窯印が急増するのは江戸時代後期以降のようで、瀬戸窯側では下半田川村のかみた窯、瀬戸村の勇右衛門窯などで、匣鉢・匣鉢蓋・棚板・ツクなどの窯道具に多くの窯印が認められるようになる（藤澤1986・1988）。

6） 妻木城の麓には初期連房式登窯である御殿窯の存在が知られ、織部生産が行われていることから第１小期に比定される窯である。発掘調査は行われておらず、採集遺物には窯道具に肥前系の焼台（Ｉ字形トチン）がみられ、製品に残る痕跡から胎土目積みによって製品が窯詰され焼成されていたことが分かっている。こうした焼成技法は瀬戸美濃窯ではみられない技法であるため、瀬戸美濃窯の工人ではなく唐津の工人が妻木領内で焼成していたと考えられる。

7） 引っ越し先として「春日井郡半田川村」「濃州妻木村之内三本松」「同州同村之内かじかいりと申所」「同州新牧村」が挙げられており、このうち妻木村之内三本松は窯下４号窯、同村之内かじかいりは鍛冶ヶ入３号窯、同州新牧村は有牧１号窯が想定されている（今井1997・金子2015）。

引用・参考文献

加藤唐九郎1933『黄瀬戸』寶雲舎
小山冨士夫1962「桃山の茶陶」『日本の陶磁』中央公論美術出版
大江爺1970『土岐市中央道自動車道関連遺跡 埋蔵文化財発掘調査報告書』土岐市教育委員会
楢崎彰一・井上喜久男1976『妙土窯跡発掘調査報告』笠原町教育委員会
関口広次1979「美濃・妙土大窯の復元とその構造について」『物質文化33』物質文化研究会
田口昭二ほか1979『大川東窯第３群緊急発掘調査報告書』瑞浪市教育委員会
小澤一弘ほか1981『田ノ尻古窯跡群発掘調査報告書』瑞浪市教育委員会
住田誠行1982「瑞浪の古窯」『研究紀要第１号』瑞浪市陶磁資料館
所三男1983「木曾山」「木曽川」『国史大辞典第４巻』吉川弘文館
楢崎彰一ほか1984『高根山古窯跡群発掘調査概報』土岐市教育委員会
藤澤良祐1986「瀬戸大窯発掘調査報告」『研究紀要Ⅴ』瀬戸市歴史民俗資料館
田口昭二・若尾正成ほか1987『尼ヶ根古窯群発掘調査報告書』多治見市教育委員会
藤澤良祐ほか1987「西茨第１・２号窯発掘調査報告」『研究紀要Ⅵ』瀬戸市歴史民俗資料館
伊藤嘉章1988「瀬戸・美濃における大窯生産」『研究紀要第２号』岐阜市歴史博物館
井上喜久男1988「美濃窯の研究（１）―15～16世紀の陶器生産―」『東洋陶磁第15・16号』東洋陶磁学会
田口昭二ほか1988『隠居西窯跡発掘調査報告書』土岐市教育委員会
伊藤嘉章1989「瀬戸・美濃大窯の窯体構造―その変遷と意義―」『美濃の古陶 No. ３』美濃古窯研究会
藤澤良祐1989「本業焼の研究（３）―下品野村・下半田川村を中心に―」『研究紀要Ⅷ』瀬戸市歴史民俗資料館
林順一・加藤真司ほか1992『隠居表１・２号窯跡発掘調査報告書』土岐市教育委員会
若尾正成ほか1992『滝呂日影１号窯』多治見市教育委員会
藤澤良祐1993『瀬戸市史 陶磁史篇四』瀬戸市
桃井勝・今井静夫1996『柿野１号窯発掘調査報告書』土岐市教育委員会
山内伸浩ほか1997『小名田窯下古窯跡群発掘調査報告書』多治見市教育委員会
今井静雄1997「第10章　近世の窯業」『土岐津町誌』土岐津町誌編纂委員会
林順一・長瀬未左子ほか1998『定林寺西洞古窯発掘調査報告書』㈶土岐市埋蔵文化財センター
藤澤良祐1998『瀬戸市史 陶磁史篇六』瀬戸市
藤澤良祐1999「瀬戸・美濃の天目について」『茶の湯の名碗―和物茶碗―』茶道資料館
加藤真司・長瀬未左子ほか2000『八幡窯跡発掘調査報告書』土岐市教育委員会・㈶土岐市埋蔵文化財センター
青木修2000『瓶子窯跡』㈶瀬戸市埋蔵文化財センター
藤澤良祐2001「中近世瀬戸・美濃窯の紀年銘資料について」『研究報告第89集』国立歴史民俗博物館
河合君近2002『国指定史跡 小長曽陶器窯跡』㈶瀬戸市埋蔵文化財センター
齊藤孝正2002「窯印」『日本陶磁大辞典』角川書店
加藤真司ほか2002『元屋敷陶器窯跡発掘調査報告書』土岐市教育委員会・㈶土岐市埋蔵文化財センター
近藤真人ほか2004『下石西山窯跡発掘調査報告書』土岐市教育委員会・㈶土岐市埋蔵文化財センター
藤澤良祐2004「「古瀬戸系施釉陶器窯」の成立過程」『下石西山窯跡発掘調査報告書』土岐市教育委員会・㈶土岐市埋蔵文化財センター
中嶌茂2005『土岐市中央自動車道関連遺跡出土遺物整理報告書』土岐市教育委員会・㈶土岐市埋蔵文化財センター
高橋健太郎ほか2006『窯ヶ根窯跡発掘調査報告書―平成13年度・14年度の調査成果―』土岐市教育委員会・㈶土岐市埋蔵文化財センター
河合君近2008「第３章第４節　昔田窯跡」『瀬戸窯　瀬戸市内重要遺跡試掘調査報告』㈶瀬戸市文化振興財団
張替清司ほか2008『元屋敷跡発掘調査報告書』土岐市教育委員会・㈶土岐市埋蔵文化財センター
張替清司ほか2009『高根古窯跡群発掘調査報告書―工房跡の範囲確認調査―』土岐市教育委員会・㈶土岐市埋蔵文化財センター
小澤一弘ほか2011『桑下東窯跡』（公財）愛知県教育・スポーツ振興財団愛知埋蔵文化財センター
松澤和人ほか2012『音玄窯跡』㈶瀬戸市文化振興財団
小澤一弘ほか2013『桑下城跡』（公財）愛知県教育・スポーツ振興財団愛知埋蔵文化財センター
金子健一2015「江戸時代前期における瀬戸窯と美濃窯（一）」『研究紀要第19輯』（公財）瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター
金子健一ほか2016『織豊期の瀬戸窯と美濃窯』（公財）瀬戸市文化振興財団
長江真和ほか2016『大萱古窯跡群発掘調査報告書Ⅰ―牟田洞古窯跡・大萱窯下古窯跡―』可児市教育委員会
愛知学院大学文学部歴史学科2016『大萱窯跡群 牟田洞窯跡第１・２次発掘調査概要報告書』
愛知学院大学文学部歴史学科2017『大萱窯跡群 弥七田窯跡第１次発掘調査概要報告書』
藤澤良祐2017「連房式登窯導入期における天目茶碗について」『大萱窯跡群　弥七田窯跡第1次発掘調査概要報告書』愛知学院大学文学部歴史学科
森まどか2017「連房式登窯導入期における窯体構造について」『大萱窯跡群　弥七田窯跡第1次発掘調査概要報告書』愛知学院大学文学部歴史学科
愛知学院大学文学部歴史学科2018『大萱窯跡群 弥七田窯跡第１・２次発掘調査概要報告書』

D区グリッド調査前全景（南東から）

D区完掘後全景（南から）

D区覆屋柱穴（北から）

図版１　第２次調査D区関係（１）

Ｄ区北壁（南から）

Ｄ区北壁左側（南から）

Ｄ区北壁右側（南から）

図版２　第２次調査Ｄ区関係（２）

D区１号窯左側壁（東から）

D区１号窯右側壁（西から）

D区南壁（北西から）

図版３　第２次調査D区関係（３）

Ｅ１区トレンチ調査前全景（北から）

Ｅ１区完掘後全景（南から）

Ｅ１区１号窯左側壁（南から）

図版４　第２次調査Ｅ区関係（１）

Ｅ２区完掘後全景（南から）

Ｅ２区２号窯床面（北から）

Ｅ２区北壁（南から）

図版５　第２次調査Ｅ区関係（２）

Ｅ２区２号窯狭間柱（南から）

Ｅ区北壁（南から）

Ｅ区完掘後全景（北から）

図版６　第２次調査Ｅ区関係（３）

Ｆ区トレンチ調査前全景（北西から）

Ｆ区東側完掘後全景（西から）

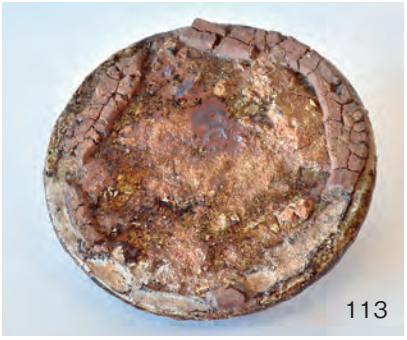
Ｆ区西側完掘後全景（北西から）

図版７　第２次調査Ｆ区関係（１）

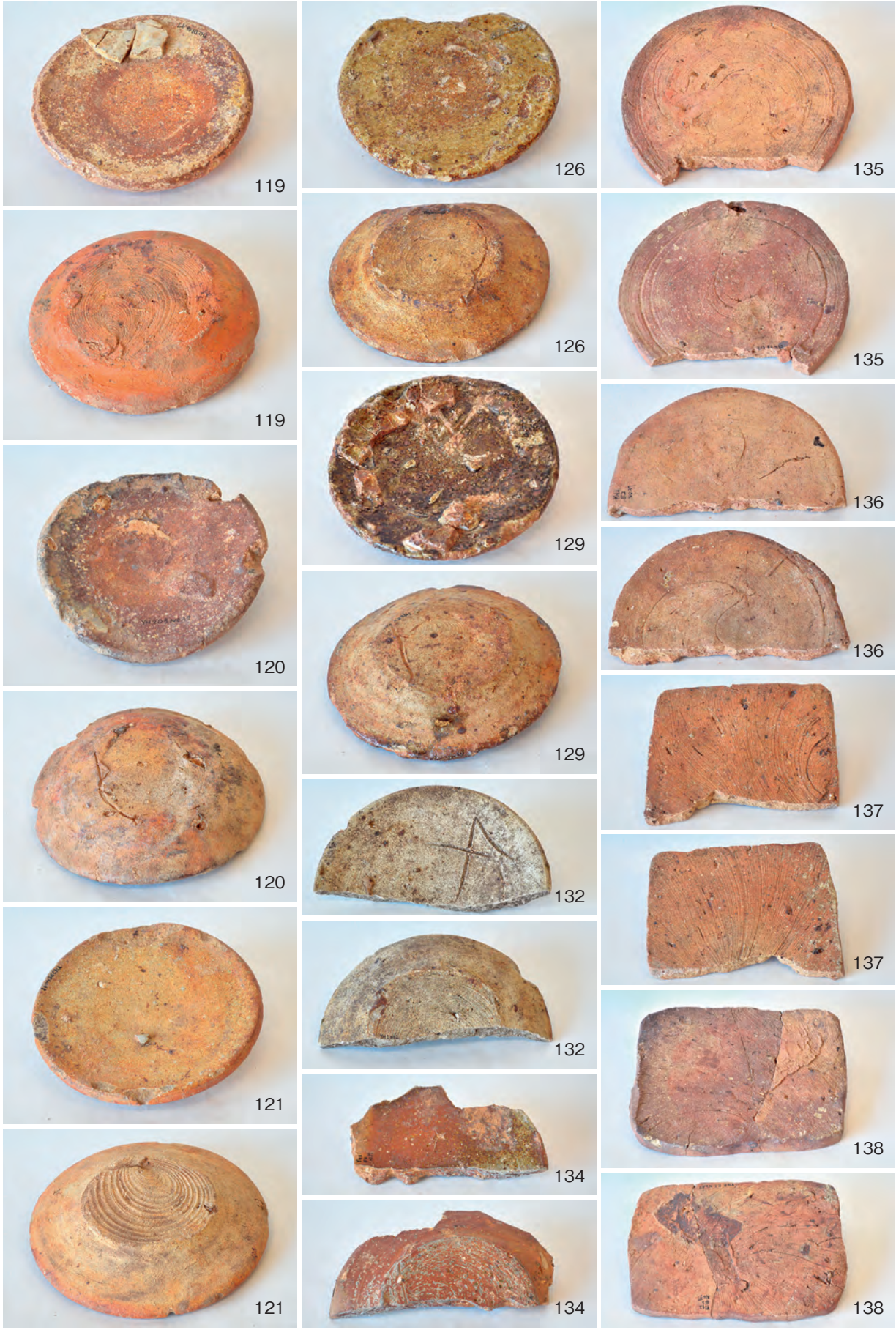
図版８　第２次調査出土遺物（１）

図版９　第２次調査出土遺物（２）

図版10　第2次調査出土遺物（3）



図版１１　第２次調査出土遺物（４）



図版12　第2次調査出土遺物（5）

139

139

140

140

142

143

143

144

145

146

155

155

155

156

156

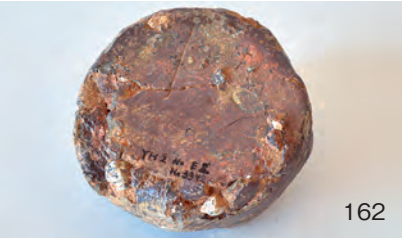
160

160

157

157

162


162

151

151

173

173

図版13　第2次調査出土遺物（6）

図版14　第２次調査出土遺物（７）

報　告　書　抄　録

ふりがな	おおがやかまあとぐん やしちだかまあと
書名	大萱窯跡群 弥七田窯跡第１・２次発掘調査概要報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知学院大学考古学発掘調査報告
シリーズ番号	26
編著者名	藤澤良祐・森まどか・森村知幸・伊藤真央・木藤穣・小林万容・佐藤美鈴 鈴木愛実・髙野夏姫・堀内有・三ツ本樹純・井上雄介・勝野友陽・加藤竜生 田口芽依・中田智也・長縄憲治・前田真奈・松岡里奈・脇田遼・赤山純里 猪飼充・大森裕朗・大矢敬子・糟谷貴幸・川端ちえ美・田浦舞衣・西森睦月 安田彩音・山田紗希
編集機関	愛知学院大学文学部歴史学科
所在地	〒470-0195　愛知県日進市岩崎町阿良池12　TEL 0561-73-1111
発行年月日	平成30年３月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
弥七田古窯跡	岐阜県可児市久々利253-1	21214	04886	35度23分55秒	137度08分24秒	20150817～20150827	約16㎡	学術研究
						20160815～20160827	約28㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
弥七田古窯跡	生産遺跡	近　世	窯体２基（1号窯・2号窯）	天目茶碗・丸碗・端反碗 中皿・向付・擂鉢・片口 灯明皿・匣鉢・焼台・ハリ	１号窯は狭間が無い連房式登窯

愛知学院大学考古学発掘調査報告26

大萱窯跡群 弥七田窯跡第1・2次発掘調査概要報告書

発行日　2018・3・31

発行者　愛知学院大学文学部歴史学科

〒470-0195　愛知県日進市岩崎町阿良池12

Tel（0561）73-1111　Fax（0561）73-8179

編集　考古学コース　藤澤良祐・伊藤真央・髙野夏姫

印刷　株式会社 あるむ